ISSN 1344-476X

財団法人 東洋文庫年報

平成18年度

財団法人 東洋文庫

財団法人　東洋文庫年報　平成18年度

目　次

Ⅰ　平成18年度の東洋文庫……1

Ⅱ　図書事業……4
1．資料の収集……4
2．資料の整理……5
3．資料の利用と複写サービス……6
4．書庫資料の見学と研修……10
5．資料の保存整理と複製……11
6．業務の機械化……11
7．書庫内資料と書架スペース……13

Ⅲ　研究事業……15
1．調査研究……15
A　超域アジア研究……15
B　アジア諸地域研究……17
C　平成18年度　研究部5部門11研究班　研究組織……27
D　地域研究プログラム……34
E　東洋文庫研究員等・研究課題一覧……36
F　日本学術振興会科学研究費補助金による調査研究……42
G　その他の民間学術助成金による調査研究……47
2．学術図書出版……49
A　定期出版物刊行……49
B　論叢等出版……49
3．講演会……50
A　研究情報普及……50
B　データベース公開……53
4．学術情報提供……53
A　研究者の交流および便宜供与のサービス……53
B　各種研究会等への会場提供サービス……57
C　研究資料の復刻・増刷の刊行サービス……57

D　参考情報提供のサービス……57
E　広報普及……57
5．研究員等の研究業績……58

Ⅳ　業務報告……93
1．総務報告……93
2．人事報告……94
3．会計報告……97

Ⅴ　役職員名簿……105
1．役員……105
2．評議員……106
3．東洋学連絡委員会委員……106
4．名誉研究員……107
5．職員・研究員……108
6．客員研究員……111

Ⅰ　平成18年度の東洋文庫

平成18年度において東洋文庫が実施した諸事業の経過、及び内容の要旨は次の通りである。

まず本年度内に生じた役員・職員の異動について述べる。理事については、6月の評議員会にて、任期満了となった斯波義信、石井米雄、中根千枝の各氏が再任され、原啓芳氏が退任、山川尚義氏が新任された。監事、評議員の異動は無かった。次に職員であるが、研究部松本明研究員が定年退職された他、総務部中沢元幸参事が依願退職された。4月に出向着任した山川尚義総務部長は7月より専務理事兼総務部長となり、10月より当文庫の常勤役員となった。10月には総務部会計課に牧祐紀子参事が着任した。又、後述のイスラーム地域研究資料室に人間文化研究機構より柳谷あゆみ氏が出向着任した。

本年度の当文庫の活動の特記事項としては、国立国会図書館との関係の見直しと、財政支援獲得と言う2つの大きな課題に取り組んだ事が挙げられる。

まず、国立国会図書館との関係であるが、国会図書館側の申し入れに応じ、昭和23年以来継続してきた当文庫と国会図書館との支部契約の解消につき種々協議を進め、平成21年3月末をもって現契約を解消することで合意した。19年度早々に正式に合意書調印の予定である。これに伴い、平成19年4月より、国会図書館よりの派遣職員が順次削減されていく事となるので、当文庫としての体制の整備が必要であり、コストの増加にもつながる。一方、財政問題であるが、昨今の低金利下、基本財産の金利収入は年間5千万円程度の低水準で推移しており、上記国会図書館との契約解除も勘案すると、ここ数年間は毎年約1億円程度の運営資金の追加手当てが必要となる。三菱金曜会側でもこの事情を理解頂き、従来の維持会による寄付金に加え、維持会費増額と臨時寄付金により支援を頂ける事となった。

懸案である当文庫の書庫の不足、建物の老朽化問題については、三菱金曜会にて「東洋文庫建設準備委員会」の諮問をベースに検討結果、湯島への移築を前提に約30億円の建替え・移転の資金支援を決定頂いた。然しながら、その前提となる文京区による湯島総合体育館移設に対する反対運動があり、当初予定より既に約1年の遅れが出ている。次年度夏頃までに移転の目処が付かない場合は、現場所にての建替えを具体的に検討する事としたい。

図書部関係では、台湾中央研究院歴史語言研究所との間で締結した学術交流協定に基づき、先方の「漢籍電子文献資料庫」の利用を開始するとともに、当方よりはモリソン・パンフレット6,000種のマイクロフィルム提供を開始した。又、相互に訪問研究者の派遣も実施した。ハノイ漢文チューノム研究所とは、同研究所が所蔵する碑文・鐘銘の拓本の影印本を当方の memoirs との交換で相互に入手する合意が出来た。一方、当文庫のデータベース化は着実に進展しており、本年度新規データベース入力は合計約13千件であり、データベースへの月間アクセス数は約２万件のレベルに達している。本年度の当文庫の図書の増加は、購入約5,500冊、受贈約5,000冊、合計約10,500冊であった。

１月には当文庫５階の貴重書庫内に特別保管室を設置した。当文庫の代表的な貴重書をより安全に保管すると共に、ＶＩＰ訪問等に対応する常設展示室としても活用する事とし、取り敢えず約30点の貴重書を備え展示した。

研究部では、平成15年度より始まった新しい研究体制が４年目を迎え、定期出版物６冊の刊行に加え、論叢類７冊（内２冊は英文等）を発刊した。東洋学講座では、春は「現代イスラームを語る」、秋は「近現代中国の地域社会と日本」という統一テーマの下、計６回の講座を開講した。又、特別講演会を６回、研究会を１回開催した他、各種研究会・講演会を計103回開催し、合計参加人数は 1,021人であった。又、受入れ外国人研究者11名、外国人研究者への便宜供与は、中国・台湾・米・韓・仏・独・英・キルギスタン・レバノン・ポーランド・ウズベキスタン・ベトナムより約60名に達した。

10月には人間文化研究機構を共同拠点として、早稲田大学、東京大学、上智大学、東洋文庫の連携によるイスラーム地域研究が発足した。当文庫はその資料センターとして、研究部の下部組織として「イスラーム地域研究資料室」を発足し、室長には三浦研究員が就任し、研究員として柳谷あゆみ氏が出向着任した。

当文庫の研究活動を外部の目で評価すべく外部評価委員会を設置、早稲田大学吉田順一教授に委員長をお願いした。12月末にはその評価報告書が提出され、基本的には我々の研究活動を高く評価頂いたが、種々の指摘事項については今後の研究活動の中で順次生かして行きたい。

次に、18年度中に文庫全体の問題として幾つかの改革を実行した。

まず、当文庫の清掃業務については、従来は用務員が行っていたが、これを外注する事とし、10月に用務員２名の契約を終了し、土曜日の管理業務も含めエムシー・ファシリティーズ社に一括委託した。又、これに関連し、セルフ給湯設備

を設置した。11月には、当文庫の電話をダイヤルイン方式に改め、又、建物の耐震補強工事を実施すると共に、非常食の備蓄を開始した。

一方、内部統制の面では、当文庫の諸規定の見直しを行い、「出張旅費及び交通費規程」「給与規程」「会計処理規則、附則１」「会計処理規則、附則２」「権限規定、実務指針」「組織運営規定」の改定・制定を行い、東洋文庫規程集を作成した。又、人事面では、はじめて成績考課制度を導入し、勤務業績を反映した昇給を実施した。

当文庫の会計監査については、従来お願いしていた田村紀彦公認会計士より契約終了の申し出があったので、新たに監査法人トーマツを起用する事とした。18年度は公益法人の新会計基準に移行する年度でもあり、建物・設備の過年度分を含む減価償却、備品の棚卸と過年度分を含む減価償却、図書台帳の作成、頒布用図書の棚卸、維持会特別会計の廃止、特定会計の廃止、等々、移行には相当の労力を費やした。この会計基準変更に伴い、約715百万円の経常外費用を計上したが、当文庫の会計面を新基準に沿った形で整備する事が出来た。

当文庫が過去に刊行した寄贈用・頒布用図書約７万冊の棚卸しと抜本的見直しを実施。継続保存は寄贈用約９千冊、頒布用約６千冊の計約15千冊とする事とし、残りは図書館・研究所・研究者等に寄贈する事とした。

普及活動の面では、８月に三菱金曜会幹部に対する特別展示会を開催し、国宝・重要文化財を含む約60点の貴重書・準貴重書を出陳した他、三菱広報委員会、三菱月曜会、関西テレビ会長、ハーバード大学理事等々、数次に渡り特別展示会を開催した。又、三菱金曜会ホームページに東洋文庫の紹介を掲載して頂いた。懸案の東洋文庫80年史もいよいよ刊行の運びとなった。又、一般の方々にももっと東洋文庫への関心を持って頂き、普及活動を強化する為、個人を対象とする「友の会」（年会費５千円）を発足させた。

Ⅱ 図 書 事 業

1．資 料 の 収 集

（1）資料購入

本年度資料購入費の支出総額は26,263,252円で、各部門別の冊数内訳は以下のとおりである。

	和漢書（うち非図書）	洋書（うち非図書）	計
超域・現代中国研究	401(67)	0	401(67)
超域・現代イスラーム研究	25	2,075	2,100
東アジア研究	650	7	657
内陸アジア研究	3	157(20)	160(20)
インド・東南アジア研究	0	271(21)	271(21)
西アジア研究	0	578	578
共通（継続・大型資料）	279(75)	104	383(75)
計	1,358(142)	3,192(41)	4,550(183)

※単位：冊（非図書資料はマイクロフィルム１リール、ＣＤ１枚を１冊に換算）

主な購入図書としては以下のものがある。

甘粛人民出版社刊　中国蔵西夏文献１―８巻	８冊
エジプト、シリア刊行アラビア語資料	781冊
イラン発行ペルシア語資料	1092冊
トルコ発行トルコ語資料	627冊
中央アジア諸国発行資料	223冊
ベトナム語新聞マイクロフィルム	21リール
山崎元幹満鉄関連資料マイクロフィルム	34リール

（2）資料交換

出版物交換の実績は以下のとおりである。

区　分	受　　贈			寄　　贈		
	和漢書(冊)	洋書(冊)	計(冊)	国内(冊)	国外(冊)	計（冊）
単　行　本	673	1,090	1,763	790	1,231	2,021
定期刊行物	2,550	566	3,116	3,307	2,364	5,671
非図書資料	1	0	1	0	0	0
計	3,224	1,656	4,880	4,097	3,595	7,692

主な受贈資料としては、以下のものがある。

韓国中央文化財研究院寄贈　発掘調査報告書　50冊
笹川平和財団寄贈　中央アジア関係洋書　12冊
民族文化推進会寄贈　韓国文集叢刊等　71冊
山崎元一氏寄贈　インド学関係洋書　421冊

資料室では上記以外に重複図書等の有効活用を図るため、内外の諸機関に交換用の図書リストを提供しているが、2006年度は行わなかった。

（3）蔵書数

収蔵する蔵書総数は934,825冊で、和漢書527,364冊、洋書377,661冊、複写資料29,800冊である。

2．資 料 の 整 理

（1）図書

整理冊数は次のとおりである。

和漢図書1,559冊（うちマイクロフィルム172リール）
欧米語図書　1,316冊
アジア諸言語図書　1,643冊

整理した主な図書

（1）　新編中華人民共和国地方志　136冊
（2）　上海道契　29冊
（3）　北京図書館蔵家譜叢刊　閩粤僑郷巻　50冊
（4）　日本関東憲兵隊報告書　第1・3輯　42冊
（5）　中国民族問題報告書コレクション　61冊

（6） 林孝勝氏収集東南亜華僑華人関係資料　167冊
（7） 中国近代史資料マイクロフィルム　政治史地資料編・経済資料編
115リール

（2）雑誌

本年度の受入タイトル・冊数は次のとおりである。なお、そのうち新規受入誌は和・中・韓文103タイトル、欧文50タイトルである。

	タイトル数		冊　数	
	和・中・韓	欧	和・中・韓	欧
受贈	744	192	2,550	566
購入	156	103	1,460	431
小計	900	295	4,010	997
計	1,195		5,007	

（3）新聞

本年度は21種（何れも中文）を受入れた。

3．資料の利用と複写サービス

（1）閲覧サービス

本年度、閲覧証の新たな交付は143名で、内訳は教職員51名（外国人16名）、研究機関関係者11名（外国人6名）、大学院生37名（外国人6名）、大学生36名（外国人5名）、その他8名（外国人6名）であった。

閲覧開館日は228日、利用者数は2,527名、利用資料数36,573冊で、詳細は次のとおりであった。

なお、東洋文庫研究員および職員の研究室等での資料の利用は延べ974名、2,483冊であった。

開館日数および閲覧者数

	開館日数	閲覧者数	日平均	昨年同月比 (△印は減)
平成18年 4月	(日) 19	(人) 182	(人) 10	(人) 2
5	19	199	11	△ 7
6	21	224	11	12
7	19	211	12	△14
8	22	279	13	17
9	19	224	12	△17
10	20	210	11	28
11	16	175	11	△60
12	18	200	12	△35
平成19年 1月	17	197	12	24
2	18	223	13	2
3	20	203	11	△40
計	228	2,527	11	△88

閲覧カウンター出納冊数

	和　書		漢　書		洋　書		合　計		日平均	昨年同月比
	部　数	冊　数	部　数	冊　数	部　数	冊　数	部　数	冊　数		(△印は減)
平成18年4月	93	256	283	1,558	193	481	569	2,295	121	△576
5	112	202	204	1,061	215	560	531	1,823	96	△1,272
6	299	580	260	1,600	265	647	824	2,827	135	124
7	126	576	275	2,640	175	515	576	3,731	197	1,344
8	205	707	470	3,540	169	554	844	4,801	219	773
9	253	537	444	2,263	151	463	848	3,263	172	△572
10	174	857	278	2,318	139	718	591	3,893	195	2,131
11	241	582	272	1,705	110	246	623	2,533	159	△637
12	240	836	217	1,383	142	357	599	2,576	144	△250
平成19年1月	178	544	287	1,795	139	336	604	2,675	158	282
2	222	584	412	2,747	117	325	751	3,656	204	1,033
3	183	593	311	1,631	103	276	597	2,500	125	△1,187
計	2,326	6,854	3,713	24,241	1,918	5,478	7,957	36,573	160	1,193
比　率	18.7%		66.3%		15.0%		100%			

(2) 複写サービス

国内外の研究者・研究機関の便宜に供するために行ったもので、実績は下記のとおりであった。

マイクロ・フィルム

申込件数	紙焼用撮影齣数	紙焼提供枚数	フィルム提供齣数
575	11,290	18,567	1,397

電子複写

申込件数	提供枚数
676	36,963

（3）レファレンス

受付数は目録室、閲覧室など合わせて746であった。

（4）資料の貸出

博物館・美術館などが主催しておこなう展覧会への資料の貸出は３件で、詳細は次のとおりである。

展覧会への資料貸出一覧

	展覧会名	主催者	展覧会会期	開催場所	主な資料と数量
1	開館10周年記念展「雅／俗―浮世絵に見る江戸の風雅と風俗」	山口県立萩美術館・浦上記念館	平成18．6．10～7．30	山口県立萩美術館・浦上記念館	『好色一代男』はじめ全２点
2	特別展「『知られざる琉球使節』～国際都市・鞆の浦」	福山市鞆の浦歴史民俗資料館	平成18．10．13～11．26	福山市鞆の浦歴史民俗資料館	『琉球画誌』はじめ全２点
3	特別展「伝説のつわもの　渋谷金王丸」	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	平成19．1．16～3．18	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	『かまだ』はじめ全３点

4．書庫資料の見学と研修

申請は28件あり、300名に便宜を計った。その詳細は次のとおりである。
なお、このほかに当日申込の書庫見学が45件118名あった。

	実施日	申請者	参加者	人数	主な内容
	平成18年				
1	4月7日	佐藤典子	国立国会図書館職員	6	書庫及び所蔵資料見学
2	4月10日	姜　智恩	関西国際交流基金研修生	1	〃
3	4月25日	林　邦	上海芸術研究所一行	10	〃
4	4月26日	斯波義信	三菱ゆかりの地ツアー	20	〃
5	5月9日	本野英一	早稲田大学学生	6	〃
6	5月17日	石塚晴通	ソウル大学校教授ほか	8	〃
7	5月18日	三浦　徹	お茶の水女子大学学生	15	〃
8	5月19日	荷見守義	弘前大学学生	11	〃
9	5月24日	小松久男	東京大学、筑波大学学生	20	〃
10	5月26日	斯波義信	三菱広報委員会	19	〃
11	6月21日	高田幸男	明治大学学生	20	〃
12	7月4日	門脇広文	大東文化大学学生	20	〃
13		中見立夫	モンゴル国留学生	1	〃
14	7月25日	臼井佐知子	東京外国語大学学生	15	〃
15	7月28日	岸本美緒	明清史研究者、大学院生	4	〃
16	9月15日	窪添慶文	故宮博物院一行	5	〃
17	9月20日	斯波義信	三菱月曜会	24	〃
18		斯波義信	関西テレビ一行	4	〃
19	9月28日	小島浩之	富山大学学生	13	〃
20	11月30日	緒方宏大	印刷博物館一行	8	〃
21	12月6日	佐藤典子	国立国会図書館職員	8	〃
	平成19年				
22	1月22日	斯波義信	三菱商事広報部	8	〃
23	1月25日	山口昭彦	聖心女子大学学生	10	〃
24	1月30日	藤本幸夫	延世大学一行	9	〃
25	2月7日	川島　真	台湾青年訪日団一行	17	〃
26	2月15日	村上直子	日本図書館協会資料保存部会	8	〃
27	3月8日	安　恵璟	韓国学中央研究院一行	4	〃
28	3月20日	柳沢　明	内蒙古大学人文学院一行	6	〃

5．資料の保存整理と複製

原資料の保存整理と劣化資料のマイクロフィルム化など他の媒体への交換を行った。作業項目と内容は下記のとおりである。

（1）漢籍地方志

継続している作業で、本年度は、分類記号Ⅱ－11－B－m—45～Ⅱ－11－J－39までを対象。

裏打ち　877葉、綴じ直し　54冊、帙作製　14ケ。

（2）貴重洋書（Old books）

継続している作業で、本年度は、分類記号O－1－A－42～O－1－D－43を対象。

清掃、クリーニング、オイリング及びラッパー作製151冊。

（3）その他の書庫内資料

近代中国研究班収集資料、目録室資料、閲覧室資料を対象。

本製本（洋、和）354冊、簡易製本48冊、帙およびラッパー作製124ケ、補修5,082枚、整理保全82冊（単行本）310枚（地図他）。

雑誌合冊製本（外注）852冊。

（4）資料の撮影　26,850コマ

対象資料：漢籍稀覯書と劣化、破損の著しい和書、洋書を対象に作業を行った。

（5）活用フィルムの作成のためのポジフィルムの撮影　50リール

撮影した上記資料のネガフィルムを対象にポジフィルムの作製を行った。

6．業務の機械化

引き続きデータベースの入力作業を継続する一方、インターネット上でのオンライン検索ができるよう作業を進めた。平成18年度末現在、東洋文庫の Web ページでオンライン検索が可能な目録データベースは下記の28種である。このうち※印のついているものが平成18年度新規公開分である。

（1）中国語逐次刊行物　（約4,600件収録）
（2）日本語逐次刊行物　（約2,008件収録）
（3）漢籍資料オンライン検索　（約27,000件収録）
（4）岩崎文庫（和貴重書）　（約8,000件収録）
（5）続修四庫全書　（約6,200件収録）
（6）欧文図書　（約66,400件）
（7）別置ロシア語図書　（約600件）
※（8）大正時代の購入書籍リスト（洋書）　（約5,600件）
大正7年から大正12年までに東洋文庫が購入した書籍のリスト
（9）中文図書の検索（近代中国研究委員会収集）　（約26,000件）
※（10）和図書の検索　（約61,000件）
未公開の所蔵データに「日本文図書の検索（旧近代中国研究委員会収集）」と「近代日本関係日本語文献目録」を統合したもの
（11）和図書（近代中国研究委員会収集）分類表による検索　（約17,000件）
（12）韓国・朝鮮語図書の検索　（約4,300件）
（13）藤井文庫オンライン検索　（約1,450件）
（14）モンゴル語資料検索　（約1,600件）
※（15）アラビア語図書の検索　（約13,400件）
既存のデータベースを刷新して所蔵テータを増補したもの。
※（16）ペルシャ語図書の検索　（約10,200件）
既存のデータベースを刷新して所蔵テータを増補したもの。
（17）現代トルコ語図書の検索　（約9,300件）
※（18）オスマントルコ語図書の検索　（約1,400件）
既存の所蔵リスト（PDF）を刷新してデータベース化したもの
※（19）南アジア諸語（アラビア文字）図書検索　（約3,400件）
所蔵南アジア諸語図書のうち、アラビア文字使用言語の図書が検索できる。
（20）キルギス語図書全リスト（PDF）　（約20件）
（21）ウイグル語図書全リスト（PDF）　（約1,100件）
（22）カザフ語図書全リスト（PDF）　（約240件）
（23）スィンディー語図書全リスト（PDF）　（約150件）
（24）チベット語文献（河口慧海将来蔵外文献）　（約500件）
（25）チベット語文献（米国議会マイクロフィッシュ版）　（約4,000件）
（26）ビルマ語図書の検索　（約700件）
（27）インドネシア語・マレーシア語図書の検索　（約300件）
（28）南方史資料　（約4,200件）

入力及び公開にむけての作業は次年度以降も引き続き進めていく予定であり、同時に所蔵資料のデジタル化も積極的に推進していく計画である。

7．書庫内資料と書架スペース

書庫内資料の排架一覧と新規排架および主な調整箇所

階	1　号　棟	新規排架・調整箇所	2　号　棟	新規排架・調整箇所
6	朝鮮本、越南本、満洲本、蒙古本、和書（XIII～XVII、大型）	朝鮮本、越南本、満州本、蒙古本、和書（XV～XVII、大型）辻文庫		
5	Old Books、PB、MS、漢籍稀覯書、岩崎文庫、銅版画、古地図、梅原考古資料、辻文庫・榎文庫 Old Books 及び線装本		和書（II－XII）	和書（X—XIV）
4	洋書（I～XII・大型）、モリソン二世文庫、ベラルデ文庫、ウルドゥー語資料、ロシア語別置資料	洋書（I～V）、モリソン二世文庫、ベラルデ文庫	トルコ語資料、榎文庫、岩見文庫、ペルシア語資料（P－A－1～P－LI－761）、チベット語資料	
3	漢籍（経部・子部・集部・叢書・大型）、日本語・ハングル新着雑誌		洋書（XIII～XVII・XIX）モリソンパンフレット、アラビア語資料、ペルシア語資料（P－LI－762～P－Z－6）	
2	漢籍（史部）	漢籍（史部）	近代中国研究委員会収集資料	
1	逐次刊行物（日・中・朝・洋新聞）、中国語、欧文新着雑誌	逐次刊行物	逐次刊行物（欧文）	

臨時書庫	新規排架
オスマン・トルコ語	アジア諸言語

書架調整のみでは対応しきれない現状を打開し、書架狭隘を大きく解消するため、1号棟の1階、4階、6階に単式書架を中心に計112連を増設した。この書架増設は3カ年計画の第2年度分である。これに伴う本年度の主な資料移動は以下のとおりである。

1．この増設書架に資料を展開させる形で、逐次刊行物・洋書（Ⅰ～Ⅴおよびモリソン二世文庫・ベラルデ文庫）・蒙古本・満洲本・和書（Ⅰ、XIII～XVII）・朝鮮本・越南本・辻文庫の排架調整を行なった。
2．また、さらにアジア諸言語資料については、複数箇所に分散して排架していた資料を１カ所に纏め、出納作業を円滑に行なえるように改めた。
3．また前年度より継続していた漢籍（Ⅱ）の排架調整を完了させた。

Ⅲ 研 究 事 業

東洋文庫は、アジアを構成する諸地域の歴史・文化の発展に関する基礎資料を、組織的かつ継続的に収集してこれを広く内外の研究者の利用に供するとともに、これらの資料に基づく広範なアジア研究を推進して、内外のアジア研究の進展に大きく貢献することを主要な目的としている。

東洋文庫はこの事業のいっそうの拡充に向けて、平成15年度以降、研究体制を一新した。すなわち（イ）研究員の編成において若手研究員の参加に意を注ぐとともに、（ロ）現代アジアの課題に多面的かつ総合的に取り組む方策を打出し、（ハ）欧文による成果の発信を拡充して国際的な活動を強化し、（ニ）研究情報および資料情報の公開と共同利用、内外にわたる情報の授受を促進すべく、研究部と図書部を一丸とした電子情報システムの構築に着手した。これを機に、研究分野は《超域アジア研究》と《アジア諸地域研究》に二分され、前者は現代アジアの学際的な動態研究、後者は各ディシプリンを生かした基礎研究に取り組む。

1．調 査 研 究

A． 超域アジア研究

1940年代以降のアジアは激変と急成長をとげ、21世紀の世界情勢の展望にとってアジアの占める位置と役割は高まりつつある。中国は1949年の革命ののち、急速な変容と発展を経過しており、中国情勢は国内問題に加えて、隣接アジア諸地域を包摂した課題として総合的・多面的な研究を不可避としている。また、イスラームのグローバル化とその先鋭化も近年の著しい現象であり、現代世界の理解のためには、中東や中国・東南アジアのイスラームの現実を柔軟に解析することが必要である。

このような意味で、現代の中国圏域およびイスラーム圏域に関するアジア研究を新たに組織し、これを政治学・経済学・国際関係論・歴史学などを融合した学際型のプロジェクト研究として実施する。

○超域アジア・プロジェクト研究

（1）「現代中国の総合的研究」

（超域アジア研究部門、現代中国研究班、総括・斯波義信）

1949年の革命、とくに1980年代以降、国内で政治、経済、社会の激変を経験し、東アジアから世界にまで政治・経済的な影響力をもちつつある現代中国の全容を、歴史・文化の流れを含めて総合的に分析する研究体制（資料、政治と外交、経済、国際関係・文化）を編成した。また、関連する基礎資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点にしながら、学際的研究・公開利用の観点から拡充と再編を行った。

[研究実施概要]

「現代中国研究班」では、各研究グループが、平成17年度より開始された台湾中央研究院との学術交流協定に沿う資料・研究交流を実施した。昨年度、経済グループがその研究成果を英文雑誌 Modern Asian Studies Review 創刊号に発表したのにひきつづき、政治・外交グループが、同誌の第２号に成果を発表した。また、国際関係・文化グループは、平成15年度以来の研究成果をとりまとめ、『日中戦争期の中国における社会・文化変容』として刊行した。なお、平成17年度に英文論叢 Toyo Bunko Research Library（以下 TBRL）No.8 Restructuring China-Party, State and Society after the Reform and Open Door- を刊行した経済グループは、平成19年度以降の成果発表にそなえ、他のグループとともに定例研究会の開催を継続実施中である。

（２）「現代イスラームの超域的研究
－議会主権の展開と立憲体制に関する研究－」

（超域アジア研究部門、現代イスラーム研究班、総括・佐藤次高）

本プロジェクトでは、これまでほとんど用いられることのなかった中東諸国の議会文書（アラビア語、ペルシア語、トルコ語）を分析し、それぞれの地域（国家）に誕生した議会主義の政治思想と立憲体制の実態を比較・検討することを通じて、中東・イスラーム地域における国民国家の歴史的役割と今日的意義を総合的に考察する。

[研究実施概要]

「現代イスラーム研究班」では、まずトルコグループが、平成16年度から継続しておこなってきたトルコ議会資料の収集・分析の成果をとりまとめ、『トルコにおける議会制の展開―オスマン帝国からトルコ共和国へ―』として刊行した。この論集には、オスマン帝国憲法とトルコ共和国憲法の翻訳が含まれる。平成17年度に成果を刊行したイラングループでは、引き続きイラン議会文書の分析と研究を続行した。また、アラブグループにおいては、トルコグループと連携して議会関係資料の調査・分析をおこない、A Guide to Parliamentary Records on Monarchical Egypt を刊行した。３月には合同研究会を開催し、各グループが研

究成果を報告するとともに、平成20年度に全体の成果として公刊する英文叢書の作業について検討し、アラブ・イラン・トルコ各グループとも執筆者の選定に入った。

B．アジア諸地域研究

現代アジアの複合的かつ動態的な発展を理解する上で、各民族が有する個性豊かな歴史と文化の基礎的研究が欠かせない。本研究は、アジアの現状に影を落としている歴史・文化の諸要素につき、基礎的かつ長期の取り組みを要する総合的な研究を継続した。

〈東アジア研究部門〉

（3）前近代中国研究班

①「中国古代地域研究―『水経注』の分析から―」　（総括・宇都木章）

『水経注』(原典6世紀、中国最古の地理書)とその諸注を考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析することによって、中国古代の地域社会の構造を再検討する。

［研究実施概要］

a）陳橋驛復校『水経注疏』（江蘇古籍出版社刊）をテキストとして、隔週の研究会において、その巻17・18・19「渭水」（甘粛省に発し、陝西省咸陽の南、西安〔長安〕の北を経て黄河に注ぐ）の部分を、旧ソ連製（'78年、1/100,000）の詳細な航空写真およびアメリカのランドサット衛星地図とを重ね合わせ、継続して諸注及び諸校訂を丁寧に検討し読み進めている。

b）平成17年度に実施した渭水流域の陝西省岐山県周公廟遺跡等の現地調査報告を『陝豫訪古紀行―中国陝西省・河南省地域考察旅行報告―』として刊行し、国内および中国の関係研究者に送付して、我が班の研究・調査内容への検討・批判や今後の研究への協力を要請した。

c）20世紀以降の中国における渭水流域の諸遺跡の考古学的調査・発掘の報告書を集め、この地域の古代遺跡と『水経注』記載の内容を合わせ検討し、渭水流域の古代の自然・社会的実態により具体的に迫るよう努める。この成果を平成19年度に『水経注』巻17・18（上巻）の訳注として刊行する。さらに同巻19（下巻）の出版準備を開始した。

d）上記『水経注』巻17・18訳注刊行のため、平成19年度初頭に『水経注』記載の渭水上流地域の実地調査をおこなう。その準備として、日程・調査地域・調査内容の具体的確定のための協議をおこない、また同調査に協力を願う陝西師範大学の歴史地理学の諸研究者との協議を進めた。

②「宋代社会経済史用語解の作成」　（総括・斯波義信）

このほど完成した『宋史』食貨志の諸篇の訳注、およびすでに整理作業を経た『宋会要』食貨の諸篇語彙索引資料にもとづいて、宋代社会経済史研究の推進に寄与する《用語解》を作成し、データベース化して公開する。

［研究実施概要］

a）東洋文庫既刊『宋史食貨志訳注（一）～（六）』（昭和35年～平成17年）に収まる用語解釈、および東洋文庫の《宋会要輯稿食貨篇語彙索引》事業（昭和39年～）で蓄積した資料を中心にして、宋代の経済史・社会史の研究に役立つ《用語解》を作成しデータベース化するための作業を進めた。

b）登載語彙を選定し、各語彙に付する範疇別・時期別・地域別のコード・サブコード、解説、用例、出典の注記法についての共通の準則を検討した。

c）『宋史食貨志訳注（一）～（六）』および《宋会要輯稿食貨篇語彙索引》の資料の大半をデータベース化した。また上記b）の共通準則のもとに作業の分担を決めるべく、定期的に会合して調整をすすめた。

d）平成17年度までに刊行した『宋史食貨志訳注』（五）および（六）にもとづき、『宋史食貨志訳注（五）（六）語彙索引』を刊行した。

e）『晋書食貨志訳註』を刊行した。

③「東アジア都城の考古学的調査・研究（２）」　（総括・田村晃一）

平成14・15・16年度と続けて、渤海を中心として東アジアにおける都城の比較研究を行ない、その研究成果として平成16年度に『東アジアの都城と渤海』（全394頁）を公刊した。しかしながらその中心的なものであった、渤海上京龍泉府址（東京城）出土遺物の調査・研究は、予想以上に多数の遺物があったため、整理に手間取り、一部の遺物の調査・研究については、平成17年度以降、継続実施する。

［研究実施概要］

a）本研究班の小嶋芳孝と田村晃一は、７月に中国吉林大学で行われた遼・金・蒙元期の都市に関するシンポジウムに出席し、報告や総括を行った。その際吉林省白城市所在の遼代に建設された土城２箇所、黒龍江省阿城市所在の金の上京会寧府跡などを踏査した。８月には小嶋芳孝、清水信行と

田村が陝西省西安市を訪れ、中国社会科学院考古学研究所西安研究所にて唐大明宮太液池出土瓦などを調査し、渤海上京龍泉府跡出土瓦との比較研究を行なった。現在、その結果をとりまとめている。なお最近復元された大明宮含元殿跡や麟徳殿跡のほか、漢長安城の遺構、法門寺博物館などを見学した。

b）『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を刊行した。これには東京城出土遺物のうち、塼についての報告と、遼金時代の都城踏査記を収録した。

④「前近代中国の法と社会（2）」　（総括・鈴木立子）

宋から明清時代にかけての戸婚・田土・銭穀などに関する法を、判例を中心に明らかにし、前近代中国の「民事的」法の特質、歴史的変遷、地方性などを分析し、前近代中国の地方社会の性格、中央政府との関係を考察することを目的としている。17年度に公刊した『宋―清代の法と地域社会』の成果をもとに、さらに研究を深化させる方向性を検討する。主として宋代以来豊富に残されている判例、契約文書を史料とするために、あわせてこれらの史料の所在を調査し、収集する。

［研究実施概要］

a）「民事」的法、規範、契約文書などに関わる研究動向およびそれに関する文献（1980年以降）の目録を作成するため作業を行った。

b）国内外の判牘文集および条例の調査を継続し、収集した史料の整理を行った。

（4）近代中国研究班

①「1910～30年代における日本の中国認識」
（東アジア研究部門、近代中国研究班プロジェクト研究）（総括・本庄比佐子）

近代日本の官民様々な機関が作成した中国実態調査資料の検討を通して、日本の同時代中国認識を明らかにする研究の一環として、平成15～17年度においては、第一次大戦期の日本軍の山東占領にかかわる諸問題に関する研究を実施し、その成果として昨年度『日本の青島占領と山東の社会経済：1914-22年』を刊行した。その3年間で得た成果に拠りつつ時代と対象地域を広げて研究を行う。

［研究実施概要］

a）日本軍の山東占領期における諸問題について、過去3年間の研究で明らかにし得た問題の総括と残された問題の検討を行いつつ、研究対象時期を

1930年代までひろげて、第一次世界大戦期に日本が山東で獲得した経済的基盤がその後日本の華北進出とどのようにつながっていったかについて研究を進めた。

b）具体的には以下の個別テーマを取り上げ、経済、政治、社会など多方面から研究を行っている。戦時華北工業調査、華北5省の電力産業調査、華北食料事情調査、華北の鉱山調査、各種調査資料にみる東北への移民問題、旧高商の中国認識、大正期日本人の「支那」イメージと山東、新聞の中国論と日本の国民の中国認識形成、山東における日本人勢力の伸張と済南事件、など。

c）過去3年間の総括の一環として、9月21日に東洋文庫でシンポジウム「日本の青島占領と山東の社会経済をめぐって―『日本の青島占領と山東の社会経済：1914－22年』をめぐる日中両国研究者による討論―」を開催し、有意義な成果を収めることができた。特に中国の研究者との意見交換を通して中国の新しい研究動向、特に中国研究者による日本の調査資料の利用状況を知り得たこと、また、日本史の研究者をコメンテーターに迎えて日本の中国進出について中国史・日本史の両面から検討することができたことは、わがプロジェクトの今後の研究に有益であった。

（5）東北アジア研究班

①「日本所在近世朝鮮文献資料研究」　（総括・吉田光男）

京都大学付属図書館河合文庫、東京大学総合図書館阿川文庫、天理図書館今西文庫をはじめとして、日本各所に所蔵されている近世朝鮮文献資料の歴史学的文献学的研究を行う。18～19世紀の商人関係文書群など、朝鮮半島では類例が発見されていない非刊本資料も多く、その全体像を把握する必要がある。本研究では、文献資料の調査と分析を行い、平成16～19年度の4ヶ年計画でその成果の刊行を期する。

［研究実施概要］

a）朝鮮近世史研究の基礎的基盤を構築するために、日本散在の近世朝鮮文献資料、主として官民の帳簿や成册などの調査と収集を継続した。

b）平成19年度に研究成果の刊行を期し、新たに参加を得た研究分担者を加え、資料調査とその分析を行った。

②「清朝満洲語檔案資料の総合的研究」　（総括・松村潤）

近年、中国清朝満洲語檔案資料の重要性が注目されてきているが、清朝の基

盤組織である八旗のひとつ鑲紅旗満洲の衙門(事務所)の文書群である、東洋文庫所蔵の「鑲紅旗檔満洲都統衙門檔案」の研究を継続する。同檔案には、衙門が設けられた雍正元年（1723）から民国十一年（1922）にいたる、約2,240件の文書が残されている。その文書群の「概要」については、すでにTBRL No.1 The Bordered Red Banner Archives in the Toyo Bunko に紹介したが、檔案のもつ歴史的意味、個別檔案の内容等について「研究編」を編み英文での刊行を期す。

[研究実施概要]

a）東洋文庫所蔵鑲紅旗檔満洲語檔案の「研究編」(英文)刊行のため作業をすすめた。

b）「清入関前内国史院檔満文檔案」（北京の中国第一歴史檔案館所蔵）の『内国史院檔、天聡七年』（ローマ字転写・和訳・原文写真収載）の出版（平成15年３月）につづき、「天聡五年（1631）檔」および「天聡八年（1634）檔」について講読を完了し、出版原稿の作成につとめた。

c）定期的に研究会を開催し、「崇徴二年（1637）檔」、「崇徴三年（1638）檔」の講読を継続実施した。

③「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析」　（総括・石橋崇雄）

ここでは、西欧による世界の一体化が進展する時代と重なりながら、東アジア・北アジアにわたる大規模な統合を独自に進展・実現させて現在の「中国」領域を形成する軸となった、清朝の国家領域構造と対外関係を総合的に分析する。このために1932年以降の満洲国や現在の中国における自治区・民族問題と清朝史との関わりをも含め、清代東アジア・北アジア諸領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築する。

[研究実施概要]

現代中国に直結する清朝の新たな総合的歴史像を提示する具体的作業を遂行した。

a）清朝政治史、清代中国社会経済史、清代中国近代政治史、清代モンゴル・露清関係史、清代中国西南民族史の各専門研究領域をもとに、既成の領域世界・時代区分の枠を越えて個別に史料調査・現地調査を実施し、それを基盤とする専門研究を深化させ、文献史料の調査・整理・分析を行った。その一環として、平成18年９月には、中華人民共和国天津の南開大学において共同研究者が中国研究者との学術交流を実施した。

b）各専門研究領域の研究成果を持ち寄り、その意義と問題点を総合的に分析することで清代諸領域の相互にわたる総合検討を進める準備段階の一環

として、研究会を開催した。また、基礎作業に要する資料や機材を揃えた。

c）平成18－20年度にわたる3年間の研究成果として、平成20年度（予定）に英文論文集（TBRL：The Historical Structures of Eastern and Northern Asia in the Qing Dynasty Era.［仮題］）を刊行する。

（6）日本研究班

①「岩崎文庫貴重書の書誌的研究」　（総括・佐竹昭広）

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分になされていない。平成16年度以降は、江戸期の近世写本・刊本、特に歌書関連の貴重書について組織的、総合的に行い、研究の基盤を整備するとともに、これを広く社会に公表し、研究の進展に資することを期して、研究を継続中である。

［研究実施概要］

a）岩崎文庫貴重書書誌プロジェクトは、平成15年度までに、室町時代以前に成立した古写本・古刊本について、詳細な書誌情報を記載し豊富な図版を掲げた『岩崎文庫貴重書書誌解題』Ⅰ～Ⅳを公刊してきたが、このたび平成19年3月、『岩崎文庫貴重書書誌解題』Ⅴの刊行に至った。

b）江戸時代の近世写本・刊本を調査し、研究会を催して岩崎文庫の全体像を把握する作業を継続中である。また、上記解題のⅥ以降の出版計画のため、岩崎文庫所蔵の歌書について情報の収集を始めた。

〈内陸アジア研究部門〉

（7）中央アジア研究班

①「St. ペテルブルグ文書研究」　（総括・梅村坦）

東洋文庫所蔵のマイクロフィルム（ロシア科学アカデミー東洋学研究所 St. ペテルブルグ支部所蔵文書）のうち、ウイグル語・ソグド語・コータン語・マニ文字文献およびモンゴル語文献に関する解題カタログの整備をめざし、ウイグル文献を中心に、文献学・言語学・仏教学・歴史学等の側面から個別に読解研究をすすめる。5、6世紀から15世紀にいたる中央ユーラシア資料文献学に欠かすことのできないこれらの資料は、小断片にいたるまで精査する価値をもつ。したがって資料使用の基盤を形成することがすべての基本となる。個別文書研究と全体像の明示とを並行してすすめていくことにより、

出土地域の歴史像解明をはかる。

[研究実施概要]

a）ウイグル文書に関する研究資料を充実させるため、画像スキャニングをおこない、これとデータベース上の目録を組み合わせる作業を継続した。3月末までに全4200件約1万コマのスキャニング保存を終了した。ただし、St. ペテルブルグ支部との契約により、画像資料は一括公刊することができないため、当面本研究グループ内部での閲覧を図ることとする。

b）とりわけウイグル文書は、他機関所蔵のものとの比較対象が必須である。その総合カタログを出版するため、個別文書研究をすすめ、必要に応じて現地での確認調査をおこなうと同時に、ある程度ウェブ上でデータ入手が可能なベルリン所蔵文書と、基礎データ収集が済んでいる大英図書館所蔵のウイグル文書についてカタログ化を進めている。また、中国新疆の二つの博物館との共同研究を模索しはじめ、トゥルファン出土の未発表文書を共同で研究する方法を検討し、資金および研究組織案を検討している。

②「近現代中央アジアにおける民族の創成」　（総括・小松久男）

1991年のソ連解体と中央アジア5ヶ国の独立以来、現今のアフガニスタン情勢まで連動して、中央アジア諸国およびヴォルガ・ウラル地域ではあらたな「民族意識」がさまざまな形で姿を現し、周辺地域（たとえば新疆ウイグル自治区）にも影響を与えている。このような現代中央アジアの動態を近年における東洋文庫の収集資料を活用して主に歴史学の方法によって検証し、「国民国家」の枠組みを問いなおしつつ、「民族」創成の多様な論理と過程を明らかにする。この地域に「民族意識」の原形が生まれたのは、19世紀末のことであり、これを創出したムスリム知識人たちはおもに新聞・雑誌などの新しいメディアを活用しながら民族的なアイデンティティの形成にあたった。したがって、19世紀末から20世紀初頭に刊行された新聞・雑誌は、重要な史料であり、これをもとに実証的な研究を進める。

[研究実施概要]

a）近代中央アジア新聞・雑誌コレクションの整理と研究を継続した。

b）現地資料・関連研究図書の収集：ウズベキスタン、タジキスタン、タタールスタンなどで刊行されている最新の研究文献を調査し、さらに、1980年代後半のペレストロイカ期から2000年の間に行われた、中央アジア近現代史に関する研究動向の調査を行った。その成果として、平成17年度に刊行した TBRL No.7 Research Trends in Modern Central Eurasian Studies (Part2) につづけて、TBRL No.10 Studies on Xinjiang Historical Sources

in 17-18th Centuries を刊行するため作業を継続した。

c）研究チーム以外の研究者の参加も得て、本テーマに関する研究会を継続的に開催した。

d）他の研究プロジェクトとの共催で11月25－26日、国際ワークショップ Uyghur Society, Culture and Ethnic Identity in Xinjiang and Central Asia を開催した。本ワークショップでは、ロシア・ソ連領内の中央アジアと清朝・中国領内の東トルキスタンとをまたいで展開された「ウイグル人」の創成プロセスについて、最新かつ実証的な研究成果をもとに幅広い議論を行うことができた。

e）１月10～17日に、研究協力者の濱本真実氏を北海道大学図書館およびスラブ研究センターに派遣し、18世紀帝政ロシア治下のタタール人とバシキール人に関する法令・行政文書の調査を行った。これはロシア領内におけるムスリム諸民族の処遇を明らかにする上で大きな意味をもつ。

③「敦煌・トルファン出土漢文文書の文献学的研究」　（総括・土肥義和）

これまで、中国の中央で編纂された漢語史料を中心に進められてきた中国の内地及び内陸アジア諸地域の諸民族の歴史を、現地で作成された生の漢文文書を分析研究することによって、諸民族の歴史の実態を明らかにすることにある。このために、本研究は、３世紀から13世紀に至る時代に作成された漢文文書を分類し、それぞれの文書がどのような特質をもっているかを、書誌学的、あるいは古文書学的に研究することによって、諸種文書の外形的な特徴、即ち、様式を究明するとともに、内陸アジア諸民族の歴史の実態を明らかにすることを期す。

[研究実施概要]

a）ロシアの St. ペテルブルグの東洋学研究所所蔵の漢文文献マイクロフィルムの107リール（Nos.256-362リール）の点検を終了し、各リールに含まれている文献の整理番号とそのコマ数とを示す対照一覧表を作成し、つづいてこの一覧表にもとづき、既存の『俄蔵敦煌文献』（全17冊、図版集、上海古籍出版社）に収録された文献（図版）の所在（巻数・頁数）をその一覧表に明示した。その結果、既存の『俄蔵文献』に収録されていない漢語文献が約300件、漢語、ウイグル語文献が約200件存在することが明らかとなり、それらの焼付写真を作成した（10リール）。

b）上記ａ）において作成した漢語文献の対照一覧表のデータ入力の作業はほぼ完成し、現在はその入力データを校正している。

c）上記の107リールの漢文文献中に、トルファンやクチャ、ホータンなど

から出土した文献がどの程度含まれているかを調査し、『俄蔵文献』に未収録のホータン収集文献約150件がリールに収録されていることが明らかとなった。

d）本研究の研究課題である『敦煌・トルファン出土漢文文書の文献学的研究』に基づく研究成果を平成20年度に刊行するために、研究分担者・研究協力者（計20人）への原稿依頼と分担、執筆テーマの調整とを行った。

e）本研究テーマを促進させるために「内陸アジア出土古文献研究会」を定期的に開催した。

（8）チベット研究班

①「チベット蔵外文献の書誌的研究」　（総括・川崎信定）

河口慧海師将来文献を含む〈東洋文庫所蔵チベット撰述蔵外文献解題目録〉のデータベース作成を継続する。また、チベットの伝統的仏教学の基礎的研究書である『宗義書』文献のテキスト校訂と語彙収集およびデータベース化を行う。

[研究実施概要]

a）〈東洋文庫所蔵チベット撰述蔵外文献解題目録〉の編纂カードを点検して、目録データベースの作成を行った。

b）チベット人研究協力者の協力のもとに東洋文庫所蔵チベット蔵外文献中の河口慧海師将来文献および関連文献のテキスト校訂と語彙収集およびデータベース化を進めた。

c）チベットの伝統的仏教学の基礎研究書として、従来より研究を進めてきたトゥカン『宗義書』（既刊６冊）の続編として『西蔵仏教宗義研究 第８巻（トゥカン“一切宗義”序章：インド宗教の巻）』を刊行した。

〈インド・東南アジア研究部門〉

（9）インド研究班

①「南アジアにおける支配権力―ムガル帝国支配に関わる文書史料の研究」
（総括・小名康之）

近年、インド、ヨーロッパ、アメリカにおいて、ムガル時代の歴史研究は、著しく進んでいる。従来は、ムガル帝国の各皇帝ごとの歴史書や通史をもとにムガル帝国支配の研究をおこなってきたが、一次史料たる皇帝のファルマー

ン（勅令）や各種公文書をもとにした研究へと移っている。本研究においても各種公文書の収集整理をめざして、今後の本格的なムガル史研究につとめるものとする。

［研究実施概要］

a）一次史料である皇帝の命令書（ファルマーン）について、研究書、研究論文を参照し、従来の研究状況を調べるとともに、ファルマーンの英訳およびペルシア語原文について研究調査を進めた。また、ファルマーンの年譜を作成し、内容の整理を行った。

b）研究協力者である末廣朗子氏をインドに派遣し、現地における史料研究の動向とファルマーンについて、調査を行うとともに、ハイデラバード大学、オスマニア大学、アンドラ・プラデーシュ州立文書館の専門研究者に研究状況を聞いた。

c）研究会において、末廣氏がインドでの調査について報告を行い、ムガル時代のファルマーン研究の新たな方法について検討した。

(10) 東南アジア研究班

①「近代移行期の東南アジアの港市世界に見る自画像と他者像」（総括・石井米雄）

古くから東西海洋交易の要衝となった東南アジアの港市には、東西世界の商人が逗留するとともに、中国やインド、西アジアなどから多くの移住者が流入した。東南アジアの港市は、地元の人々をはじめ移住者や奴隷さらにはそれらの人々の間に生まれた混血者など、多様な人々が居住する空間となった。他方でこうした港市は、地元世界の外部への窓口となり、地域社会の結節点ともなった。本研究計画では、近代移行期の東南アジアの港市を取り上げ、港市住民がどのように「自分たち」と「彼ら」を区分したかを考察することで、彼らによる地元世界と広域秩序世界を構築するダイナミズムを探る。

［研究実施概要］

a）近代移行期の東南アジア社会に関する文献資料の収集と分析を進めた。とりわけ本年度は、混血者を生み出す背景となる外来者と現地人女性との交流をめぐる資料収集に収穫があった。

b）弘末雅士研究員が1月14日～22日にインドネシアのジャカルタに出張し、20世紀初めの新聞の調査をとおして、東南アジアの港市で展開した都市文化の調査研究を進めた。

c）文献調査や訪問調査の成果を、平成20年度に TBRL No.11 The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the Nineteenth and Twentieth

Centuries として出版する予定である。そのための研究会を10月21日に実施した。

〈西アジア研究部門〉

(11) 西アジア研究班

①「イスラーム世界における契約文書の研究」　(総括・三浦徹)

個人間の契約（売買契約など）にとどまらず、広く君臣契約や行政契約（徴税請負など）を含め、現存する文書や史料をもとに、イスラーム世界における契約を保証するシステムと契約によって結ばれる社会関係の全体像を検討する。

[研究実施概要]

a）平成17年度に3ケ年間の研究成果としてシリア古文書館所蔵の17世紀ダマスクス州の徴税請負に関する台帳の分析とテキストを公刊（Tax Farm Registers of Damascus Province in the Seventeenth Century）したが、これを踏えて、イスラーム世界における契約文書の国際比較研究を、国文学研究資料館アーカイブズ研究系の主催する「歴史的アーカイブズの多国間比較に関する研究」と連携して実施した。9月にトルコにおいて開催した国際ワークショップ「オスマン朝と中近世日本における国家文書と社会動態」の研究成果については平成20年度の刊行を期す。

b）ヴェラム文書（東洋文庫所蔵、モロッコの羊皮紙契約文書）の研究を行い、平成20年度に研究成果を刊行するため、資料の分析を継続した。

c）他機関のプロジェクト「中央アジア古文書研究」(京都外国語大学)、などと共同研究会を催し、イスラーム法廷文書に関わる研究者のネットワークの構築を進めた。

C．平成18年度　研究部5部門11研究班　研究組織

(◎は専従者、Wは重複を示す)

超域アジア研究部門

研究顧問　石井米雄　(大学共同利用機関法人人間文化研究機構機構長)

○現代中国研究班「現代中国の総合的研究」

総　括	斯波　義信◎	（東洋文庫理事長）
資　料	田仲　一成◎	（東洋文庫図書部長）
	矢吹　　晋	（横浜市立大学名誉教授）
	丸尾　常喜	（東洋文庫研究員）
	廣瀬　紳一	（東洋文庫研究員）
政　治	毛里　和子	（早稲田大学教授）
	興梠　一郎	（神田外語大学助教授）
	唐　　亮	（横浜市立大学助教授）
	青山　瑠妙	（早稲田大学助教授）
	天児　　慧	（早稲田大学教授）
	平野　　聡	（東京大学助教授）
経　済	中兼和津次	（青山学院大学教授）
	加藤　弘之	（神戸大学教授）
	川井　伸一	（愛知大学教授）
	厳　　善平	（桃山学院大学教授）
	佐藤　　宏	（一橋大学教授）
	田嶋　俊雄	（東京大学教授）
	丸川　知雄	（東京大学助教授）
国際関係・文化	平野健一郎	（早稲田大学教授）
	衞藤　瀋吉	（東京大学名誉教授）
	濱下　武志	（京都大学東南アジア研究センター教授）
	田中　明彦	（東京大学東洋文化研究所所長）
	伊香　俊哉	（都留文化大学助教授）
	内田　知行	（大東文化大学教授）
	川島　　真	（東京大学助教授）
	貴志　俊彦	（島根県立大学助教授）
	金　　鳳珍	（北九州市立大学教授）
	胡　　潔	（名古屋大学助教授）
	黄　　東蘭	（愛知県立大学助教授）
	小浜　正子	（日本大学教授）
	砂山　幸雄	（愛知大学教授）
	高田　幸男	（明治大学助教授）
	土田　哲夫	（中央大学教授）
	古田　和子	（慶應義塾大学教授）
	村田雄二郎	（東京大学教授）

○現代イスラーム研究班「現代イスラームの超域的研究
—議会主義の展開と立憲体制に関する比較研究—」

総　括	佐藤　次高◎	（東洋文庫研究部長）
アラブ	長沢　栄治	（東京大学東洋文化研究所教授）
	小杉　　泰	（京都大学教授）
	池田美佐子	（光陵女子短期大学教授）
	関本　照夫	（東京大学東洋文化研究所教授）
	松本　　弘	（大東文化大学助教授）
イラン	八尾師　誠	（東京外国語大学教授）
	黒田　　卓	（東北大学助教授）
	吉村慎太郎	（広島大学助教授）
	松永　泰行	（同志社大学一神教学際研究センター客員フェロー）
	鈴木　　均	（アジア経済研究所新領域研究センター研究員）
トルコ	永田　雄三	（明治大学教授）
	設樂　國廣	（立教大学教授）
	新井　政美	（東京外国語大学教授）
	小松　久男	（東京大学教授）
	粕谷　　元	（日本大学講師）
	大河原知樹	（東北大学助教授）

歴史・文化研究（アジア諸地域研究）

○東アジア研究部門

前近代中国研究班

「中国古代地域史研究—水経注の分析から—」

総　括	宇都木　章	（青山学院大学名誉教授）
	堀　　敏一	（明治大学名誉教授）
	松丸　道雄	（東京大学名誉教授）
	太田　幸男	（東京学芸大学名誉教授）
	藤田　　忠	（国士舘大学教授）
	飯尾　秀幸	（専修大学教授）
	塩沢　裕仁	（法政大学講師）
	籾山　　明	（埼玉大学教授）

「宋代社会経済史用語解の作成」

総　括	斯波　義信[W]	(前出)
	中嶋　　敏	(東京教育大学名誉教授)
	柳田　節子	(学習院大学元教授)
	千葉　　斐	(桐朋学園大学元理事長)
	吉田　　寅	(立正大学元教授)
	梅原　　郁	(就実大学教授)
	渡辺　紘良	(獨協医科大学名誉教授)
	窪添　慶文	(お茶の水女子大学教授)
	妹尾　達彦	(中央大学教授)
	長谷川誠夫	(千葉工業大学講師)

「東アジア都城の考古学的調査・研究（2）」

総　括	田村　晃一	(青山学院大学名誉教授)
	飯島　武次	(駒澤大学教授)
	清水　信行	(青山学院大学教授)
	井上　和人	(奈良文化財研究所平城京跡発掘調査部 考古第一研究室室長)
	妹尾　達彦[W]	(前出)
	早乙女雅博	(東京大学助教授)
	小嶋　芳孝	(金沢学院大学教授)

「前近代中国の法と社会（2）」

総　括（元代）	鈴木　立子	(愛知大学教授)
南　宋	柳田　節子[W]	(前出)
	大澤　正昭	(上智大学教授)
明　代	鶴見　尚弘	(山梨県立大学学長)
明　清	岸本　美緒	(東京大学教授)
	寺田　浩明	(京都大学教授)
	山本　英史	(慶應義塾大学教授)
	濱島　敦俊	(臺灣暨南國際大學教授)

近代中国研究班

「1910～30年代における日本の中国認識」

総　括	本庄比佐子	（東洋文庫研究員）
経　済	久保　　亨	（信州大学教授）
	奥村　　哲	（首都大学東京教授）
	金丸　裕一	（立命館大学教授）
	弁納　才一	（金沢大学教授）
	富澤　芳亜	（島根大学助教授）
政　治	内山　雅生	（宇都宮大学教授）
	曽田　三郎	（広島大学教授）
	松重　充浩	（日本大学教授）
文化・社会	三谷　　孝	（一橋大学教授）
	瀧下　彩子	（東洋文庫研究員）

東北アジア研究班

「日本所在近世朝鮮文献資料研究」

総　括	吉田　光男	（東京大学教授）
	糟谷　憲一	（一橋大学教授）
	山内　弘一	（上智大学教授）
	井上　和枝	（鹿児島国際大学教授）
	須川　英徳	（横浜国立大学教授）
	六反田　豊	（東京大学助教授）
	山内　民博	（新潟大学助教授）
	森平　雅彦	（九州大学助教授）

「清朝満洲語檔案資料の総合的研究」

総　括	松村　　潤	（日本大学名誉教授）
	加藤　直人	（日本大学教授）
	中見　立夫	（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）
	細谷　良夫	（東北学院大学教授）
	楠木　賢道	（筑波大学助教授）

「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析」

総　括	石橋　崇雄	（国士舘大学教授前出）
	岸本　美緒[W]	（前出）
	C. A. ダニエルス	（東京外国語大学アジア・アフリカ

言語文化研究所教授前出）

	並木　頼寿	（東京大学教授）
	柳澤　　明	（早稲田大学助教授）

日本研究班

「岩崎文庫貴重書の書誌的研究」

総　括	佐竹　昭廣	（京都大学名誉教授）
語　学	酒井　憲二	（田園調布学園大学短大部名誉教授）
	柳田　征司	（奈良大学教授）
	石塚　晴通	（北海道大学名誉教授）
文　学	杤尾　　武	（成城大学教授）
	今西祐一郎	（九州大学教授）
	大谷　俊太	（奈良女子大学助教授）
	上野　英二	（成城大学教授）
	深澤　眞二	（和光大学教授）
	辻本　裕成	（南山大学助教授）
思想・文化	宮崎　修多	（成城大学教授）
	斉藤真麻里	（国文学研究資料館助教授）
	和田　恭幸	（龍谷大学助教授）

○内陸アジア研究部門

中央アジア研究班

「St. ペテルブルグ文書研究」

総　括	梅村　　坦	（中央大学教授）
社会・文化	林　　俊雄	（創価大学教授）
歴　史	片山　章雄	（東海大学教授）
モンゴル	杉山　正明	（京都大学教授）
コータン	熊本　　裕	（東京大学教授）
ウイグル	庄垣内正弘	（京都大学教授）
	森安　孝夫	（大阪大学教授）
ソグド	吉田　　豊	（神戸市外国語大学教授）

「近現代中央アジアにおける民族の創成」

総　括	小松　久男[W]	（前出）

	新免　　康	（中央大学教授）
	梅村　　坦[W]	（前出）
	片山　章雄[W]	（前出）
	濱田　正美	（京都大学教授）

「敦煌・トルファン出土漢文文書の文献学的研究」

総　括	土肥　義和	（國學院大学名誉教授）
	池田　　温	（創価大学特任教授）
	氣賀澤保規	（明治大学教授）
	荒川　正晴	（大阪大学教授）
	關尾　史郎	（新潟大学教授）
	妹尾　達彦[W]	（前出）

チベット研究班

「チベット蔵外文献の書誌学的研究」

総　括	川崎　信定	（東洋大学教授）
歴　史	山口　瑞鳳	（東京大学名誉教授）
宗教文献	松濤　誠達	（大正大学名誉教授）
密教図像	立川　武蔵	（国立民族学博物館教授）
仏教稀覯本	御牧　克己	（京都大学教授）
チベット仏教思想	吉水千鶴子	（筑波大学講師）

○インド・東南アジア研究部門

インド研究班

「南アジアにおける支配権力―ムガル帝国支配に関わる文書史料の研究」

総　括	小名　康之	（青山学院大学教授）
ドラヴィダ	辛島　　昇	（大正大学教授）
サンスクリット	山崎　元一	（東洋文庫研究員）
ウルドゥ	萩田　　博	（東京外国語大学助教授）
サンスクリット	水野　善文	（東京外国語大学助教授）
	太田　信宏	（東京外国語大学助手）

東南アジア研究班

「近代移行期の東南アジアの港市世界に見る自画像と他者像」

総　括	石井　米雄[W]	（前出）
	桜井由躬雄	（東京大学教授）
	弘末　雅士	（立教大学教授）
	嶋尾　　稔	（慶應義塾大学助教授）
	西尾　寛治	（立教大学非常勤講師）

○西アジア研究部門

西アジア研究班

「イスラーム世界における契約文書の研究」

総　括	三浦　　徹	（お茶の水女子大学教授）
契約観念	後藤　　明	（東洋大学教授）
トルコ	永田　雄三[W]	（前出）
	林　佳世子	（東京外国語大学教授）
トルコ・ペルシア	清水　宏祐	（九州大学教授）
	堀川　　徹	（京都外国語大学教授）
	磯貝　健一	（京都外国語大学国際平和言語研究所研究員）

５部門11研究班23グループ　事務統括

瀧下　彩子[W]　（東洋文庫研究員）

なお、その他の研究員40名については、平成18年度現在、以上の組織に分属していないため、ここに記載しないこととした。

Ｄ．地域研究プログラム

○イスラーム地域研究資料室

本研究は人間文化研究機構と共同で実施され、イスラーム地域の現地語史料について、書誌情報や文献情報の体系化を進めることによって研究の基盤を作り、同時に史資料の体系的な収集や利用のための環境を構築する。史料群を地域社会全体を表す縮図と捉え、これを体系的・俯瞰的に研究することによってイスラー

ム地域の重層的な像を解明することを目的とする。

具体的には次の３つを柱とした研究活動を行う。

１．現地語史資料の体系的収集

２．文献情報ネットワークの構築

３．文書史料による比較制度研究

［研究実施概要］

ａ）現地語史料の体系的収集

研究協力者を派遣し、現地語史資料の体系的収集を開始した。今年度はまず東洋文庫所収史資料の欠本や異版を確認・補充することでコレクションの充実を図った。さらに、アラビア語資料については中東アフリカ地域で出版された人文・歴史・宗教分野の新刊書及び国内所蔵がなく今後の入手困難が予想される雑誌を収集し、オスマントルコ語については文学・法学分野の図書、ペルシア語ではマイクロフィッシュを中心に収集を行った。

ｂ）文献情報ネットワークの構築

文献情報ネットワークの立ち上げに向け、新収書誌・事業紹介や書誌データベースを搭載したホームページの発注・設計を行った。これからデータ入力を行うため段階的に公開を進めていくが、平成19年４月末にホームページの仮オープンを予定している。

また、平成19年３月に国立情報学研究所及びアラビア文字資料を所蔵する大学図書館13機関の参加を得て「アラビア文字図書ＤＢ連絡会準備会議」を開催し、アラビア文字資料の整理と公開について各機関での取り組みや問題点を報告・協議した。

ｃ）文書史料による比較制度研究

文書史料による比較制度研究では、近現代を含む文書史料（とりわけイスラーム法廷文書）をもとに、その地域間比較を通してイスラーム地域の社会制度・社会関係の研究を行った。

平成18年９月には研究分担者がアンマン（ヨルダン）にて開催の「歴史的シリア Bilad al-Sham」国際会議に参加し、同じく９月に歴史的アーカイブズの多国間比較プロジェクト（国文学研究資料館）との連携により、アンカラ（トルコ）において国際シンポジウム「オスマン朝と中近世日本における国家文書と社会動態」を開催した。

また、海外研究協力者としては、平成19年１月に、ドイツから来日のシュテファン・クノスト氏（平成18年11月より２年間滞在予定）が研究会を開催し「宗教施設の法的地位と社会的役割：オスマン朝期アレッポのモスク」と題して研究成果を発表したほか、３月にフランスより来日したランディ・ドゥギエム氏は15日に研究会「ワクフ研究の歴史をたどる：規範から拡散へ」を

開催、また17—18日には中央アジア古文書セミナーとの合同研究会にて研究発表講演（「革命的流行：オスマン朝最終世紀の公立学校」）を行った。

E．東洋文庫研究員・研究課題一覧

研究員	研究課題
青山　瑠妙	現代中国政治・外交の研究
淺野　秀剛	日本版画美術の研究
天児　　慧	現代中国の政治体制及び国際関係
荒　　松雄	南アジア史、民族・宗教の研究
新井　政美	トルコ近代史
荒川　正晴	中央アジア古代史
飯尾　秀幸	中国古代国家史
飯島　武次	殷周時代の考古学研究
池田　　温	中国中古史、前近代東亜文化交流史
池田美佐子	エジプト近現代史
伊香　俊哉	日本近現代史、戦争責任研究
石井　米雄	タイ史・三印法典の研究
石塚　晴通	日本語の歴史的研究、古代漢字文献学
石橋　崇雄	清朝政治史
磯貝　健一	イスラーム期中央アジア古文書研究
市古　宙三	太平天国及び中国共産党の研究
井上　和枝	李氏朝鮮時代郷村社会史研究・朝鮮女性史研究
井上　和人	東アジア古代都城制度の比較研究
今西祐一郎	源氏物語を中心とした平安時代文学の研究
上野　英二	平安朝文学の研究
内田　知行	1930—40年代中華民国社会史
内山　雅生	近代中国華北農村経済史
宇都木　章	春秋時代政治史
梅田　博之	現代朝鮮語の記述的研究
梅原　　郁	宋元時代の法制制度の研究
梅村　　坦	ウイグル民族誌、内陸アジア史
衛藤　瀋吉	近代中国政治史
大江　孝男	現代朝鮮語及び中期朝鮮語の研究
大河原知樹	19—20世紀シリアの社会史・政治史
大澤　正昭	唐宋時代社会史

太田　信宏	南インド近世史
太田　幸男	秦墓竹簡の研究
大谷　俊太	室町・江戸時代文学の研究
岡田　英弘	北アジア史
丘山　　新	中国仏教資料研究
小川　裕充	中国絵画資料研究
奥村　　哲	中国近現代史
小名　康之	インド・ムガール朝史
風間喜代三	印欧語の比較言語学的研究
粕谷　　元	トルコ現代史
糟谷　憲一	18―19世紀朝鮮政治史
片桐　一男	日蘭文化交渉史の研究
片山　章雄	中央アジア古代史
加藤　直人	清朝の民族統治政策・清代档案史料の研究
加藤　弘之	地域開発の現状と政策に関する実証研究
金丸　裕一	中国政治経済史・日中関係史
辛島　　昇	南アジア史
川井　伸一	中国企業研究
川﨑　信定	チベット仏教の研究
川島　　真	近代中国外交史
菊池　英夫	唐宋時代の行政および法制の研究
貴志　俊彦	近代中国における権力と秩序の形成史
岸本　美緒	明清時代地方社会史
北本　朝展	文献のデジタル・アーカイブ化
金　　鳳珍	東アジアの歴史・思想・国際関係
草野　　靖	宋代税財政史
楠木　賢道	清初の「民族」関係
久保　　亨	中国近現代史
窪添　慶文	魏晋南北朝時代史
熊本　　裕	イラン語史の研究
黒田　　卓	近現代イラン史
氣賀澤保規	魏晋南北朝隋唐時代の政治社会文化史
厳　　善平	中国の地域間労働移動と経済発展の研究
胡　　潔	和漢比較文学の研究・比較家族史の研究
黄　　東蘭	近代日中関係史
興梠　一郎	現代中国論、中国現代史

小嶋　芳孝	渤海文化の考古学的研究
小杉　　泰	現代イスラム政治の研究
後藤　　明	イスラム社会と政治の研究
小浜　正子	上海都市社会史
小松　久男	中央アジア近代史
早乙女雅博	東アジア考古学の研究
酒井　憲二	日本語の史的研究
桜井由躬雄	ベトナム史
佐竹　昭広	中世日本文学の史的研究
佐藤　次高	西アジア・イスラム史
佐藤　慎一	中国近代政治史資料研究
佐藤　　宏	農村経済社会の長期変動
塩沢　裕仁	中国古代歴史地理研究
滋賀　秀三	中国法制史の通史的研究
設楽　国広	オスマン帝国末期政治史
蔀　　勇造	南アラビア古代史
斯波　義信	中国社会経済史
嶋尾　　稔	ベトナム史
清水　宏祐	セルジューク朝時代イランの研究
清水　信行	古代の日本・大陸交流史
志茂　碩敏	13・4世紀モンゴル政権中枢・中核の研究
庄垣内正弘	チュルク語の研究
新免　　康	東トルキスタン史
末成　道男	東アジア人類学、民間における社会と宗教
須川　英徳	高麗・朝鮮時代の商業
杉山　正明	モンゴル帝国史
鈴木　　均	イランおよびアフガニスタンの地域研究
鈴木　博之	徽州民間祭祀の研究
鈴木　立子	元朝社会経済史
砂山　幸雄	現代中国思想・文化・政治体制
妹尾　達彦	中国古代・中世都市史
関尾　史郎	敦煌・トルファン文書研究
関本　照夫	東南アジア伝統工芸業の研究
曽田　三郎	中国近代政治・社会史
高田　幸男	長江下流域の地域社会・エリート・教育団体
瀧下　彩子	近現代中国文化史

武田　幸男	朝鮮古代・近世史
田島　俊雄	中国農業・農家の経済計算と所得分配
立川　武蔵	チベット密教教理の研究
田中　明彦	現代東アジア国際政治の研究
田仲　一成	中国演劇史
田中　時彦	日本の政治的近代化の研究
C. A. ダニエルス	清代社会経済史、中国技術史
田村　晃一	東北アジアの考古学研究
竺沙　雅章	中国仏教文化史
千葉　　熙	宋代宮廷史
辻本　裕成	中古・中世日本文学の研究
土田　哲夫	1920～40年代の中国政治・外交史
鶴見　尚弘	明・清時代社会経済史
寺田　浩明	中国明清法制史
唐　　亮	現代中国政治史の研究
戸倉　英美	中国古典文学資料研究
杤尾　　武	和漢比較文学の研究及び日本に伝来した漢籍の研究
土肥　義和	西域出土漢文文書の研究
富澤　芳亜	中国近代経済史
鳥海　　靖	日本近現代史
中兼和津次	現代中国経済・移行経済の研究
長沢　栄治	近代エジプト社会経済史
中嶋　　敏	宋代史
永田　雄三	オスマン帝国社会経済史
永積　洋子	日本近世対外交渉史
中野真麻理	中世日本文学の研究
中見　立夫	清代モンゴル史・清代文書の史料的研究
並木　頼寿	中国近現代史
西尾　寛治	マレーシア・インドネシア近世史
西田　龍雄	チベット・ビルマ語派の研究
延廣　眞治	江戸・明治の文芸
萩田　　博	ウルドゥー語学・文学の研究
長谷川誠夫	宋代官僚制の研究
八尾師　誠	20世紀初頭のイランにおける立憲革命の研究
花田　宇秋	正統カリフ・ウマイヤ朝史
濱下　武志	中国近現代史

濱島　敦俊	中国近世社会経済史
濱田　正美	中央アジアにおけるイスラーム研究
林　佳世子	オスマン朝期中東社会史
林　　俊雄	中央ユーラシア史・草原考古学の研究
原　　實	インド古代文学の研究
平勢　隆郎	中国考古資料研究
平野健一郎	近代東アジア国際関係論
平野　　聡	中国党支配（国民党・共産党）の史的研究
弘末　雅士	インドネシア宗教社会史
廣瀬　紳一	漢字文化圏電子情報学の研究
深沢　眞二	連歌・俳諧の研究
藤田　　忠	中国古代政治・社会史
藤本　幸夫	朝鮮本研究
古田　和子	情報・流通ネットワークの歴史的分析
古屋　昭弘	中国語の音韻史的研究
弁納　才一	近現代中国農村経済史
細谷　良夫	清朝政治史
堀　　敏一	中国古代都市文化の研究
堀川　　徹	中央アジア文書研究
本庄比佐子	近代日中関係史
松重　充浩	近現代中国政治・社会史及び東北アジア地域史
松永　泰行	現代イランの政治・宗教及びシーア派研究
松濤　誠達	インド古代神話学の研究
松丸　道雄	殷周金文の研究
松村　　潤	東北アジア民族史
松本　　弘	イエメン地域研究、エジプト近代史、現代中東政治
丸尾　常喜	魯迅の文学とその伝統
丸川　知雄	中国の産業集積および日中経済関係
三浦　　徹	イスラム都市社会史
水野　善文	古典サンスクリット文学と中世ヒンディー文学
三谷　　孝	近現代中国の秘密結社研究
御牧　克己	チベット宗義書の研究
宮崎　修多	近世近代漢詩文の研究
村井　章介	日本中世を中心とする東アジア文化交流史
村田雄二郎	中国近代ナショナリズム、改革開放期の文化問題
毛里　和子	現代中国政治・外交及び東アジア国際関係

籾山　　明	中国古代法制史・辺境史
森平　雅彦	高麗とモンゴル帝国関係史研究
森安　孝夫	古代ウイグル文書の研究、中央ユーラシア古代中世史
矢沢　利彦	西洋人の見た中国事情研究
柳澤　　明	清代外交史・民族関係史
柳田　征司	日本語の歴史的研究
柳谷あゆみ	イスラーム地域資料の研究
矢吹　　晋	近現代中国経済
山内　弘一	李朝史、朝鮮儒教研究
山内　民博	朝鮮後期郷村社会史研究
山口　瑞鳳	チベット史、チベット語文法、チベット仏教研究
山崎　元一	インド古代史
山本　英史	17―19世紀中国社会構造の研究
山本　毅雄	東洋学研究資料のデジタル・アーカイブ化
吉田　　寅	中国塩業史
吉田　伸之	日本近世都市社会史
吉田　光男	朝鮮近世史
吉田　　豊	ソグド語及びソグド語文献の研究
吉水千鶴子	インド・チベット仏教思想史の研究
吉村慎太郎	イラン近現代史
六反田　豊	朝鮮中世・近世史
和田　博徳	明清時代社会経済史
和田　恭幸	仮名草子および近世通俗仏書の研究
渡辺　紘良	宋代社会史

（全198人）

Ｆ．日本学術振興会科学研究費補助金による調査研究

（１）研究成果公開促進費

「東洋学多言語資料のマルティメディア電子図書館情報システム」
（An Information System of Multimedia Digital Library of Multilanguage Materials for Asian Studies）［東洋文庫電算化委員会委員長：斯波義信］（平成６年度以降採択）
［分野］「東洋学全般」
［目的・内容］

本プロジェクトは、東洋学に関する世界５大機関の一つに数えられる研究所・図書館である(財)東洋文庫が80年にわたり収蔵してきた言語種類50数種、部数約400,000件、冊数約900,000冊におよぶ大量の他言語資料について、従来構築した書誌データのオンライン検索の基礎の上に、画像資料をデジタル化した上、インターネットを通じて内外の研究者が自由に利用できるようにすることを目指している。

本文庫のモリソン・岩崎コレクションには国宝・重文を含む貴重な文献・絵画が含まれる。これらは、本文庫として従来から細心の注意を払って保存してきたが、近年の電子技術により、これをデジタル撮影して保存し、画像データベースとして公開すれば、内外の要請に応えることができ、また資料保存の面でも劣化に対応することができる。特に地図（江戸地図200種、欧米人のアジア地図300種）、銅版画、浮世絵、挿絵本、中国南北朝拓本、考古学者の中国・朝鮮・日本関係発掘資料、器物写真など、デジタル化して画像資料として研究者に提供する価値のあるものが多い。また、マルコ・ポーロ東方見聞録のテキスト50数種、16世紀以来のイエズス会士の書簡、江戸時代のオランダ商館関係者の記録などの古文書、岩崎家収蔵の万葉集、源氏物語、徒然草などの貴重古典籍なども、全文テキストとして公開することが内外研究者から期待されている。昨年度から、画像データベースの構築に着手した。台湾の国家典蔵数位計画、上海の資料構築計画、シンガポールアーカイブのデジタル資料状況などを視察した上、独立行政法人情報学研究所と技術提携し、資料のデジタル化を試行してきた。文化庁・総務省によるデジタルアーカイブの構築にも情報学研究所を通じて画像資料を提供している。本文庫として、デジタル化の対象となる膨大な資料を擁している。デジタル化計画は着手したばかりであるが、関係諸機関との協力の下に、できるだけ早く目的を達成する。

［事業実施概要］
（１）書誌データ

欧文逐次刊行物3,400件、現代中国語文献資料20,000件の書誌データの入力を完

了した。次年度初めに Website に公開する予定。
（2）画像データ
次の資料につき、デジタル撮影と画像取り込みを完了した。
①地図　140件
②絵画　140件
③浮世絵　140件
④考古器物　5,000件
（3）全文テキスト
次の資料につきマイクロ撮影と画像取り込みを完了した。
①イエズス会士書簡　6,000頁
②岩崎貴重古典籍　2,000頁
これらの画像は目下館内の閲覧に供しているが、次年度には Website に公開する予定である。
［作成担当者］田仲一成（図書部長）

（2）基盤研究（B）

「第一次大戦期日本の山東経営をめぐる総合的研究」
［研究代表者：本庄比佐子］（平成15年度採択、4ヶ年間・最終年度）
［目　的］
第一次世界大戦時に日本はドイツの膠州湾租借地を攻略し、青島及び山東鉄道沿線における諸権益の獲得・拡張を図った。このことは、それまで主に東北地域と台湾に限られていた日本の勢力圏を中国の関内地域に拡大していく端緒となった。
本研究では、①この時期、すなわち1910年代後半から20年代初めにかけて青島守備軍を始め満鉄、農商務省などの機関により進められた山東地域の実態調査の全容を明らかにし、②それらの調査資料を利用しつつ、日本の山東経営及び当時の山東地域の政治・経済・社会に関する総合的な考察を行う。
［研究実施概要］
（1）前年度末に本研究の中間報告として論文集『日本の青島占領と山東の社会経済』を東洋文庫から刊行することができたが、これを基礎にして「国際シンポジウム〈日本の青島占領と山東の社会経済〉をめぐって」を開催した。シンポジウムでは、論文集に寄稿を得た山東社会科学院および青島市社会科学院の研究者を招聘し、また国内では中国史だけでなく日本史研究者の参加を得て、日本軍の占領下に進められた日本資本の山東進出の実態を中心に日本の山東経営の諸問題について報告と討論が行われた。そして、山東還付後の変化、関東

州租借地経営との比較の必要など更なる研究の発展と深化のために有益な示唆を得ることができた。

（2）シンポジウム参加の山東社会科学院庄維民・劉大可両氏を囲んで、両氏の共著『日本工商資本与近代山東』について本研究メンバーによる合評会を開いた。本書は日本の山東侵略に関する総合的な研究書であり、その研究方法が従来の中国の研究に見られた「半植民地化」論によらず、日本の資料をも系統的に使って山東の社会経済の変動の一要因として日本の影響を具体的に分析している点に注目した。日本軍の青島占領下における日本資本の鉱工業・商業経営・金融業などへの進出問題を中心に、焦点のかみ合った討論ができた。

（3）過去3年間の資料収集・調査の結果を「青島守備軍編刊書・報告書目録附・解題」にまとめ、研究成果報告書に収録した。青島守備軍の各部門及び山東鉄道管理部が作成した調査資料をまとめ、うち主な資料についてはメンバーが分担して解題を作成したものである。日本の山東経営策をみる上で青島守備軍の行った調査活動とその報告書の検討は欠かせないが、従来それらを一覧できる目録はなく、本目録は今後の研究に寄与するところ大であると考える。

［研究分担者］　曽田三郎　松重充浩　久保享　奥村哲　金丸裕一　富澤芳亜
内山雅生　三谷孝　弁納才一　瀧下彩子

「古代インドの環境論」

［研究代表者：原　實］（平成18年度採択、3カ年間・初年度）

［目　的］

科学技術、機械文明の発達は反面自然破壊を結果し、近年生態系の変化や地球の温暖化が問題視され、人間とそれを取巻く自然環境との共存が識者の注意を喚起しているが、この問題が古代インドにおいてどのように考えられていたかを見直そうとするのが本研究の目的である。

インドには古くから「不殺生」の思想があり、それは仏教の「山川草木悉有仏性」「草木国土悉皆成仏」の教義を通じて我が国にも伝えられた。その思想的背景をより体系的に検討する為に、この視点から梵文原典や漢訳仏典を詳細且つ綿密に検討し直す必要がある。

研究代表者は先ず現在古代インド乃至仏教の環境問題に関心を寄せている欧州の有力な学者を訪ねその教示を得つつこの研究に国際性を持たせ、その水準に於いて同学の諸氏の協力の下、この研究を進めていきたいと考える。

［研究実施概要］

平成18年4月、日本学術振興会の内示を得、同年7月研究補助金の交付を受けて、本研究は財団法人東洋文庫に事務局を置いて正式に発足した。折から、研究代表者は英国のエジンバラで開催された第13回国際サンスクリット学会に参加し

て、本邦においてこの研究が開始されることを宣言し、関係者の理解と協力を要請する機会を持った。

平成18年10月24日、本郷学士会館分館において最初の開合を持ち、研究代表者は彼のこれまでの研究を報告して本研究の趣旨を明らかにし、その線に沿って各々の研究分担者がそのような形で参加し得るかを検討し確認した。

次いで平成19年１月16日、同じ会場において、研究分担者で日本仏教を専攻する末木文美士は10世紀の天台の学僧・五大院安善の草木成仏説の系譜を明らかにした論稿を報告して、その後討論に入った。次回は４月３日、岡田真美子が発表する予定である。

海外からは偶々別のプロジェクトで来日中であったハンブルグ大学の L.Schmithausen とエジンバラ大学の J. L. Brockington 両人を東京大学及び東洋文庫に招いて講演及び討論の機会を持った。

尚、上記二回の討論会でこの問題に関心を寄せている松村淳子（神戸国際大学）、北田信（ドイツ・ハレ大学）両名を新たに研究分担者と研究協力者に加えることを決定した。

（３）基盤研究（Ｃ）

「朝野類要の総合的研究」

［研究代表者：渡辺紘良］（平成17年10月追加採択、２ヶ年間・最終年度）

［目　的］

『朝野類要』は、宋代官制用語の簡にして要を得た書として有名であるが、従来、この書自体の研究は皆無であった。中華書局の唐宋筆記叢刊にも採録されていない。我々は宋史選挙志の研究（『宋史選挙志訳註』３冊刊行）を踏まえ、科学研究費補助金（課題名「宋代の経済政策及び関連する諸政策の総合的研究」）の支給に預かり、過去数年間、研究を進めてきたが、今回、その研究の完成をめざし、以下の課題を達成させようというものである。①半ば完了している本文の解読を更に推進し、全体の詳細な訳注を完成させる。②種々版本の研究を徹底させる。③著者趙昇について可能な限り、その人物像を明らかにする。

［研究実施概要］

（１）平成18年４月、北京大学を訪問し、『朝野類要』刊本、編者、内容、訳註方法等について意見の交換を行った。昨年度の北京大学大学院演習科目『朝野類要』担当教授張希清氏来日を承けたものである。

（２）その際、北京大学図書館を訪ね、四庫全書本の底本（恵棟校本）調査に当たった。底本調査の結果、そこには恵棟のみならず、四庫館員の校訂作業の形跡を多く発見できた。北京では、社会科学院及び中国国家図書館をも訪ね版本

調査に当たった。

（3）平成18年7月には南京大学、9月には台北に国家図書館を訪ね、それぞれ版本調査に当たった。以上の各地の版本調査をもとに、校勘記を付した明刊本『朝野類要明刊本校証稿』を作製した。

（4）平成19年1月には、上海師範大学朱瑞熙教授を招聘した。教授は宋代科挙官僚制研究の第一人者として知られており、特に『朝野類要』には造詣が深く、参加いただいた研究会に於いて得られた知見は多大であった。

（5）編纂者の趙升については、天理大学図書館所蔵『重編詳備砕金』の「双桂書院」及び「趙宅書籍鋪」なる記載によって、「書鋪」経営者或いは書店主（出版人）であったことをつきとめた。

（6）『朝野類要』330条文全体の訳注を完成させた。

（7）以上の成果を基に平成19年3月、報告書『朝野類要の総合的研究』を刊行し、朝野類要訳注のほか、「索引」「朝野類要編纂者趙升考」「明刊本朝野類要校証稿」等を掲載した。

［研究分担者］　長谷川誠夫　相田洋　青木敦　近藤一成

「敦煌・トルファン漢語文献の特性に関する研究」

［研究代表者：土肥義和］（平成18年度採択、3カ年間・初年度）

［目　的］；

本研究は、旧来、中国の中央で編纂された漢語史料を中心に進められてきた敦煌・トルファンなど内陸アジア諸地域の諸民族の歴史を、現地で作成された生の漢文文書を分析することによって、諸民族の歴史の実態を新たに研究することにある。これに関連して、近年東洋文庫が microfilm で入手したロシア科学アカデミー東方学研究所サンクト・ペテルブルク分所の漢文文書がどのような特質をもっているかについて、書誌学的、あるいは古文書学的な整理と研究を行う。このために、本年度は、「サンクト・ペテルブルク東洋学研究所所蔵漢語文献 microfilm（107リール）文献番号・コマ数対照表」をデータベースとして作成すること、及びそれらを共同で利用・研究する研究者組織をつくることを目的とする。

［研究実施概要］

年度の初めに確定した研究計画にしたがって、平成18年度は、次の調査・研究を行った。

（1）サンクト・ペテルブルク東洋学研究所所蔵漢語文献 microfilm（107リール）の『文献番号・コマ数対照一覧表（稿）』のデータベース化はほぼ完了した。

（2）上記（1）の「文献番号・コマ数対照一覧」のうち、既存の『俄蔵敦煌文献』（全17冊、19000余点）に収録されていない漢語文献（13リール）を、研究用材料として集積した。

（3）上記（2）の史料を内容別に分類・研究するために、研究協力者（池田温・氣賀澤保規・関尾史郎・伊藤敏雄・石田勇作・張娜麗諸氏）と合宿会議を開催した。(2006年9月28・29日)

（4）本研究が対象とする漢語文献（microfilm や複製写真）を補充するために、原文献を所蔵する中国の諸機関(旅順博物館・開封市文物管理委員会・龍門石窟研究院・北京大学図書館・中国国家図書館など)を訪問し、現物の調査と学術交流とを行い、北京大学歴史系においてはトルファン文書に関する新収情報を得た。(2006年12月21～29日)

（5）個別研究として、土肥義和は、北京大学の栄新江教授より提供されたトルファン出土の武周期戸籍残巻（6断片、66 TAM 360：3）の鮮明な写真について、戸籍の作成年次や記載内容を検討して、唐代西州における均田制（給田制）の一側面を明らかにした。(「武周天授三年（692）西州高昌県戸籍の復元と考察」と題して、2007年4月21日に発表)

（6）個別研究として、片山章雄は、1995年に実見した1文書を含めて旅順博物館所蔵のトルファン出土物価文書を扱い、上記（4）の調査による再確認と新たな成果を得た。「胡」を冠する「胡粉」などの物品にも言及したが、いかに胡漢雑居の問題に繋がるかが課題である。

G．その他の民間助成金による調査研究

（1）三菱財団人文科学研究助成金特別事業

①「中国社会経済史用語解（宋代篇）作成の研究」

［代表研究者：斯波義信］(平成17年10月～20年9月・3ケ年間)

中国社会経済史の研究が興って約100年に近いが、この研究の基礎前提をなす漢籍史料の校訂・読解・および必要情報の抽出という作業段階において、これを容易にする専門的な辞書・用語解がまだ整っておらず、研究の推進や普及を困難にしている。中国社会経済の用語は、用例・用法ごと、時期・地域ごとに多義かつ複雑であるのに、専門辞書が皆無にちかく、詳細な漢和辞典においてもまれにしか掲載していない。本研究はこれを打開するため、これまでに蓄積された用語知識を修正してデータベース化しつつ、研究者が常備使用できる用語解を作成することをめざし、とりあえずこれを宋代史について実施する。

東洋文庫では、創立当初からの継続的事業の一つとして、中国経済史の基本史料に当たる13種の歴代正史食貨志（経済・財政記録）の詳しい訳註を作成してきた。このうち最も大部で、しかも元・明・清時代の制度や実体のルーツを記録する『宋史』の食貨志篇について、その訳註を逐次刊行し平成17年度にその完成を

見るに至った。

そこで、これまでに蓄積された用語解釈を選定集成し、国内及び海外の宋代社会経済史の研究者が常時必携参照し、研究全体の推進に資すべき用語解の編纂を計画した。用語の選定範囲は基本的には『宋史』食貨志篇の各章とするが、各章の記述の源泉をなす『宋会要輯稿』食貨篇の語彙索引（現在同時推進、刊行中）及び専門学術書中の附註なども広く参照し、また各語彙の用例、用法、典拠史料、時期別、地域別の限定も付し、要するに実用的な辞書機能を帯びた用語解釈の集成を行なうものである。この企画を実現し、さらに将来その成果を日本文・英文で刊行することに至れば、中国社会経済史の研究の推進と解釈の深化が大いに期待される。

[研究実施概要]

（1）前年度に引き続き、まず《用語解》に収録する語彙の選定、解説の範囲及び項目、すなわち語彙の用法、用例、典拠記事、時期及び地域の特定、そして、この資料をデジタルデータベースとして入力する方式・準則を定めるための作業を継続し、更に、役割を分担して、《用語解》の原稿作成に入った。

（2）語彙選定については、作業上『宋史』食貨志の上巻、すなわち田制・税制・衣料生産・物資買い上げ制・輸送制・賦役制・救済制等、「食」に関する部分（A班）と、『宋史』食貨志の下巻、すなわち会計・幣制・専売制・商業税・国営商業・物価対策・海外貿易等、「貨」に関する部分（B班）とに分け、班ごとに原稿の作成をすすめている。

（3）選定語彙及び用語解釈の原案を審議し、記述準則を共有するために定期的に会合を行った。また、共同研究者は準則を共有しつつ、用語解釈の作成と入力を継続した。

（4）これまで進めてきた『宋会要輯稿食貨索引』一般語彙の編集作業を、本事業の中に統合し推進中である。

（5）平成19年度以降は、《用語解》の成稿作成と入力を継続し、全体で定期的に会合して問題点を調整する。また成稿上の用語と解釈について、その英語表記の検討に入る。

（6）平成20年度前半までに、各自分担の作業を完了させ、後半には逐次会合を持ち、総合的な最終調整を行う。

②「清代諸領域の歴史的構造分析：総合研究―清代東アジア・北アジアにおける諸領域の政治・社会・経済・民族・文化の展開―」

[代表者：石橋崇雄]（平成18年10月～20年９月・３ケ年間・初年度）

清朝史における従来の研究成果は目覚ましいが、清初（入関前と入関後）・清中期・清末（近代）の各時期における政治史研究、中国内地についての社会経済

史研究、東北部研究、藩部研究、露清関係研究など、諸領域世界のそれぞれ特定の時代内、あるいは領域区分内における個別研究の段階に止まっており、諸領域世界相互に亘る総合研究はなお殆ど行われていない。こうした現状認識から、本プロジェクトは新たな清朝史研究の在り方を提示する具体的作業を遂行する。

［研究実施概要］

初年度における研究作業の一環として、全体計画の打ち合わせを重ねており、現在、共同研究者による北アジアにおける現地調査・研究の準備を進めている段階にある。

2．学術図書出版

新しく発表される、或いは「調査研究」の成果として東洋学に関する重要な研究業績を出版し国内国外に紹介する。また、アジア研究の国際化をさらに促進すべく、東洋文庫を中心とする日本のアジア研究の優れた研究成果を、主に英文等の欧文を中心に『東洋文庫欧文論叢』として刊行する。

A．定期出版物刊行

『東洋学報』（東洋文庫和文紀要） 第88巻第１～４号	A５判	４冊	490頁
Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko（東洋文庫欧文紀要）No.64	B５判	１冊	148頁
『近代中国研究彙報』 第29号	A５判	１冊	89頁
『東洋文庫書報』 第38号	A５判	１冊	188頁
『超域アジア研究報告』 第４号	B５判	１冊	101頁
Asian Research Trends New Series No.2	A５判	１冊	75頁
『東洋文庫年報』平成17年度版	A５判	１冊	頁

B．論叢等出版

Mémorial OJIHARA Yutaka-Studia Indologica（Toyo Bunko Research Library〈TBRL〉東洋文庫欧文論叢 No. 9）	A５判	１冊	331頁
『日中戦争期の中国における社会・文化変容』	A５判	１冊	285頁
『トルコにおける議会制の展開―オスマン帝国からトルコ共和国へ―』	B５判	１冊	
『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅴ』	B５判	１冊	193頁

『晋書食貨志訳註』	A５判	１冊	328頁
『宋史食貨志訳註五・六語彙索引』	B５判	１冊	68頁
Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt	A４判	１冊	179頁

３．講　演　会

A．研究情報普及

（１）東洋学講座

（春　期）　共通テーマ：現代イスラームを語る

第493回　平成18年５月９日（火）
「近代イランにおける民衆運動の軌跡
—タバコボイコット運動・立憲革命・ジャンギャリー運動－」
東洋文庫研究員
東北大学助教授　　黒田　卓　氏

第494回　平成18年５月16日（火）
「現代アラブ世界とイスラーム—イラク戦争から３年の現在から考える—」
東洋文庫研究員
東京大学教授　　長沢　栄治　氏

第495回　平成18年５月23日（火）
「トルコのＥＵ加盟問題とイスラーム」
東洋文庫研究員
立教大学教授　　設樂　國廣　氏

（秋　期）共通テーマ：近現代中国の地域社会と日本

第496回　平成18年11月7日（火）
「はじめに—近代中国研究と青島守備軍資料—」
東洋文庫研究員　　本庄比佐子　氏
「山東懸案解決交渉と日本の新聞報道」
東洋文庫研究員
広島大学大学院教授　曽田　三郎　氏

第497回　平成18年11月14日（火）
「近現代の山東経済と日―青島ビール・在華紡などを例に―」
東洋文庫研究員
信州大学教授　　久保　亨　氏

第498回　平成18年11月21日（火）
「山東農村の過去と現在―“三農”問題と社会変動―」
東洋文庫研究員
宇都宮大学教授　　内山　雅生　氏

（2）特別講演会

第１回　平成18年７月26日（水）
（１）「唐代印刷史の諸問題―「模勒」の字義と書籍印刷の普及をめぐって―」
北京大学教授　辛　徳勇　氏
（２）「遼代のシラ=ムレン川流域地区の聚落分布からみる環境の選択」
北京大学教授　韓　茂莉　氏

第２回　平成18年９月11日（月）
「中国宋代の妓女と地方政府―ジェンダー史の事例研究―」
カリフォルニア大学デーヴィス校教授　Beverly Bossler　氏

第３回　平成18年11月20日（月）
“The Chinese Hi-Tech Professionals in Silicon Valley”
サンフランシスコ州立大学　Bernard P. Wong　氏

第４回　平成18年11月24日（金）
「アラビア語文書資料の世界」
ウィリアム・メアリー大学教授　アブドゥル・カリーム・ラーフェク　氏

第５回　平成19年１月29日（月）
「南宋高宗の評価について」
上海師範大学古籍整理研究所研究員　朱　瑞熙　氏

第６回　平成19年３月２日（金）
「シルクロードの新出土文書―トルファン新出文書の整理と研究」
北京大学教授　栄　新江　氏

（3）研　究　会（東洋文庫談話会）

・日　時　平成19年３月19日（月）

「北部エチオピアに於ける歴史叙述の特色」

日本学術振興会特別研究員ＰＤ　石川　博樹　氏

B．データベース公開

平成18年４月１日～同19年３月31日までの期間に、東洋文庫の図書・資料の（データ日本語、英語）に対するオンライン検索アクセス件数は、概略、以下の通りです。

区分／2006年４月～2007年３月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
漢籍資料（含・中文逐次刊行物）	1,117	1,530	1,282	1,179	1,205	1,277	1,274	1,321	1,064	1,396	1,183	1,293
中文・日文・欧文・ロシア新収図書目録	255	225	202									
中文図書（含・近中、逐次）	1,677	2,513	2,405	1,499	1,560	873	995	1,043	958	1,381	1,160	1,064
日本文図書（含・近中、逐次）	1,307	1,433	1,601	2,307	2,588	1,879	2,104	3,402	2,226	3,180	2,739	2,920
日本関係文献目録（含・近代、岩崎）	705	717	805	575	481	230	284	378	296	436	386	498
洋書（欧文図書）目録（含・近中）	924	783	639	826	682	742	554	669	620	849	749	1,137
洋書総合	1,517	1,085	1,417	1,280	1,069	1,204	1,352	1,767	1,625	1,328	1,065	1,212
アラビア語図書	943	875	592	966	927	930	1,091	1,005	965	1,146	999	1,325
トルコ諸図書（含・オスマン語）	325	335	269	428	262	232	238	328	292	351	369	308
ペルシア語図書	984	929	644	448	306	475	455	552	511	592	540	608
チベット語文献（河口・蔵外文献）	518	521	425	486	394	360	336	386	337	544	321	284
モンゴル語図書・資料	164	182	241	274	307	136	136	171	168	235	165	206
ウイグル語図書・資料	221	172	156	245	238	98	187	124	202	323	314	139
ビルマ語図書	248	228	182	226	207	229	190	211	174	209	164	146
インドネシア・マレーシア語図書	225	236	170	150	157	105	94	116	131	149	93	118
中央アジア研究文献目録	630	547	402	392	394	412	305	340	322	513	313	290
中東イスラーム研究文献目録	1,170	1,160	1,186	1,161	879	652	635	901	801	1,037	553	619
アジア歴史研究者ディレクトリ（含・インド仏教学関係）	181	217	317	523	465	177	212	214	219	337	121	369
画像DB(梅原考古資料、香港銅版画等)	596	2,151	1,938	1,571	1,831	2,277	1,752	1,571	1,262	1,818	1,597	2,475
その他(別置ロシア・カザフ・朝鮮など)	4,169	5,004	5,114	5,536	5,584	5,549	5,785	5,863	4,839	7,363	5,228	5,931
合　計	17,876	20,843	19,987	20,162	19,536	17,837	17,979	20,362	17,012	231,879	18,059	20,942

4．学　術　情　報　提　供

東洋文庫は、日本における東洋学の共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡に当たって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

A．研究者の交流および便宜供与のサービス

（１）長期受入

1）平成18年度日本学術振興会特別研究員ＰＤの受入

石川　博樹（東京大学大学院ＰＤ）
「16、17世紀エチオピア北部社会の研究：
牧畜民の流入とイエズス会布教の影響を中心に」
（平成16年度採用、同17・18年度３ヶ年間）

五十嵐　大介（中央大学大学院ＰＤ）
「マムルーク朝後期エジプト・シリアにおけるイクター制の崩壊過程と
社会体制の変容」
（平成17年度採用、同18・19年度３ヶ年間）

河原　弥生（東京大学大学院ＰＤ）
「コーカンド・ハーン国期におけるフェルガナ・ムスリム社会の
形成とイスラーム」
（平成17年度採用、同18・19年度３ヶ年間）

飯山　知保（早稲田大学大学院ＰＤ）
「士人層の変遷からみた金元代華北における社会統合と
後世華北漢族社会形成の淵源」
（平成18年度採用、同19・20年度３ヶ年間）

小笠原　弘幸（東京大学大学院ＰＤ）
「オスマン帝国における歴史意識―建国神話に見られる
「起源」の記憶と創造の変容」
（平成18年度採用、同19・20年度３ヶ年間）

森山　央朗（東京大学大学院ＰＤ）
「10～12世紀の中東におけるウラマーと地方史人名録編纂の社会史的研究」
（平成18年度採用、同19・20年度３ヶ年間）

3）外国人研究者の受入

Claus M. FISCHER（ドイツ連邦ゲッチンゲン大学教授）
「近世日本の古典芸能、特に歌舞伎史の研究」
（平成16年２月８日～同19年２月７日・私費）

Jérôme BOURGON（フランス国立科学研究センター［CNRS］研究員）
「清朝の官箴類を中心とした中国法制史関係の資料調査と研究」
（平成16年６月８日～同19年３月31日・フランス政府資金）

Christophe MARQUET（フランス国立東洋言語文化研究所教授）
「江戸中期・後期の絵入り本と画譜」

（平成16年９月１日～同19年８月31日・フランス国立極東学院経費［東京支部代表］）

Pierre-Etienne WILL（コレージュ　ド　フランス中国近代史講座教授）
「中国の官箴・公牘・政書類を中心とする文献の調査と研究」
（平成18年５月28日～同６月10日・フランス政府資金）

辛　徳勇（北京大学中国古代史研究中心教授）
「中国の歴史地図を中心とする文献の調査」
（平成18年７月１日～同７月31日、科学研究費補助金）

韓　茂莉（北京大学環境学院教授）
「中国の歴史地理を中心とする文献調査」
（平成18年７月１日～同７月31日、科学研究費補助金）

Harmen BEUKERS（ライデン大学医学系）
「医学関係資料を中心とする文献の調査と研究」
（平成18年７月31日～同８月31日・ライデン大学公費）

Elsa LEGITTIMO（国際仏教大学院大学　Ph.D）
「インド仏教学関係の文献調査」
（平成18年９月26日～同19年３月31日・極東学院奨学費）

Stefan KNOST（フランス近東研究所研究員）
「オスマン都市の自治的行政組織―タンジマート期以前のアレッポ―」
（平成18年11月21日～同20年11月20日、日本学術振興会外国人特別研究員）

栄　新江（北京大学中古史研究センター教授）
「東西交渉史を中心とする文献の調査」
（平成19年１月10日～同３月10日・科学研究費補助金）

Deguilhem RANDI（フランス国立アラブ・イスラーム世界研究所教授）
「オスマン朝史を中心とする文献の調査」
（平成19年３月13日～同３月24日・イスラーム地域研究）

（２）外国人研究者への便宜供与

Bhutan
PHUNTSOK TASHI. Kheanpo　Director, the National Museum of Bhutan

China（Peoples Republic）	
栄　新　江	北京大学中国古代史研究中心教授 （以下、26名）
China（Taiwan）	
胡　暁　真	中央研究院中国文哲研究所研究員 （以下、５名）
France	
Christian LAMOUROUX	Prof., Ecole des Houtes Etudes en Sciences Socials.（以下、２名）
Germany	
R. EMMERICH	Prof., Münster University
Korea	
金　在　弘	国立中央博物館歴史部学芸研究官 （以下、４名）
Kyrgyzstan	
Ilhan ŞAHIN	Prof., Faculty of Humanities, Kyrgyz-Turkish Manas University
Lebanon	
Massoud DAHER	Prof., Department of History, Lebanese University
Poland	
AGATA Bareja-Starzynska	Department Head, Turcology and Inner Asian Peoples, Institute of Oriental Studies Warsaw University
UK	
Joseph P. McDERMOTT	Prof., Department of Chinese History, University of Cambridge
John BROCKINGTON	Prof., University of Edinburgh
USA	
Richard von GLAHM	Prof., Department of History, UCLA （以下、３名）

Uzbekistan

Kuchkarov AKMALJON　　Third Secretary, Embassy of Uzbekistan.

Vietnum

阮　有　通　　越南文化通信研究院 在順化文化通信研究分院長（以下、２名）

B．各種研究会等への会場提供サービス

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
研究会回数	10	14	7	9	2	5	10	7	9	7	10	13	103回
参加人数	78	83	45	101	43	139	76	52	77	78	79	170	1,021人

C．研究資料の復刻・増刷の刊行サービス

東洋学報　第87巻第４号	350部
東洋学報　第88巻第１～３号	各330部
東洋文庫欧文紀要　No. 63	50部
Reseach Trends in Modern Central Eurasian Studies(18th-20th Centuries) : A Selective and Critical Bibliography of Works Published between 1985-2000. Part 2. (TBRL 7)	80部
宋-清代の法と地域社会	150部
日本の青島占領と山東の社会経済	150部
近代中国研究彙報　第28号	50部
書報　第37号	50部
Tax Farm Register of Damascus Province in the Seventeenth Century	80部
年報平成17年度版	10部

D．参考情報提供のサービス

『東洋文庫年報』　平成17年度版　　Ａ５版　１冊

E．広報普及

東洋文庫ホームページ（和文・英文）を随時更新・刷新した。

平成18年４月～平成19年３月までのホームページ全体のアクセス件数は、以下のとおりである。

なお、ホームページ全体のアクセス件数には、東洋文庫図書資料データベース

（書誌データ）へのオンライン検索アクセス件数を含む。

数量／月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
アクセス数	33,363	34,903	32,979	33,416	31,730	28,867	29,225	33,113	26,314	39,570	29,708	33,035	386,223

5．研究員等の研究業績

期間：平成18年４月１日～平成19年３月31日まで
略号：①…著書　②…編著　③…論文　④…学会動向　⑤…書評・紹介
⑥…翻訳　⑦…講演　⑧…その他（評論・雑記・座談会等）

荒川　正晴

③「北朝隋唐初の在俗仏教信徒と五道大神」（『中国学の十字路―加地伸行博士古稀記念論集―』研文出版、2006年４月、509-523頁）、「遊牧民とオアシス民の共生関係とは何か：西突厥と麹氏高昌国のケースから」（『近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク』桃木至朗代表、平成16-18年度科研費研究成果報告書、2007年３月、28-48頁）、⑧"Oasis States and Caravan Trade in Central Asia during Pre-Islamic Times (c. 3-9C.)" Tsuyoshi Katayama (ed.), Course Records "History, Manners and Customs, and Interchange-Asia and Japan-" in the Osaka University Short-term Student Exchange Program (OUSSEP) 2006 Fall Semester, 2007年３月, pp.56-69.。

池田美佐子

③「エジプト立憲君主制期の議会議事録－20世紀前半における民主主義の試み」（『歴史と地理―世界史の研究』594号、山川出版社、2006年５月、26～33頁）、「19世紀後半のエジプトにおける近代議会の展開：代表諮問議会・代表議会（1866年～1882年）」（『Cross Culture（光陵女子短期大学紀要）』23号、2007年３月、17～29頁）、NAGASAWA Eiji and IKEDA Misako. A Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt. Tokyo: the Toyo Bunko, 2007.、⑦「大戦間期エジプトにおける新世代の台頭と政治・言論活動」（朝日カルチャーセンター・横浜「現代中東が作られた時代－大戦間期の中東」シリーズ、2007年３月24日）。

伊香　俊哉

①『戦争犯罪の構造』（共著、大月書店、「中国雲南省にみる日本軍の住民虐殺

(1942～1945)」143～174頁を執筆、2007年２月)、③「戦争の記憶の接触と変容―雲南における―」(平野健一郎編『日中戦争期の中国における社会・文化変容』、263～280頁、財団法人東洋文庫、2007年３月)、⑤「書評「藤原彰著『天皇の軍隊と日中戦争』」(日本科学者会議『日本の科学者』vol.41、48頁、2006年11月)。

石橋　崇雄

②『北京故宮博物院展～清朝末期の宮廷芸術と文化～』図録(2007年版)(監修・執筆、2007年３月、アサツーディ・ケイ、152頁)、③「満漢合璧『jakūn gūsai targabun(八旗箴)』」(史料紹介、『国士舘東洋史学』創刊号、2006年６月、140～150頁)、「満文『欽定八旗則例』(乾隆７年版)Ⅰ」(共訳、『国士舘東洋史学』創刊号、2006年６月、151～174頁)、⑦「清の康熙帝」(朝日カルチャー横浜《公開講座》「中国の皇帝の実像を探る」第４回、2006年４月１日)、「清の宣統帝(溥儀)」(朝日カルチャー横浜《公開講座》「中国の皇帝の実像を探る」第５回、2006年４月15日)、「中国清朝末期の宮廷と文化《慈禧皇太后と宣統帝の時代にみる清朝末期の光と影》(１)」(千葉市民文化大学「講座：世界史学科」、2006年５月23日)、「中国清朝末期の宮廷と文化《慈禧皇太后と宣統帝の時代にみる清朝末期の光と影》(２)」(千葉市民文化大学「講座：世界史学科」、2006年５月30日)、「中国清朝末期の宮廷と文化《慈禧皇太后と宣統帝の時代にみる清朝末期の光と影》(３)」(千葉市民文化大学「講座：世界史学科」、2006年６月６日)、「承徳の避暑山荘と外八廟～清朝支配構造の視点から～」(「高崎哲学堂で聴く姉妹都市連続講話全六夜」第四夜《中国》、高崎哲学堂、2006年10月６日)、「《食》の国際文化交流～大清帝国における満漢全席と餃子」(高崎市並榎中学校、2007年２月25日)、⑧「北京故宮博物院展～浮かぶ清朝末期の宮廷生活」(『北京故宮博物院展～清朝末期の宮廷芸術と文化～』寄稿論説、『大分合同新聞』2006年７月31日)、「宝座に見える三爪の龍」(『北京故宮博物院展～清朝末期の宮廷芸術と文化～』寄稿論説(上)、『下野新聞』2006年10月３日)、「仏教に対する深い信仰心」(『北京故宮博物院展～清朝末期の宮廷芸術と文化～』寄稿論説(中)、『下野新聞』2006年10月４日)、「幼い溥儀が着用した礼服」(『北京故宮博物院展～清朝末期の宮廷芸術と文化～』寄稿論説(下)、『下野新聞』2006年10月５日)。

井上　和枝

①『近代東アジア経済の史的構造　東アジア資本主義形成史Ⅲ』(共著、中村哲編著、日本評論社、241～280頁、総398頁、2007年３月)、⑦「1920～30年代における日本と植民地朝鮮の生活改善運動」(朝鮮史研究会１月例会、2007年

1月27日、東京大学)、「朝鮮に行った鹿児島人、鹿児島に来た朝鮮人」(鹿児島国際大学国際文化学部講演会『日韓関係の縮図としての鹿児島』、2007年3月14日、鹿児島国際大学)、⑧「朝鮮の戸籍史料—村の権力関係から個人史まで」(『歴史と地理』599、「世界史の研究」209、31～40頁、山川出版社、2006年11月)。

上野　英二

②『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅴ』(共編、財団法人東洋文庫、2007年3月)。

内田　知行

②『日本の蒙疆占領　1937～1945』(内田知行・柴田善雅編、研文出版、2007年2月、377頁)、③「内モンゴルの抗日政権とアヘン政策」(平野健一郎編『日中戦争期の中国における社会・文化変容』、171～206頁、財団法人東洋文庫、2007年3月)、⑦「The Anti-Japanese War and the Friendship Movement between India and China, 1937-1945」(The International Conference named 'India and East Asia: Paradigms for a New Global Cooperation' held at Jamia Millia Islamia University, New Delhi, India on March 7th 2006)、「日本軍占領と地域交通網の変容：山西省占領地と蒙疆政権地域を対象として」(日中戦争の国際共同研究第3回国際会議『日中戦争期の中国における社会と文化』、箱根プリンスホテル、2006年11月24日)、「祖国『中国』は「兵隊太郎」をどのように迎えたのか：曹石堂著『祖国よわたしを疑うな』を読んで考えたこと」(立教大学経済学部創立百周年記念シンポジウム『中国のナショナリズム　日本のナショナリズム：曹石堂氏の回想録をめぐって』、立教大学太刀川記念館、2006年12月8日)。

内山　雅生

③「現代中国農村における水利灌漑について」(弭麗峰と共著、『宇都宮大学国際学部研究論集』第22号、1～19頁、宇都宮大学国際学部、2006年10月)、④「2006年度歴史学研究会大会報告批判、現代史部会、田原報告批判」(『歴史学研究』第822号、50～51頁、歴史学研究会、2006年12月)、⑦「山東農村の過去と現在——"三農"問題と社会変動」(『東洋学報』88巻4号、50～52頁、東洋文庫、2007年3月)。

梅原　　郁

①『宋代司法制度研究』(創文社、2006年12月、851頁＋索引14頁)、⑧「佐伯富先生追悼」(『東方学』113、216～219頁、(財)東方学会、2007年1月)。

梅村　　坦

③「新疆ウイグル自治区における遊牧民「定住化」のプロセス：アルタイ市アラハク郷のインタビューから」(『中央大学政策文化総合研究所年報』 9、108～124頁、2006年6月)、⑧「地図による「生活」と「世界」の表現」(『天空地球　ユーラシア：古地図が描く世界の姿』、50～55頁、横浜ユーラシア文化館、2006年9月)、「東洋文庫所蔵のサンクトペテルブルグ古文書マイクロフィルムについて」(『歴史と地理』601〈世界史の研究210〉、24～31頁、山川出版社、2007年2月)。

衞藤　瀋吉

⑦「中国東北地区の歴史的意義」(桜美林大学北東アジア総合研究所、2006年9月19日、全講演質疑応答「北東アジア総合研究所ＤＶＤ」2006年10月に収録)、「日中関係の現状と将来」(桜美林大学・北京大学 第7回共同シンポジウム基調報告、2006年11月18日、同シンポジウム『資料集』 1～3頁、2006年11月)、「日本人にとっての中国」(「日中戦争の国際共同研究――第3回国際会議――」、箱根、2006年11月24日、研究成果は単行本として英文にて公刊予定)、⑧「満鉄とは何だったのか」(『環』別冊12、266～269頁、藤原書店、2006年11月)。

大河原知樹

③「アラビアのロレンスの「生きざま」―「英雄」と「裏切り者」の狭間で―」(『第13回公開講座「国際文化基礎講座」「生きざまの」研究 Part2―人間的魅力とは何か―』 7～48頁、東北大学大学院国際文化研究科、2006年11月)、「歴史人口学で見たシリアの都市社会―ダマスカスの結婚性向の計量分析―」(『東洋史研究』65-4、41～71頁、東洋史研究会、2007年3月)、⑦「イスラム法廷史料再考：アーカイバル・サイエンスと〈イスラム法廷台帳学〉の可能性」(日本中東学会第22回年次大会、2006年5月14日)、"Islamic Court Records Reconsidered: Archival Science and Potentiality of Sijillology" (Table ronde internationale, Lire et écrire l'histoire ottomane: Examen critique des documents des tribunaux du Bilād al-Šām, Institut Français du Proche-Orient, Damas, Syrie、2006年6月5日)、「アラビアのロレンスの「生きざま」―「英雄」と「裏切り者」の狭間で―」(東北大学大学院国際文化研究科第13回公開講座「国際文化基礎講座」、2006年12月2日)、「オスマン帝国憲法と「アラブ」人：法の作成・法の「翻訳」の問題」超域アジア研究部門現代イスラーム研究班2006年度アラブ班第1回研究会(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、2007年2月3日)、⑧「「オリエンタリズム」と私」(『三田評論』1093、2006年

8・9月号、27頁、慶應義塾大学出版会、2006年8月)。

大澤　正昭

③「胡石壁の『人情』――『名公書判清明集』定性分析の試み」(大島立子編『宋―清代の法と地域社会』(財) 東洋文庫、1～44頁、2006年)、⑦「胡石壁的『人情』――『名公書判清明集』定性分析嘗試」("唐宋時期的法律与社会" 国際学術研討会、2006年9月24日、於上海師範大学、中文原稿『同会議論文匯編』221～241頁)、⑦「従『滋賀―仁井田論争』該学到什麼？――従台湾学人的看法談起」("清明集与宋代社会" 専題国際研究交流会、2006年12月25日、於台湾大学)。

太田　信宏

⑧「ヴィジャヤナガル王国滅亡後の政治と社会」(辛島昇編『世界歴史大系　南アジア史3―南インド―』169～179頁、山川出版社、2007年1月)、「西欧勢力の進出」(辛島昇編『世界歴史大系　南アジア史3―南インド―』179～190頁、山川出版社、2007年1月)、「カーナティック戦争とマイソール戦争」(辛島昇編『世界歴史大系　南アジア史3―南インド―』197～208頁、山川出版社、2007年1月)、「ハイダル・アリーとティプ・スルターンの改革」(辛島昇編『世界歴史大系　南アジア史3―南インド―』208～215頁、山川出版社、2007年1月)「年表(南インド先史～1947年)」(辛島昇編『世界歴史大系　南アジア史3―南インド―』26～57頁、山川出版社、2007年1月)。

太田　幸男

①『中国古代史と歴史認識』(2006年6月、名著刊行会、309頁)。

岡田　英弘

①『誰も知らなかった皇帝たちの中国』(WAC BUNKO、2006年9月、284頁)、『紫禁城の栄光　明・清全史』(〈岡田英弘・神田信夫・松村潤　共著〉、講談社学術文庫、2006年10月、349頁)、③"The Manchu Documents in the Higuchi Ichiyo Collection on Takadaya Kahee Incident and the Release of Captain V. M. Golovnin," Tumen jalafun jecen akū, Manchu Studies in Honour of Giovanni Stary, Tunguso Siberica 20, pp.187-199, Harrassowitz Verlag, 2006. "The Birth of the World History in the Mongol Empire: History Education in Modern Japan," Studies in Honour of Denis Sinor on the Occasion of His 90th Birthday, Florilegia Altaistica, pp. 69-83, Harrassowitz Verlag, 2006. (Co-authered with Junko Miyawaki-Okada).、「日本の男は要注意、十三億のハニー・トラップ」

(『WiLL』12月号、190～193頁、ワック・マガジンズ株式会社、2006年12月)、「“モンゴル民族”を創ったチンギス・ハーン」(『チンギス・ハーン』歴史群像シリーズ特別編集、42～47頁、学習研究社、2007年3月)、「大草原に生きた遊牧民の知恵と掟」(『チンギス・ハーン』歴史群像シリーズ特別編集、48～53頁、学習研究社、2007年3月)。⑤「大島正二著『漢字伝来』」(『週刊東洋経済』10/7、155頁、東洋経済新報社、2006年10月)、「ジャック・ウェザーフォード著『パックス・モンゴリカ』」(『週刊東洋経済』10/28、164頁、東洋経済新報社、2006年10月)、⑦「中国人とは何か？」(外交問題研究会、2006年3月20日、『調研クオータリー』No.20、20～39頁、読売新聞東京本社調査研究本部、2006年6月)、⑧「75字で書くエッセイ　ヤッパリ」(『ざっくばらん』33-7、10頁、並木書房、2006年7月)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった「最後の遊牧帝国」といわれるジューンガルが清の乾隆帝により滅亡させられた」(『ぺるそーな』2006年4月号、80～83頁、株式会社MD、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった　どのようにして全モンゴルの帰順という偉業が清の乾隆帝に成しとげられたのか」(『ぺるそーな』2006年5月号、70～73頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった　満洲人が書いた『異域録』にはヴォルガ河畔のトルグート族の遊牧地がこのように描かれている」(『ぺるそーな』2006年6月号、74～77頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった　浅田次郎氏著『蒼穹の昴』は西太后時代の清朝を舞台にした長編傑作小説」(『ぺるそーな』2006年7月号、78～81頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった『韃靼疾風録』の中で司馬遼太郎氏は満洲人のことを韃靼人といった」(『ぺるそーな』2006年8月号、72～75頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった　井上靖の『蒼き狼』は歴史小説であるか、単なる英雄物語、どちらか？」(『ぺるそーな』2006年9月号、72～75頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった　日本の歴史学界は、「国史」と「西洋史」と「東洋史」の三つの歴史に分れていた」(『ぺるそーな』2006年10月号、70～73頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった　中国人の言う「歴史認識」とは「政治」以外の何ものでもないのを日本人は知るべきだ」(『ぺるそーな』2006年11月号、72～75頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった　満洲を支配していた張作霖の地盤は、実はモンゴル人の領土だった」(『ぺるそーな』2006年12月号、66～69頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった　国民国家の誕生と歴史の定義」(『ぺるそーな』2007年1月号、74～77頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった　地中海文明の歴史観――アジアの誕生」(『ぺるそーな』2007年2月号、78～81頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった　中国文明の歴史観」(『ぺるそー

な』2007年３月号、74～77頁、宮脇淳子と共著)。

小川　裕充

③「五代・北宋の絵画」特輯に当たって」「五代・北宋の絵画――伝統中国の歴史的・文化的アイデンティティーの淵源」「燕文貴筆　渓山楼観図」(『国華』1329号、２頁、23～32頁、46～47頁、国華社、2006年７月)、「院中名画」――従董羽、巨然、燕肅到郭熙――」(『藝術学』23、229～308頁、国立台北藝術大学美術史研究所、2007年１月)、「五代・北宋絵画的透視遠近法――中国伝統絵画的規範」(『開創典範：北宋的藝術与文化研討会　研討会論文』43～70頁、台北国立故宮博物院、2007年２月)、⑧「追悼　川上涇先生」(『東方学』112、139～140頁、東方学会、2006年７月)、"Chairpersons' Reports: Asian Art History Session," (Transactions of the International Conference of Eastern Studies, No.51, pp.164-173、東方学会、2006年12月)。

奥村　　哲

⑦「中国の国民国家化と日中戦争・内戦――四川省の徴兵問題を中心に」(広島中国近代史研究会例会、2006年９月23日、会場：広島女学院大学、講演要旨収載書なし)、「文化大革命から見た中国社会主義体制」(メトロポリタン史学会・シンポジウム「今社会主義とは何か―歴史からのまなざし」、2006年11月25日、会場：首都大学東京、講演要旨収載書なし)。

糟谷　憲一

③「朝鮮の対清関係の諸相」(『人民の歴史学』第169号、１～11頁、東京歴史科学研究会、2006年９月)、④「일본에서의 한국근대사연구의 현황과 가제」이태진 편『21세기 한국학의 진로 모색 (서울대학교 개교 60주년 및 규장각 창립 230 주년 기념 한국학 국제학술회 보고집)』、268-283 면、서울대학교 개교 60 주년 및 규장각 창립 230 주년 기념 한국학국제학술회 조직이원회、2006년５월、日本語訳、「日本における韓国近代史研究の現況と課題」(李泰鎮編『21世紀韓国学の進路模索 (ソウル大学校開校60周年及び奎章閣創立230周年紀念韓国学国際学術会議報告集)』、268～283頁、ソウル大学校開校60周年及び奎章閣創立230周年紀念韓国学国際学術会議組織委員会、2006年５月)、「日韓歴史共同研究を素材に歴史認識に関わる交流の課題を考える」(『メトロポリタン史学』第２号、79～91頁、メトロポリタン史学会、2006年12月)、⑤「宮嶋博史・李成市・尹海東・林志弦編『植民地近代の視座　朝鮮と日本』」(『日本歴史』第695号、117～119頁、2006年４月)、「張弼基著『朝鮮後期武班閥族家門研究』」(『朝鮮史研究会会報』第163号、25～30頁、2006年７月)、⑥「ア

ンドレ=シュミット『帝国のはざまで　朝鮮近代とナショナリズム』（並木真人・月脚達彦・林雄介と共訳、名古屋大学出版会、330頁）、⑦「日韓歴史共同研究を素材に歴史認識に関わる交流の課題を考える」（メトロポリタン史学会第2回大会シンポジウム「歴史教育と歴史認識現場からの報告」、2006年4月22日）、「朝鮮の対清関係の諸相」（2006年度東京歴史科学研究会大会、2006年4月23日）、「일본에서의 한국근대사연구의 현황과 가제」（서울대학교 개교60주년 및 규장각 창립230 주년 기념 한국학 국제학술회「21세기 한국학의 진로 모색」、2006년 6 월 2 일）、日本語訳、「日本における韓国近代史研究の現況と課題」（「21世紀韓国学の進路模索」、ソウル大学校開校60周年及び奎章閣創立230周年紀念韓国学国際学術会議、2006年6月2日）。

片桐　一男

①『未刊蘭学資料の書誌的研究　Ⅱ（書誌書目シリーズ（81））』（ゆまに書房、2006年10月、316頁）、③「レザーノフ長崎来航と検問―レザーノフ来航と阿蘭陀通詞　1」（『洋学史研究』23、1～23頁、洋学史研究会、2006年4月）、「オランダ・カピタンたちへの餐応」（『和菓子』14、11～25頁、虎屋文庫、2007年3月）、④「『一角之図』にオランダ語賛を入れたのは誰か」（『洋学史研究』23、191～195頁、洋学史研究会、2006年4月）、「史料紹介　吉田コレクション　嘉永六年ロシア使節饗応関係資料」（『和菓子』14、53～60頁、虎屋文庫、2007年3月）、「第6回日蘭学会「文化講座『日蘭交流の遙かなる旅』全3回を終えて」（『日蘭学会通信』117、11～12頁）、日蘭学会、2006年4月）、⑦「ドゥーフの江戸参府と長崎屋」（洋学史研究会月例研究会、2006年4月1日）、「第二次来日シーボルト蒐集物の一例―『蘭人参府御暇之節検使心得方』採訪経過」（洋学史研究会月例研究会、2006年5月13日）、「蘭学者川本幸民」（洋学史研究会月例研究会、2006年6月3日）、⑧「「華やいで」オランダ正月、「こだわり」の賀宴は時空を超えて」（『よむカステラ』12、21～25頁、松翁軒、2006年初夏）、「火食鳥の羽根は、どこまで飛んでいったか（日蘭交流の遙かなる旅12）」（『青山学報』216、33頁、青山学院本部広報室、2006年6月）、「バドミントン、長い旅してやってきた（日蘭交流の遙かなる旅13）」（『青山学報』217、33頁、青山学院本部広報室、2006年10月）、「オランダ渡りの「ボタン」ヤーイ！（日蘭交流の遙かなる旅14）」（『青山学報』218、33頁、青山学院本部広報室、2006年12月）、「長い旅して白砂糖、よく働いて、そして変身（日蘭交流の遙かなる旅15）」（『青山学報』219、33頁、青山学院本部広報室、2007年3月）。

辛島　　昇

②『南アジア史3　南インド』（世界歴史大系、山川出版社、2007年1月、342

＋121頁)、③"Kil in the description of Land extent in Chola Inscriptions: Effort to build a centralised State by Rajaraja 1" (Aadhram, 1, pp. 45-48, Keraleeya Puratattva Samiti (Kocchi), 2006.)、"Kaniyalar old and new: Landholding policy of the Chola state in the twelfth and thirteenth centuries", (Y. Subbarayalu と共著、The Indian Economic and Social History Review, 44-1, pp.1-17, SAGE (New Delhi/London), 2007.)。

川井　伸一

②『中国経済国際化のインターフェイスと制度革新に関する国際調査』(課題番号16252006、平成16～18年度科研費補助金（基盤研究Ａ（２））研究成果報告書（研究代表者　川井伸一)、2007年３月、268頁)、③"Trend of Reforming Corporate Governance in East Asia: A Comparative View", Discussion Paper No.158, 25p. Economic Research Center, School of Economics, Nagoya University, 2006 August、「国際競争戦略の比較分析—ハイアールとレノボ」『2005年度国際シンポジウム論集　現代中国学方法論の構築をめざして（経済編)』(73～82頁、愛知大学国際中国学研究センター、2006年11月)、「共和国成立期における株式会社の試み—投資会社を事例として—」(久保亨編『1949年前後の中国』、161～186頁、汲古書院、2006年12月)、「国際競争戦略の比較分析—ハイアールとレノボ」(『中国経済の海外進出（走出去）の実態と背景—中国企業海外直接投資に関する研究とその方法—』、199～214頁、愛知大学国際中国学研究センター現代中国経済とアジア経済圏形成研究会ＣＯＥ最終報告、2007年３月)、「レノボの国際Ｍ＆Ａと経営改革」(『中国経済国際化のインターフェイスと制度革新に関する国際調査』(課題番号16252006）平成16～18年度科研費補助金(基盤研究Ａ（２））研究成果報告書（前掲)、61～79頁、2007年３月)、⑦「中国経済の台頭と東アジア経済との関係構造」(アジア経営学会全国大会統一論題報告、2006年９月、『アジア経営学会　第13回全国大会　報告論集』３～８頁、アジア経営学会第13回全国委員会実行委員会、2006年９月)、「After M&A: Fiscal Performance of Lenovo and TCL」(『国際シンポジウム　現代中国学の課題と展望【経済分科会】中国資本海外直接投資どう捉えるか～海外へ向かう中国経済の研究法の総括と展望～　予稿集』、231～250頁、愛知大学国際中国学研究センター、2006年11月)。

川崎　信定

②『西蔵仏教宗義研究—トゥカン一切宗義—』(財団法人東洋文庫、2007年３月)。

川島　　真

③「華北における「文化」政策と日本の位相」(平野健一郎編『日中戦争期の中国における社会・文化変容』、61～86頁、財団法人東洋文庫、2007年３月)。

貴志　俊彦

③「満洲国の情報宣伝政策と記念行事」(平野健一郎編『日中戦争期の中国における社会・文化変容』、13～60頁、財団法人東洋文庫、2007年３月)。

岸本　美緒

②『岩波講座「帝国」日本の学知　３　東洋学の磁場』(岩波書店、2006年５月、332＋41頁、「第７章　中国中間団体論の系譜」(253～291頁) を担当)、③「中国史における『近世』の概念」(『歴史学研究』821号、25～36頁、歴史学研究会、2006年11月)、⑧「比喩と『中国社会論』」(『ＵＰ』410号、１～６頁、東京大学出版会、2006年12月)。

楠木　賢道

③「天聰八年遠征察哈爾部與満洲国 (Manju Gurun) 的結構」(『故宮学術季刊』第23巻第４期、国立故宮博物院、2006年７月、63～74頁)、④「国立故宮博物院建院80周年紀盛第２届清代档案国際学術研討会『文献足徴』参加記」(『満族史研究』第５号、満族史研究会、2006年９月、121～126頁)。

久保　　亨

②『1949年前後の中国』(汲古書院、2006年12月、399頁)、『世界史史料〔10〕20世紀の世界Ⅰ』((歴史学研究会編、第10巻編集担当) 岩波書店、2006年12月、本文410頁＋索引15頁)、③「興亜院とその中国調査」(姫田光義編『中国の地域政権と日本の統治』慶應義塾大学出版会、273～307頁、2006年６月)、「興亜院与戦時日本的中国調査」(中国語、朱蔭貴・戴鞍鋼編『近代中国：経済与社会研究』復旦大学出版社、88～123頁、2006年６月)、「近現代の中国と世界(第20回国際歴史学会議シドニー大会特集)」(『歴史学研究』815、43～50頁、歴史学研究会、2006年６月)。"Development of Cotton Industry in Postwar Hong Kong and Taiwan" (AKITA, Shigeru, Creating Global History from Asian Perspectives, Proceedings of Global History Seminars and Workshops, 大阪大学、109～125頁、2007年３月)、⑤「高綱博文編『戦時上海―1937～1945年―』」(『歴史学研究』814、35～38頁、歴史学研究会、2006年５月)、⑦"Nation-state Building Effort by Guomindang and Financial Technocrats, 1928-1937" (Historical Society of Twenty Century China "Chinese Nation, Chinese State,

1850-2000”、2006年６月26日、シンガポール大学)、「国民政府財政与財政次長張寿鏞」(第５回中華民国史シンポジウム、2006年７月29日、中国・浙江省渓口市)、“Industrial Development in Republican China, Newly Revised Index: 1912-1948”(第14回国際経済史学会、セッション103、2006年８月23日、フィンランド・ヘルシンキ大学)、「1946年的開放外匯市場与戦後中国金融制度」(近代中国金融制度変遷シンポジウム、2006年８月31日、中国・上海・復旦大学)、「近現代の山東経済と日本―青島ビール・在華紡などを例に―」((財)東洋文庫平成18年度秋期東洋学講座、2006年11月14日、要旨:『東洋学報』88-4、2007年３月、(財)東洋文庫、48～49頁)、「経済の発展過程から見た上海」(霞山会定例午餐会、2006年11月17日、講演全文の記録『東亜』475、48～59頁、(財)霞山会)、「在日本的中国近現代史研究;其歴史、特色以及新動向」(2007年３月20日、中国・浙江省杭州市・浙江大学)

窪添　慶文

①西嶋定生訳註『晋書食貨志訳註』((財)東洋文庫、2007年３月、補注を担当)、③「文成帝期的胡族与内朝官」(張金竜主編『黎虎教授古稀紀年中国古代史論叢』世界知識出版社、2006年11月、180～200頁)、「走馬楼呉簡の庫吏関係簡について」(平成16年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書『長沙走馬楼出土呉簡に関する比較史料学的研究とそのデータベース化』2007年３月、41～52頁)、⑤「川本芳昭著『中華の崩壊と拡大―魏晋南北朝』」(『唐代史研究』９、114～117頁、唐代史研究会、2006年７月)、「張金竜著『魏晋南北朝禁衛武漢制度研究』」(『東洋学報』88-3、33～40頁、(財)東洋文庫、2006年12月)。

熊本　　裕

①“Marginalia Hvatanica”(白井聡子・庄垣内正弘編『中央アジア古文献の言語学的・文献学的研究』(Philogical Studies on Old Central Asian Manuscripts)、CSEL Series 10、2006年、pp.75～79 with a plate)。

黒田　　卓

⑦「近代イランにおける民衆運動の軌跡―タバコボイコット運動・立憲革命・ジャンギャリー運動―」((財)東洋文庫春季東洋学講座、2006年５月９日、要旨:『東洋学報』88-2、129～131頁、(財)東洋文庫、2006年９月)、「変容のなかのイスラーム主義」(第５回日本国際文化学会全国大会公開シンポジウム「二十一世紀・グローバル時代の宗教―民族・国家・非暴力」コメント、2006年７月16日、『インターカルチュラル』５、46～50頁、アカデミア出版会、2007

年４月)、⑧「不思議の国のイラン」(東北大学ホームページ・コラム、http://www.tohoku.ac.jp/japanese/webmagazine/column/col-17-kuroda.html、2006年11月24日)。

厳　善平

①『中国農業・農家の経済計算と所得分配――農家個票調査・地域統計にもとづく社会経済分析』(科研報告書・共著、研究代表者：田嶋俊雄教授、2006年８月、1～179頁)、③「我国省際人口移動的機制研究――基于人口普查数据的計量分析」(『中国人口科学』2007年第１期、中国社会科学院、71～76頁)、「20世紀中国における地域間人口移動」(『桃山学院大学経済経営論集』第48巻第３号、2006年11月、33～69頁)、⑤「書評・陳桂棣、春桃著『中国農民調査』」(『日経研センター会報』2006年７月号、90頁)、「書評・原剛編『中国は持続可能な社会か』――農業と環境問題から検証する」(『週刊・金曜日』2006年４月７日、51頁)、⑧「石田浩教授の中国農村研究」(『アジア研究』第52巻第４号、95～98頁、2006年10月)、「農民工問題の諸相――農民工は国民か」(『東亜』2007年３月号、72～83頁)、「農民工と農民工政策の変遷」(『中国21』第26号、愛知大学、2007年１月、67～88頁)、「第３章　戸籍制度の撤廃で農民の大規模な都市への移動の実現を」(日本経済研究センター編『中国の経済構造改革』日本経済新聞社、2006年10月、83～107頁)、「中国の労働不足に農民不足が主因――二重労働市場の姿」(『世界週報』2006年10月、時事通信社、18～21頁)、「社会を憎悪する農民工２世、数千万人」(『エコノミスト』2006年10月９日、毎日新聞社、117頁)、「城市労働力市場中的人員流動及其決定機制」(月刊《管理世界》2006年第８期、国務院発展研究センター、10～19頁)、「経済制度・農村」(『中国総覧2006年版』281～288頁、ぎょうせい出版、2006年６月)。

胡　潔

③「長恨歌・李夫人と桐壺巻再読―「情」へのまなざし―」(日向一雅・仁平道明編『源氏物語の始発―桐壺巻論集』竹林舎、2006年11月)、「養老令における親族呼称について―五等親条と服紀条を中心に―」(『言語文化論集』名古屋大学、2007年３月)、⑦「記紀における親族名称について」(第十回日本文学年会、2006年８月14日、中国四川大学)、「律令における親族名称について」(2006北京大学日本学研究国際シンポジウム、2006年10月22日、中国北京大学)。

黄　東蘭

③「革命、戦争と村――日中戦争期山西省黎城県の事例から」(平野健一郎編『日中戦争期の中国における社会・文化変容』財団法人東洋文庫、2007年３月)、

④「文化・歴史学」(中国研究所編『中国年鑑2006』創土社、2006年８月)。

興梠　一郎

⑧「温家宝報告が映し出す中国」(『東亜』2006年５月号)、「中国　高まる不動産バブルへの警戒感」(『東亜』2006年８月号)、「胡錦濤政権と上海の攻防」(『東亜』2006年11月号)、「北朝鮮核実験―中国はどう見ていたか」(『東亜』2007年２月号)、「正念場を迎える中国経済」(『月刊グローバル経営』2007年１月号、日本在外企業協会)。

小嶋　芳孝

⑦「ロシア沿海地方南部・初期女真文化における遼の影響」(国際シンポジウム・東北アジアにおける遼・金・蒙元期の都市、2006年７月24日～７月30日、要旨『国際シンポジウム・東北アジアにおける遼・金・蒙元期の都市資料集１』43～47頁、中央大学文学部史学科・吉林大学辺疆考古研究中心、2006年７月23日)、「畝田東遺跡群出土の花文帯金具から見る東アジア世界」(第12回高句麗研究会国際学術大会・東アジアと渤海、2006年11月３日～４日、要旨『東アジアと渤海』77～86頁、社団法人高句麗研究会、2006年11月３日)。

小浜　正子

③「中華人民共和国初期の上海における人口政策と生殖コントロールの普及」(富田武・李静和編『家族の変容とジェンダー―少子高齢化とグローバル化の中で』日本評論社、2006年12月、219～237頁)、⑦「日中戦争期の上海における難民問題と『公』領域の変容」、「日中戦争の国際共同研究」第３回国際会議『日中戦争期の中国における社会と文化』(The Third International Conference on Wartime China “Society and Culture in China during the Sino-Japanese War”、2006年11月25日、於：箱根)、「政策与个人―囲磽中華人民共和国成立初期的上海生育」(第二届世界中国学論壇暨　上海社会科学院歴史研究所建所五十周年紀念 “中国城市発展的歴史比較” 国際学術討論会、2006年９月22日、於：上海)、「中国における人口政策の変動と生殖コントロールの浸透―上海を中心に」(比較家族史学会第48回研究大会シンポジウム〈グローバル化の中の家族とその変容―アジアにおける家族とジェンダー〉(お茶の水女子大学21世紀ＣＯＥプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」共催)、2006年５月20日、於：お茶の水女子大学・東京)。

小松　久男

②S. A. Dudoignon, H. Komatsu, and Y. Kosugi eds., Intellectuals in the Modern

Islamic World: Transmission, transformation, communication, ? (London-New York: Routledge、2006年、xvii+375頁) ? 、③"Muslim Intellectuals and Japan: a Pan-Islamist mediator, Abdurreshid Ibrahim," S. A. Dudoignon, H. Komatsu, and Y. Kosugi eds., Intellectuals in the Modern Islamic World: Transmission, transformation, communication, (London-New York: Routledge、2006年、273～288頁)、"Khoqand and Istanbul: an Ottoman Document Relating to the Earliest Contacts between the Khan and Sultan," Asiatische Studies/Ştudes Asiatiques, LX-4, 2006, pp.963-986.、"Bukhara and Kazan," Journal of Turkic Civilization Studies, No.2 (2006), pp.101-115.、"Dar al-Islam under Russian Rule As Understood by Turkestani Muslim Intellectuals," UYAMA Tomohiko ed. Empire, Islam, and Politics in Central Eurasia, Slavic Research Center, 2007, pp.3-21.、⑦「帝政治下のダール・アル＝イスラーム：トルキスタン・ムスリム知識人の理解」(西南アジア研究会、2006年12月16日、京都大学)。

桜井由躬雄

①『歴史地域学の試み　バックコック』(東京大学大学院人文社会系研究科南東南アジア歴史社会研究室、2006年10月、607頁)、③「ベトナム初級合作社の形成―紅河デルター小村バックコックのオーラルヒストリー1959―1962―」(『史学雑誌』、第115編第12号、1～38頁、史学会、2006年12月)。

佐藤　次高

②Editorial advisor for the special issue of Mamluk Studies Review (vol.10-1, 2006) devoted to the articles written by the Japanese scholars.、③"Slave Traders and Karimi Merchants during the Mamluk Period: A Comparative Study", Mamluk Studies Review, 10-1 (2006), PP. 141-156.、"The Sufi Legend of Sultan Ibrahim b. Adham," Orient, vol. 42 (2007), pp. 41-54.、④"Mamluk Studies in Japan: Retrospect and Prospect," Mamluk Studies Review, 10-1 (2006), pp. 1-27.、"The Islamic Area Studies Project in Japan, 1997-2002: Its Achievements and Future Prospects," Asian Research Trends, New Series, No. 1 (2006), pp. 33-44.、「1945以来日本的伊斯蘭与中東研究」(孫振玉訳『内蒙古師範大学学報』35-5、2006年、115～118頁)、「イスラーム地域研究の新展開」(『世界史の研究』210、2007年２月、52～56頁)、⑦"New Islamic Area Studies in Japan since 2006," in New Trends in Middle Eastern and Islamic Studies from East Asia at the Second World Congress of Middle Eastern Studies, Amman, 14 June, 2006.、Keynote Speach "NIHU Program Islamic Area Studies in Japan," The 7th Edition of the Tunisia-Japan Symposium on

Society, Science and Technology, University of Sousse, 4-6 December 2006.、「イスラーム社会の外来者：マムルーク」（日本歴史学協会総会・記念講演、2006年７月15日、早稲田大学文学部）、「イスラムの場合—バグダードとカイロ—」（早稲田大学史学会シンポジウム「文明の比較史—都市と王権をめぐって—」、2006年10月14日、文学部34号館、453教室）、「開会挨拶」（NUHU プログラム　イスラーム地域研究、記念講演会「イスラーム地域研究の新展開」、2006年11月26日、早稲田大学小野記念講堂）、「イスラームの最近の研究動向—高校生にどう伝達するか」（栃高教地理歴史・公民部会講演会2007年２月22日、栃木県総合教育センター）、⑧「イスラーム研究の新潮流」（『世界史パンフレット』（著者あいさつ）山川出版社、２頁、2006年４月）、「NIHU プログラム『イスラーム地域研究』の発足」（『日本中東学会ニューズレター』108、13～15頁、2006年10月19日）、「NIHU プログラム　イスラーム地域研究」（NIHU Program Islamic Area Studies リーフレット案内文、２頁、2006年11月）。

佐藤　宏

①Unemployment, Inequality and Poverty in Urban China,〈co-edited with Li Shi〉(London: Routledge, 2006, 352pp)、②「中国農村税賦的再分配効応 1995-2002：世紀之交農村税費改革的評価」〈李実・岳希明と共著〉（『経済学報』第２巻第１輯、153～173頁、清華大学経済学院、2006年６月）、③"Class origin, Family culture, and intergenerational correlation of education in rural China," IZA Discussion Paper Series, No. 2642, pp. 1-41,〈joint with Li Shi〉、Forschungsinstitut zur Zukunft der Arbeit (Institute for the Study of Labor)。

塩沢　裕仁

③「洛陽地区における魏晋南北朝隋唐期の遺跡と文物をめぐる状況」『唐代史研究』第９号、唐代史研究会、３頁～37頁、2006年７月）、⑦「中国十三王朝の都洛陽、その遺跡と自然環境」（文京区男女平等会館、歴史学会月例会、2006年７月）、「澗河（谷水）・瀍河水文と漢魏洛陽城・隋唐洛陽城」（龍谷大学、法政大学学術フロンティア「都市における水辺空間再生に関する研究」ＰＪエコプロジェクト３、2006年８月）、「日本天台仏教における中国赤山神信仰」（中国洛陽新友誼賓館、東アジア日本学研究国際シンポジウム、2006年10月）、「漢魏・隋唐時期における洛陽盆地の空間利用」（京都大学、2007年２月）、「洛陽八関とその内包空間」（中央大学、2007年２月）、⑧「洛陽の主な都城・聚落遺跡と博物館」『陝豫訪古紀行—中国陝西省・河南省地域考察旅行報告』東洋文庫中国古代地域史研究班、35頁～43頁、2007年２月）。

斯波　義信

②「The managerial aspects of Chinese trading junk from the Song through the Qing」（方行主編『中国社会経済史論叢：呉承明教授九十華誕記念文集』北京 中国社会科学出版社、2006年12月、820～830頁）、「「商税」・「互市舶法」訳註」（中嶋敏編『宋史食貨志訳註（六）』、東洋文庫論叢65、東洋文庫、2006年３月）、「長江流域史の可能性」（青木敦等編『宋代の長江流域：宋代社会経済史の視点から』宋代史研究会研究報告第８集、汲古書院、2006年10月、15～64頁）、③「綱首・綱司・公司：ジャンク商船の経営をめぐって」（森川哲雄・佐伯弘次編『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』、九州大学21世紀COE プログラム（人文科学）東アジアと日本：交流と変容、2006年２月）、「オランダ統治期のバタヴィア華僑とカピタン庁文書：1772-1978」（『華僑華人研究』第３号、2006年11月、５～17頁）、⑦「20世紀の日本における中国学の展開」（関西大学創立120周年記念学術討論会、関西大学アジア文化交流センター、2006年10月27日）、「東アジアの“京都”：権力とプライヴァタイゼーションのあいだ」（東アジア建築文化国際会議「都市史・建築史から東アジアを読みなおす」2006年12月９日）。

嶋尾　　稔

③「『寿梅家礼』に関する基礎的考察（二）」（『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』38、123～143頁、2007年３月）、④「ベトナムの変貌」（『最近の世界の動き』16、１～７頁、山川出版社、2006年４月）。

新免　　康

③「ブズルグ・ハーン・トラとカッタ・ケナガス村の墓廟」（河原弥生との共著、澤田稔編『シルクロード学研究（シルクロード学研究センター紀要）第28号：中央アジアのイスラーム聖地――フェルガナ盆地とカシュガル地方――』、79～100頁、財団法人奈良シルクロード博記念国際交流財団・シルクロード学研究センター、2007年３月）、「研究序説――ウイグル人地域社会と民族意識――」（新免康編『中央アジアにおけるウイグル人地域社会の変容と民族アイデンティティに関する調査研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金・基盤研究Ａ（１）研究成果報告書、31～40頁、2007年３月）、「フェルガナ地域のウイグル人――移住の背景と地域性――」（新免康編『中央アジアにおけるウイグル人地域社会の変容と民族アイデンティティに関する調査研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金・基盤研究Ａ（１）研究成果報告書、147～172頁、2007年３月）、④「国際研究ワークショップ『新疆・中央アジアにおけるウイグル人の社会・文化と民族アイデンティティ』（International Work-

shop《Uyghur Society, Culture and Ethnic Identity in Xinjiang and Central Asia》)」(『日本中央アジア学会報』第3号、52～58頁、日本中央アジア学会、2007年3月)、⑦"A Historical Source of the Afaqi Khwajas under Qing rule: On Scroll Prov. 219 of the Gunnar Jarring Collection, Lund University Library, Sweden", Central Eurasian Studies Society 2006 Annual Conference (中央ユーラシア学会・2006年度年次大会)、"Historical Roles of Islamic Saints in Central Asia", Sept. 29, 2006, University of Michigan (Ann Arbor): Michigan League. "Uyghur Cultural Movements in 1980s and 1990s in Xinjiang", International Workshop《Uyghur Society, Culture and Ethnic Identity in Xinjiang and Central Asia》, November 26, 2006, Tokyo.。

末成　道男

③「ベトナム中部における祖先祭祀—フエ郊外清福村の家庭祭壇の事例より—」(『東洋大学学術フロンティア報告書　2006年度』、2007年3月20日、69～100頁)、⑦「Ai được thờ cúng trên bàn thờ tổ tiên?—Trường hợp của một làng ở ngoại thành Huế và so sánh tương ứng với Nhật Bản, Hàn Quốc và người Hàn ở Đài Loan—(祖先祭壇でだれが祀られているか？—フエ市郊外村の事例および日本、韓国、台湾漢族の比較—」(フエ史学会主催　フエ省人民委員会ホール　フエ700年記念シンポジウム)

鈴木　　均

③「イラン——2005年選挙と政治潮流の転換」(『アメリカ・ブッシュ政権と揺れる中東』アジア経済研究所、2006年5月、135-152頁)、The Nature of the State in Afghanistan and Its Relations with Neighboring Countries (IDE-JETRO, Discussion Paper No.72, August 2006)、「ハータミー政権末期の全国選挙とイランにおける民主化の挫折——歴史的転換点としての第7回イラン国会選挙(2004年2月)」(『現代の中東』第42号、2007年1月、2-17頁)、「イランにおける地方議会制度と地方自治の発展——ハータミー期における展開とその前提条件についての予備的考察」(福田安志編『湾岸、アラビア諸国における社会変容と国家・政治——イラン、GCC諸国、イエメン』2007年3月16日、63-100頁)、⑤「アフガン見つめた先人——1930年代に農業指導　故尾崎三雄氏(山口市出身)」(『中国新聞』2006年11月6日付)、「前田耕作監修・関根正男編『日本・アフガニスタン関係全史』」(『週刊読書人』2006年12月15日付)、⑦「尾崎三雄のアフガニスタンにおける足跡」(アジア経済研究所図書館資料・写真展「若きアフガニスタンの記録」講演会、2006年7月18日)、「アフマディネジャード政権とイラン政治の流れ」(アジア経済研究所専門講座「アメリカ・

ブッシュ政権と揺れる中東」、2006年９月29日)、「尾崎三雄の見たアフガニスタン」(日本中東学会第11回公開講演会、2006年11月18日)、⑧「イランはなぜ核開発にこだわるのか」(『外交フォーラム』2006年７月、50-53頁)、「統合・復興か分裂・混迷か――正念場を迎えるアフガニスタン」『時事トップ・コンフィデンシャル』2007年２月６日号、5-9頁)、「イランのダブル・イメージ」(『外交フォーラム』2006年10月、７頁)。

鈴木　博之

③「明清時代、徽州の里社について」(2006年５月東北中国学会、要旨『集刊東洋学』96、110頁、2006年10月、『山根幸夫教授追悼記念論叢　明代中国の歴史的位相』(汲古書院　2007年　掲載予定))。

砂山　幸雄

⑥汪暉著『思想空間としての現代中国』(共訳、岩波書店、2006年８月、326頁)、⑧「格差社会中国を知る７冊」(『オルタ』2007年３月号、アジア太平洋資料センター、34頁)。

妹尾　達彦

①『長安の都市計画』(韓国語、崔宰栄訳、ソウル・ゴールデンバフ社、2006年12月、284頁)、③「宋代史研究の最前線に接して」(平田茂樹・遠藤隆俊・岡元司編『宋代社会の空間とコミュニケーション』汲古書院、2006年６月、351～366頁)、「都の立地―中国の事例―」(『中央大学人文科学研究所紀要』58、2006年９月、143～171頁)、「韓愈与長安―９世紀的転型―」(杜文玉主編『唐史研究論集』第９輯、西安・三秦出版社、2007年１月、１～28頁)、「天と地―前近代の中国における都市と王権―」(大阪市立大学大学院文学研究科 COE・大阪市立大学重点研究共催シンポジウム報告書『中国の王権と都市―比較史の観点から―』大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、2007年３月、５～43頁)、「世界史の時期区分と唐宋変革論」(『中央大学文学部紀要　史学』52、2007年３月、19～68頁)、⑦「9世紀の転換―東アジア史の新展開―」(古代東アジアにおけるアイデンティティの形成と展開、九州大学21世紀 COE プログラム、2006年７月16日、要旨『古代東アジアにおけるアイデンティティの形成と展開』27～28頁)、「隋大興城・唐長安城の都市プランをめぐる諸問題」(奈良女子大学21世紀 COE プログラム研究会、奈良女子大学、2006年８月６日)、「唐長安城の外郭城と墓葬地」(東アジア比較都城史研究会，山口大学人文学部、2006年８月18日)。「韓愈与長安―九世紀的転型―」(唐宋社会変遷討論会、2006年９月４日、台北・台湾中央研究院歴史語言研究所、要旨『唐宋社

会変遷討論会　会議資料』、181～200頁)、「都市と王権—中国の場合—」(早稲田大学史学会2006年度シンポジウム、2006年10月14日、要旨『史観』第156冊、2007年３月、32～33頁)、「北京の小さな橋—街角のグローバル・ヒストリー」(共同研究「ストリートの人類学」研究会、吹田・国立民族学博物館、2006年10月28日)、「隋唐洛陽史研究の現段階—文献史学から見た—」(奈良・橿原考古学研究所、2006年11月28日)、「唐長安城的城市結構」(隋唐長安歴史地理問題学術討論会、2007年３月17日、西安・陝西師範大学、要旨『隋唐長安歴史地理問題学術討論会資料』９～18頁)、⑧「史念海教授追思」(陝西師範大学西北歴史環境与経済社会発展研究中心・中国歴史地理研究所編『史念海教授紀念文集』歴史環境与経済社会発展研究叢書1、西安・三秦出版社、2006年６月、26～28頁)、「音楽の都・長安」(『シルクロード学研究叢書』10、奈良シルクロード学研究センター、2007年３月、42～56頁)。

関尾　史郎

③「莫高窟北区出土《大涼安楽三年（619）二月郭方随葬衣物疏》的両三個問題」(季羨林・饒宗頤［主編］『敦煌吐魯番研究』第９巻、111～122頁、北京：中華書局、2006年５月)、「長沙呉簡中の名籍について——史料群としての長沙呉簡・試論（２）——」(『唐代史研究』第９号、73～87頁、唐代史研究会、2006年７月)、「従吐魯番帯出的“五胡”時期戸籍残巻両件——柏林収蔵的“Ch 6001v”与聖彼得堡収蔵的“Дx 08519v”」(新疆吐魯番地区文物局［編］『吐魯番学研究—第二届吐魯番学国際学術研討会論文集』180～190頁、上海辞書出版社、2006年10月)、「長沙呉簡中の名籍について・補論——内訳簡の問題を中心として——」(『人文科学研究』第119輯、横１～29頁、新潟大学人文学部、2006年11月)、「トゥルファン出土「菩薩懺悔文承陽三年題記」について」(『西北出土文献研究』第４号、65～71頁、西北出土文献研究会、2007年２月)、「民楽出土、魏晋壁画墓をめぐる諸問題」(『西北出土文献研究』第５号、133～140頁、西北出土文献研究会、2007年３月)、「敦煌の古墓群と出土鎮墓文」(上)(『資料学研究』第４号、横15～31頁、新潟大学大学院現代社会文化研究科「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」プロジェクト、2007年３月)、「トゥルファン出土文書よりみた麹氏高昌国（501～640年）の行政システムと上奏文書」(『資料学の方法を探る』第６集、39～46頁、愛媛大学「資料学」研究会、2007年３月)、⑦「カラホージャ96号墓について」(西北出土文献を読む会例会、2006年７月１日)、「西域出土文献中の掲示用文書」(新潟大学超域研究機構大域プロジェクト・愛媛大学資料学研究会合同研究会、2006年７月15日)、「「五胡」時代、高昌郡文書の基礎的考察」(科学研究費補助金・基盤研究（C）「敦煌・トルファン漢文文献の特性に関する研究」［特性科研］合同合宿会議、

2006年９月29日)、「トゥルファン出土文書よりみた麴氏高昌国の行政システムと上奏文書」(愛媛大学資料学研究会・新潟大学超域研究機構大域プロジェクト主催公開シンポジウム「古代東アジアの社会と情報伝達」、2006年10月15日)、「書道博物館所蔵の「五胡」～高昌国時代のトゥルファン文書について」(西北出土文献を読む会例会、2006年11月18日)、「甘粛出土魏晋画像磚をめぐる諸問題」(内陸アジア出土古文献研究会例会、2006年12月２日)、「もう一つの敦煌――画像磚から見た敦煌の地域的特質――」(新潟大学東アジア学会例会、2006年12月12日)、「「五胡」・北魏前期の墓表」(科学研究費補助金・基盤研究（Ｂ）「出土史料による魏晋南北朝史像の再構築」[出土科研] 研究会、2006年12月23日、⑧「長沙呉簡研究会～魏晋時代簡牘研究の行方～」(『東方』第306号、14～15頁、東方書店、2006年８月)。

関本　照夫

③「プリント更紗とジャワの更紗製造業」(『更紗今昔物語―ジャワから世界へ』国立民族学博物館（編)、73頁、国立民族学博物館、2006年９月)。

曽田　三郎

③「清末民初的政治改革和日本早稲田大学」(『蘇州科技学院学報』23巻１号、109～113頁、2006年２月)、「中華民国憲法の起草と外国人顧問――有賀長雄を中心に――」『近きに在りて』49号、３～16頁、2006年５月)、「清末の立憲改革と大隈重信の『封建』論――他国の政治改革をめぐる自国史認識――」(『「封建」・「郡県」再考――東アジア社会体制論の深層』372～402頁、思文閣出版、2006年７月)、⑤「礪波護・岸本美緒・杉山正明編『中国歴史研究入門』」(『社会経済史学』72巻３号、98～100頁、2006年９月)、⑦「山東懸案解決交渉と日本の新聞報道」((財) 東洋文庫秋期東洋学講座、2006年11月７日)。

瀧下　彩子

③「抗日漫画宣伝活動と『国家総動員画報』の作家達―醸成される抗日イメージ―」(平野健一郎編『日中戦争期の中国における社会・文化変容』、233～262頁、財団法人東洋文庫、2007年３月)。

武田　幸男

③「高麗の雑所・雑尺に関する考察」(『朝鮮学報』199・200、111～150頁、朝鮮学会、2006年７月)、⑦「私の朝鮮史研究の内と外」(学習院大学東洋文化研究所第64回東洋文化講座、2006年10月)。

田島　俊雄

②『中国農業・農村の経済計算と所得分配—農家個票調査・地域統計にもとづく社会経済分析—』（平成15～17年度科学研究費補助金・基盤研究（A）研究報告、課題番号15252007、研究代表者・田嶋俊雄（東京大学社会科学研究所）、2006年８月、179頁）、③「農業農村調査の系譜—北京大学農村経済研究所と「齊民要術」研究」（末廣昭『「帝国」日本の学知』第６巻、岩波書店、2006年４月、67-104頁）、「20世紀的中国化学工業—永利化工、天原電化及其時代」（朱蔭貴、戴鞍鋼主編『近代中国：経済与社会研究』復旦大学出版社、2006年６月、338-372頁）、⑦「累退性農民和農村負担問題」（中国社会科学院欠発達経済研究中心『第二届県域経済研討会』北京、2006.12.9での報告。http://www.zgqfdjj.com/index.php3?file=detail.php3&nowdir=&id=929424&detail=1）、「「社会主義新農村建設」と中国の農業・農村問題」（『中国研究月報』第61巻第１号、2-13頁、（社）中国研究所、2007年１月）、⑧「政治の季節」（『中国研究月報』第61巻第３号、42-43頁、（社）中国研究所、2007年３月）。

立川　武蔵

①『マンダラという世界—ブッディスト・セオロジーⅡ』（講談社、2006年４月、212頁）、A Ngor Mandala Collection（〈Lokesh Chandra S. Watanabe〉, Vajra Publications and Mandala Institute, 2006年, 134頁）、Vedic Domestic Fire Ritual（〈M. Kolhatkar〉, New Bharatiya Book Corporation, Delhi, 2006年, 166頁）、②『マンダラ—心と身体—』（〈山口しのぶ、森雅秀、正木晃〉、千里文化財団、2006年７月、129頁）。

C. A. ダニエルス

④「伝統的資源管理」（秋道智彌編『図録メコンの世界』弘文堂、東京、2007年３月31日、134～135頁）、⑦「伝統中国における「乾杯」の一側面について」（乾杯の文化研究会、2006年９月15日、16：00～18：00、於日本酒造中央会館８階会議室）、「タイ文化圏における戦争：戦略のためか、領土拡張のためか」（東京外国語大学ＡＡ研政治文化ユニット研究会、2007年３月19日、ＡＡ研301号室セミナー室）⑧「雲南南部の生態環境史の構築に向けて」（『総合地球環境学研究所研究プロジェクト４—２　2005年報告書アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究：1945—2005』、2006年９月30日、497～501頁）。

田村　晃一

②『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』（東洋文庫、2007年３月）。

竺沙　雅章

⑦「莫高窟北区石窟出土的版刻漢文大蔵経本」(転換期的敦煌学—継承与発展国際学術研討会、2006年９月10日、南京師範大学)、⑧「本会元理事長佐伯富先生を偲ぶ」(『史林』89-5、135～136頁、史学研究会、2006年９月)。

鶴見　尚弘

③「危機意識に起つ公短協と公立短期大学の将来—『21世紀の大学像』から『高等教育の将来像』へ—」(『公短協』第52号、１～３頁、全国公立短期大学協会、2006年５月15日)、④「歴史学会大会参加記Ⅰ」(『史潮』新60号、82～85号、弘文堂、2006年11月)、⑤「知識基盤社会・地方分権時代と公立大学」(全国公立短期大学協会平成18年度学長会、2006年10月13日)、「明清魚鱗冊の観点から」(『国際ワークショップ「近代東アジア土地調査事業研究」』2006年12-2～3、大阪大学文学研究科、ニュースレター第2号掲載予定)、「公立大学をめぐる状況と四大への改組統合」(島根県立将来問題研究会、2006年12月４日)。

寺田　浩明

③「試探傳統中國法之總體像」(嚴雅美訳・黄源盛校)(中國法制史学会・中央研究院歴史語言研究所主編『法制史研究』９、223～241頁、中國法制史学會會刊、2006年６月)。「「非ルール的な法」というコンセプト——清代中国法を素材にして」(『法学論叢』160-3・4、51～91頁、京都大学法学会、2007年３月)。

戸倉　英美

③「漢鐃歌『戦城南』考—併論漢鐃歌與魏鼓吹曲的関係」(『中日学者六朝文学研討会論文集』235～245頁、北京大学中文系・日本六朝学会、2006年12月)、⑦「元代詩法叢書在日本—以介紹大山潔的研究成果為主」(郝経暨金元文化学術研討会、中国山西省陵川県、2006年８月14日)、「概観在日本研究章太炎的情況、併簡単回顧日本国学的歴史」(紀念章太炎先生逝世七十周年国学国際研討会、報告、中国山西大学、2006年８月16日)、「長安美女騎箒翔—従唐代小説看西方文化的流播」("西安：歴史記憶與城市文化" 国際研討会 International Symposium on "Xi'an: Historical Memory and Urban Culture"、報告、中国陝西師範大学、2006年11月２日、学会提要集に要旨掲載、63頁)、「従日本雅楽、伎楽来看古代亜細亜的文化交流—獅子舞的来源」(中国上海復旦大学中文系、講演、2006年11月７日、復旦大学中文系講演録に全文掲載予定)、「漢鐃歌『戦城南』考—併論漢鐃歌與魏鼓吹曲的関係」(中日学者六朝文学研討会、報告、中国北京大学、2006年12月、学会論文集(③)に全文掲載)。

富澤　芳亜

③「1930年代における河南、河北、山西紡織工場の再編と中国銀行」(『近きに在りて』第49号、43～55頁、汲古書院、2006年５月)、⑤「《書評》庄維民・劉大可『日本工商資本与近代山東』」(吉田建一郎、久保亨、金丸裕一との共著、『近代中国研究彙報』第28号、？国立国会図書館分館？東洋文庫、2007年３月)、⑥陸興龍「上海社会科学院経済研究所『中国企業史資料研究センター』所蔵の企業史資料の紹介」(『社会システム研究』第14号、135～145頁、立命館大学社会システム研究所、2007年３月)。

鳥海　　靖

①『現代の日本史（改訂版）―高校日本史Ａ教科書』(三谷博・渡辺昭夫と共著、山川出版社、2007年３月、196頁)、⑦「日米関係の100年」(東急セミナーＢＥ渋谷、2006年４月～07年３月、連続20回、東京急行電鉄)、「日本近現代史と国際的な歴史相互理解」(市川房枝政治参画センター、2006年10月21日、(財)市川房枝記念会、東京)、「日本の立憲政治形成と国際社会―幕末における加藤弘之の対外認識と立憲政治論」(中央大学大学院文学研究科総合講座、2006年11月22日、中央大学)、「現代日本における歴史辞典編集の体験から」(ソウル大学歴史研究所、2006年12月８日、ソウル大学、ソウル)、「近代日本形成期における洋学者の活動とその役割」(日韓歴史教育交流事業シンポジウム、2007年２月28日、(社) 国際フレンドシップ協会、東京)、「国際的な歴史相互理解の動向と提案」(日中歴史教育交流事業シンポジウム、2007年３月６日、(社) 国際フレンドシップ協会、東京)、⑧「国際的な歴史相互理解の試み」(『歴史教育交流事業専門家意見交換記録―日本・韓国』14～16頁、(社) 国際フレンドシップ協会、2006年４月、2006年２月28日の報告要旨)、「中国に『日本の歴史教科書は間違っている』といわれたら」(中島嶺雄編『歴史の嘘を見破る―日中近現代史の争点35』283～292頁、(株) 文藝春秋・文春新書、2006年５月)、「平成16年度研究助成選考委員長講評・歴史学」(『平成17年度歴史学・地理学研究助成報告書』７頁、2006年12月、(財) 福武学術文化振興財団、東京)。

中兼和津次

③「『三農問題』を考える」(『中国21』第26号、27-46頁、愛知大学、2007年１月)、「比較経済体制論の到達点と課題―国有企業の民営化を中心に」(『比較経済研究』44-1、41-48頁、比較経済体制学会、2007年１月)。

長沢　栄治

②A Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt. Tokyo: the Toyo Bunko, 2007.（共編）、③"Inventing the Geography of Egyptian Nationalism (Wataniya): A Review of Gamal Hamdan's The Personality of Egypt and His Personal History," Mediterranean World XVIII, 2006, pp.271-318、⑦「現代アラブ世界とイスラーム—イラク戦争から3年の現在から考える」（(財) 東洋文庫春季東洋学講座、2006年5月16日、要旨：『東洋学報』88-2、131～133頁、(財) 東洋文庫、2006年9月）、"Urban Unrest and Social Movements under the 'Soft State' After the Introduction of Open-Door Policy in Egypt"（千葉大学21世紀 COE プログラム国際会議「アジア・中東における「伝統」・環境・公共性」Chiba University 21st Century COE Program International Conference, 'Tradition', Environment and Publicness in Asia and the Middle East、2006年12月16日）。

永積　洋子

⑧「ハーグの国立文書館に保存される齋藤阿具の書簡」（『財団法人日蘭学会通信』平成18年度、通巻118号、6～7頁）。

中見　立夫

③「日本的"東洋学"の形成と構図」（『岩波講座「帝国」日本の学知3　東洋学の磁場』、13～54頁、岩波書店、2006年5月）、"The Mongol Summer in 1911: The Qing-Manchu Amban, the Russian Consul, and the Mongol Secret Mission", Монгол судалын өгүүллийн түүвэл, pp.48-54, Ulaanbaatar: International Association for Mongol Studies, 2006.、「日本人所認識的「滿洲」」（『清史論集』下巻、867～874頁、北京、人民出版社、2006年9月）、「内蒙古阿倫斯木遺跡与其出土文物的研究」（『蒙元史暨民族史論集—紀念翁独健先生誕辰一百周年』、436～448頁、北京、社会科学出版社、2006年12月）、"Qing China's Northeast Crescent: The Great Game Revised", The Russo-Japanese War in Global Perspective: World War Zero II, pp.513-529, Leiden & Boston: Brill, 2007.、"Орчин үеийн Японы" Дорно дахины түүх судлал" үүсэж хөгжсөн нь (Монгол судалын эхлэл)", Mongolica, an International Annual of Mongol Studies 18 (39), pp. 180-190, Ulaanbaatar: International Association for Mongol Studies, 2006.、「最近のG・E・モリソン関係文献」（『東洋文庫書報』38、19～43頁、2007年3月）、「"内モンゴル東部"という空間—東アジア国際関係史の視点から—」（『アジア地域文化学叢書VIII：近現代内モンゴル東部の変容』、21～46頁、雄山閣、2007年3月）、④「清史満学研究割

記」(『満族史研究』5、137～147頁、満族史研究会、2006年9月)、「東アジアの社会変容と国際環境／モンゴル研究セミナー第1回(2006年7月12日)～第4回(2006年7月31日)、国際ワークショップ：アムール川流域からみた露清関係(2006年9月8日)」(『通信』118、64～65頁、アジア・アフリカ言語文化研究所、2006年11月)、「普林斯頓研究劄記—プリンストン大学東アジア図書館所蔵「川嶋浪速書翰」など—」(『ニューズレター』18、60～67頁、近現代東北アジア地域史研究会、2006年12月)、⑤「松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』(『社会経済史学』72—5、113～115頁、社会経済史学会、2007年1月)、⑦「近代時期的日本歴史学者是如何描述蒙元史和成吉思汗的」(成吉思汗与蒙古汗国建立国際研討会、2006年6月4日、北京：中国社会科学院、要旨：『成吉思汗与蒙古汗国建立国際研討会会議手冊』、32～33頁、北京、中国社会科学院蒙古学研究中心、2006年6月)、"Орчин үеийн Японы "Дорно дахины тҮҮх судлал" ҮҮсэж хөгжсөн нь Монгол судлалын эхлэл" (The 9th International Congress of Mongolists, 2006年8月8日, Ulaanbaatar: Mongolian National University、要旨：Summaries of Congress Papers, p.112, International Association for Mongol Studies, 2006)、「"内モンゴル東部"という空間—東アジア国際関係史の立場から—」(早稲田大学モンゴル研究所主催21世紀COE関連シンポジウム：近現代における内モンゴル東部地域の変容Ⅳ、2006年12月16日、早稲田大学文学部、要旨：『早稲田大学モンゴル研究所紀要』4、134～135頁、2007年3月)、"The Mongols 'Search for' Independence' in 1911, a Multi-Archival Approach" (East Asian Studies Seminar, Institute for Advanced Studies, 2007年2月27日, Princeton: Institute for Advanced Studies.)、"How to narrate Mongol history: Mongol, Qing and Japanese scholars' historiographies on the Mongols in the 19th-early 20th centuries" (Workshop: "The sense of the Past among Inner Asian People", 2007年3月30日, Institute for Advanced Studies.)、⑧「〔巻頭言〕"Archives"は歴史を拓く」(『東アジア研究』45、1～2頁、大阪経済法科大学アジア研究所、2006年3月)、"PREFACE", Vladimir Uspensky, "Explanation of the Knowable" by 'Phags-pa bla-ma, Blo-gros rgyal-mtshan (1235-1280): Facsimile of the Mongolian Translation with Transliteration and Notes, p. vii, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 2006.、「外国人には理解しがたい日本史のことば—「大陸浪人」とその周辺—」(『日本歴史』704、126～131頁、日本歴史学会、2007年1月)。

西尾　寛治

⑦"The Development of Jawi Concept: Jawi as Categories of People" (Inter-

national Workshop "Re-examining the Jawi Tradition in Southeast Asia" organized by the Joint Study Group "Social Order and Relations in Muslim Populated Southeast Asia", Center for Integrated Area Studies, Kyoto University, at the 3rd Floor, Conference Room CIAS, Kyoto University, 2006年 9 月23日)。

延廣　眞治

③「横浜小僧殺し」(『仏教 文学 芸能』151～167頁、関山和夫博士喜寿記念論文集刊行会、2006年11月)、「落語」(『江戸への新視点』151～167頁、新書館、2006年12月)。

濱田　正美

①『東トルキスタン・チャガタイ語聖者伝の研究』(京都大学大学院文学研究科、2006年 3 月、iii+169+302頁)、③「テュルク人とイスラーム—王権の観念をめぐって」(紀平英作編『グローバル時代の人文学　上　連鎖する地域と文化』53～82頁、京都大学学術出版会、2007年 3 月)、「『帰真総義』—中央アジアにおけるその源流」(京都大学人文科学研究所編『中国宗教文献研究』臨川書店、447～458頁、2007年 1 月)、④「コメント 2　歴史学における「境界」」(『史林』90-1、217～222頁、歴史学研究会、2007年 1 月)。

林　　俊雄

①『グリフィンの飛翔』(雄山閣、2006年 7 月、282頁)、③"Sogdian Influences Seen on Turkic Stone Statues: Focusing on the Fingers Representations," Matteo Compareti et al., ed., Eran ud Aneran: Studies Presented to Boris Il'ič Maršak on the Occasion of His 70th Birthday. Venezia, Librairie Editrice Cafoscarina, pp. 245-259, 2006.)、④「遊牧社会論」(『歴史と地理』596、30～33頁、2006年 8 月)。

原　　實

③"A Note on the Kiṁpāka-fruit", (Encyclopedia of Indian Wisdom: Prof. Satya Vrat Shastri Felicitation Volume, volume II (Delhi 2005), pp. 381-387)、"Weapons of Virtue", (Expanding and Merging Horizons—Contributions to South Asian and Cross-Cultural Studies in Commemoration of Wilhelm Halb-fass—, ed. by Karin Preisendanz (Wien 2007), pp. 613-627)、"Hindu Concept of Shame—Sanskrit Lajiā, Vrīḍā, Hrī—", (INDOLOGICA TAURINENSIA, vol. XXXII (Torino 2006), pp.141-195)。⑦"Hindu Concept of Sleep—nidrā and svapna—",

(The 13th World Sanskrit Conference, held in Edinburgh, 2006.9.)、"The Holding of the Hair (Keśa-Grahaṇa)", (Brahmi Club 一周年記念シンポジウム「仏教美術史・考古学と仏教文献学の出会い」、於：創価大学国際仏教学高等研究所、2007年2月23日)。

平野健一郎

①"Professor Benjamin Schwartz's Influence on the Studies of Yan Fu in Japan", Waseda COE-CAS Working Paper, No.45, March 2007.、②『日中戦争期における中国の社会・文化変容に関する総合的研究』(研究代表者・編集、平成15年度～平成17年度科学研究費補助金研究成果報告書、2006年5月、184頁)、『日中戦争期の中国における社会・文化変容』(編集、東洋文庫平成18年度研究報告書、(財) 東洋文庫、2007年3月、285頁)、③「国際移動時代のナショナリズムと文化」(日本国際文化学会『インターカルチュラル』第4号、2～22頁、アカデミア出版会、2006年4月)、「グローバル化時代の地域研究—特権性の喪失」(西村成雄・田中仁編『現代中国地域研究の新たな視圏』16～29頁、世界思想社、2007年3月)、⑤「(序文) 戦争下の文化触変—抗戦と抗日—」(『日中戦争期の中国における社会・文化変容』東洋文庫平成18年度研究報告書、1～11頁、(財) 東洋文庫、2007年3月)。

弘末　雅士

③「東南アジア史研究者から見たハワイ王国」(『立教大学日本学研究所年報』No.5、74～77頁、立教大学日本学研究所、2006年4月)

廣瀬　紳一

③「東洋文庫所蔵の古地図史料について—書誌情報およびデジタルデータの作成・運用—」(『超域アジア研究報告』第3号、26～33頁、(財) 東洋文庫、2006年3月)。

深沢　眞二

③「林道春と和漢聯句」(『アジア遊学』95号、58～68頁、勉誠出版、2007年1月)。

藤田　　忠

⑧「「天子駕六」博物館訪問記」(『陝豫訪古紀行—中国陝西省・河南省地域考察旅行報告』((財) 東洋文庫、2007年2月)。

藤本　幸夫

③「朝鮮版『唐駱賓王詩集』攷」(『朝鮮学報』第119・200輯、265～290頁、朝鮮学会、2006年７月)、「日・韓両国における童蒙書について」(『修好40周年記念日韓学術交流の現状と展望』、91～97頁、2006年８月)、「朝鮮版『千字文』について」(『国語史研究は何処まで来ているか』459～471頁、延世大学校国学研究院、2006年12月)。

古屋　昭弘

②『江戸寛保元年（1741）刊「正字通作者辯」』(珂然原著、野川博之共編、中国古籍文化研究所、2007年２月、解説・訓読55頁＋影印)、③「書籍の流通と地域言語―明末清初を例として―」(『アジア地域文化学の発展』、303～324頁、雄山閣、2006年11月)、「漢字文化圏と国語」(『月刊言語』１月号、32～40頁、大修館書店、2007年１月)、「写本時代の書籍の流通と地域言語」(『中国古籍流通学の確立』、112～133頁、雄山閣、2007年３月)。

弁納　才一

③「中華民国前期中国における食糧事情の概略」(『地域総合研究』第33巻第１号、51～64頁、鹿児島国際大学附置地域総合研究所、2006年９月)、⑤「飯塚靖『中国国民政府と農村社会』」(『社会経済史学』第72巻第１号、100～102頁、社会経済史学会、2006年５月)。

堀　　敏一

⑧「記憶のなかの永原さん」(『永原慶二の歴史学』、279～280頁、吉川弘文館、2006年７月)。

堀川　　徹

④Japan and Uzbek International Project on Khiva Qadi Documents. Khorezm Ma'mun Academy and Its Role in the Development of World Science. Tashkent-Khiva, 2006. pp.70-72、⑧「ソロモンの玉座」(『地中海学会月報』291、６頁、2006年７月)

本庄比佐子

③"Introduction to Chronology of Modern Sino-Japanese Relations: 1799-1949" (Asian Research Trends New Series 2、65～75頁、2007年)、⑦「はじめに――近代中国研究と青島守備軍資料」((財) 東洋文庫秋期東洋学講座、2006年11月７日、要旨『東洋学報』88-4、45～46頁、(財) 東洋文庫、2007年３月)、

⑧「『近代日中関係史年表 1799～1949』作成の記」(『東方』304、8～12頁、東方書店、2006年6月)。

松重　充浩

③「戦前・戦中期高等商業学校のアジア調査：中国調査を中心に」(末廣昭編『岩波講座「帝国」日本の学知6　地域研究としてのアジア』岩波書店、239～282頁、2006年4月)、「張作霖奉天省政府による内モンゴル東部地域統治政策に関する覚書」(モンゴル研究所編『近現代内モンゴル東部の変容：アジア地域文化学叢書Ⅷ』雄山閣、184～199頁、2007年3月)、⑤「書評：近代日中関係史年表」(『東方』305号、30～32頁、2006年7月)、⑦「大阪経済法科大学所蔵間島資料の射程：外務省外交史料館所蔵資料との関連を中心に」(「間島資料下巻発刊記念シンポジウム：1930年前後の東北アジアと『間島資料』」、2006年9月30日、要旨『東アジア研究』47号、95～101頁、大阪経済法科大学アジア研究所、2007年3月)、「日本における中国東北地域史研究の展開と特徴：近代史(20世紀前半)部門を主要事例として」(中央研究院人文社会科学研究中心亜太区域研究専題中心主催「東亜世界中日社会的特徴国際研究研討会」、2007年3月16日)、⑧「『満洲日日新聞』(1917～1918年)モンゴル関係記事標題目録」(『近現代東北アジア地域史研究会 NEWS LETTER』18号、102～115頁、2006年12月)。

松永　泰行

①『21世紀の中東・アフリカ世界―混迷する地域の過去・現在・未来―』(芦書房、2006年10月、334頁、青木一能、六辻彰二と共著)、Struggles for Democratic Consolidation in the Islamic Republic of Iran, 1979-2004 (UMI, 2007年3月、350頁)、③「「テロ」と「対テロ」戦争による相互破壊にどう対処するか」(『グローバリゼーションの危機管理論』、315～343頁、芦書房、2006年6月)、「イランの核問題と保守派政権」(『国際問題』553、42～49頁、(財)日本国際問題研究所、2006年7月)、「ブッシュ政権の対イラン姿勢とイランの核問題、中東情勢」(『中東研究』493、42～50頁、(財)中東調査会、2006年8月)、⑦「比較視座におけるイラン国家―民主化論、世俗化論との関わりにおいて」(日本中東学会第22回年次大会、2006年5月14日)、⑧「アメリカの大学の一面を知って―プリンストン大学のイスラームの信徒のチャプレン」(『宝積』30、17～20頁、宝積比較宗教・文化研究所、2007年1月)。

松本　　弘

③「イエメン：政党政治の成立と亀裂」(間寧編『西・中央アジアにおける亀

裂構造と政治体制』JETRO アジア経済研究所、2006年、95～158頁)、「イエメンの政治変化と経済変化」(調査研究報告書(福田安志編)『湾岸、アラビア諸国における社会変容と国家・政治—イラン、GCC 諸国、イエメン—』JETRO アジア経済研究所、2007年、173～201頁)。

丸尾　常喜

③「「阿Q正伝」再考—「類型」について」(大阪市立大学中国学会『中国学志』噬嗑号、2006年12月)

三浦　　徹　イスラム都市社会史

⑤「森本芳樹著『比較史の道—ヨーロッパ中世から広い世界へ』」(『社会経済史学』vol.72, No.2、2006年7月、pp.115-117)、「近藤信彰著『19世紀テヘランの高利貸——約款売買証書をめぐって』」(『法制史研究』56、2007年3月、pp. 285-287)。

村田雄二郎

②『「婦女雑誌」総目録・索引』(東京大学『婦女雑誌』研究会発行、台湾南天書局印行、2006年11月、384頁)、③「清末民初：康有為」(平石直昭・金泰昌編『公共哲学17 知識人と公共世界』東京大学出版会、2006年3月、29～63頁)、⑥ 汪暉『思想空間としての現代中国』(砂山幸雄・小野寺史郎と共訳、岩波書店、2006年8月、326頁)。

森平　雅彦

③「朝鮮における王朝の自尊意識と国際関係—高麗の事例を中心に—」(『九州大学21世紀 COE プログラム「東アジアと日本：交流と変容」統括ワークショップ報告書』153～163頁、2007年2月)、「牒と咨のあいだ—高麗王と元中書省の往復文書—」(『史淵』第144輯、九州大学大学院人文科学研究院、2007年3月)、⑦「モンゴル襲来—そのとき、高麗の選択—」(九州大学大学院人文科学研究院(文学部)社会連携セミナーⅠ《九州と半島が交わるとき》、2006年9月23日、九州大学西新プラザ)、「高麗時代文書史料の伝存状況とその特徴」(九州史学会シンポジウム《記憶の管理と文書の伝来》、2006年12月9日、九州大学)、「朱子学の高麗伝来と元朝ケシク制」(九州史学会朝鮮学部会、2006年12月10日、九州大学)、「海上航路復元の視座—『高麗図経』を素材として—」(国際ワークショップ《朝鮮海事史の諸問題》、2007年1月7日、東京大学)、⑧「高麗」(小野正敏・佐藤信ほか編『歴史考古学大辞典』吉川弘文館、448～449頁、2007年3月)。

森安　孝夫

①『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史、第５巻、講談社、2007年２月、396頁）、④「中央アジア学の国際的な発表・交流の場」（『東方』311、14～15頁、2007年１月）、⑦「西ウイグル仏教のクロノロジー―ベゼクリク第８窟（最新編号18窟）の壁画年代再考―」（第28回中央アジア学フォーラム、大阪大学文学部第一会議室、2006年９月30日）、「モンゴル帝国出現の世界史的意義―中央ユーラシアから見る世界史―」（シンポジウム「オロンスム文書」、横浜ユーラシア文化館、2006年12月２日）、「日唐文化交流の成果より見るユーラシア世界地理と「胡」の実態」（第12回大阪大学歴史教育研究会、大阪大学文学部第一会議室、2007年１月６日）、「中央ユーラシアから世界史を再構成する試み―ユーラシア世界史から見た唐帝国―」（神奈川県高等学校教科研究会平成18（2006）年度社会科部会歴史分科会春季講演会、横浜市かながわ県民センター、2007年３月７日）。

柳田　征司

①「国語史研究のこれまでとこれから」（全国大学国語国文学会編『日本語日本文学の新たな視座』おうふう、476～484頁、2006年6月）、「二音節を単位の基本とする韻律について」（近代語学会編『近代語研究』13集、武蔵野書院、１～16頁、2006年６月）、「古代日本人の語源意識」（吉田金彦編『日本語の語源を学ぶ人のために』世界思想社、274～284頁、2006年12月）、「複合によって生じた母音連続における転成・脱落―『万葉集』巻５・15・17～20の大和の歌の場合―」（日本語語源研究会編『語源研究』45、2007年３月）、⑦「成簣堂文庫蔵『中興禅林風月集抄』」（お茶の水図書館、2006年８月31日）、「記念フォーラム：音声研究の輝かしい展開を求めて―歴史的研究からの提言―」（日本音声学会80周年記念大会、2006年９月30日）、「語源研究の過去と未来―テキスト『日本語の語源を学ぶ人のために』―出版に因んで」（司会、日本語語源研究会25周年記念大会記念シンポジウム、2006年12月10日）、⑧「新村先生と抄物」（記念文集編集委員会編『財団法人新村出記念財団設立二十五周年記念文集　泰山木』147～150頁、新村出記念財団、2006年５月）、「漢書抄」「孟子抄」「蒙求抄」「古文真宝抄」「錦繡段抄」「毛子抄・清原宣賢」「無門関抄」「中世の音韻」「濁音」「拗音」「長音」（執筆、飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺編『日本語学研究事典』明治書院、743頁、751頁、752頁、754頁、755頁、757頁、337頁、350頁、351頁、356頁、2007年1月）、「〔翻刻〕東京大学文学部国語研究室蔵『蒙求抄』（一）」（奈良大学大学院文学研究科院生、青木奈津子、熊捕つかさ、山田恭子と共編、『奈良大学大学院研究年報』

12、1～12頁、2007年3月)。

矢吹　晋

③K. Asakawa's View on History, paper presented for the Asakawa Conference at Yale University, March 9-10, 2007、⑤「モリソン文庫簡介（中文）」(『中国近現代史史料学国際学術討論論文集』魯東大学編、新華出版社、2005年11月)、「張戎夫妻『マオ』」(『中国情報源』196～229頁、蒼蒼社、2006年4月15日)、「張戎夫妻『マオの真贋を読む』」(月刊『東方』28～31頁、東方書店、2006年5月号)、「書評『周恩来秘録』『週刊読書人』2007年3月30日号」(『中国図書』読書アンケート、4頁、2007年1月)、⑥朝河貫一『大化改新 The Early Institutional Life of Japan』(柏書房、2006年7月、和文334頁、英文310頁、計644頁)、朝河貫一『比較封建制論集 The Selected Works of K. Asakawa on Comparative Feudal Systems』(柏書房、2007年2月、和文527頁、英文226頁、計753頁)、⑦「日本海海戦百周年記念歴史セミナー・世界を変えた日露戦争」「ポーツマス会議を支えた明治人」(『太平洋学会誌』2007年3月号)。⑧「米日中三角構造」(対談)(『公研』2006.04.)、「ＭＩＴ画像事件」(コラム潮流)(『毎日新聞』2006.05.25)、「失地農民救済」(コラム山陽時評)(『山陽新聞』2006.06.04)、「第11次5カ年計画」(『中国情報ハンドブック』16～41頁、蒼蒼社、2006年8月)、「胡錦濤七団体会見」(『中国情報ハンドブック』175～81頁、蒼蒼社、2006年8月)、「朝河平和学の地下水脈」(インタビュー)(『公研』38～54頁、2006年10月号)、「江沢民への宣戦布告・上海幇の崩壊」(コラム躍動アジア)(『世界週報』2006.10.10)、「六者会議復帰と中国のスタンス」(コラム潮流)(『信濃毎日新聞』2006.11.02)、「安倍訪中と胡錦濤体制」(コラム山陽時評)(『山陽新聞』2006.11.05)、「六中全会を読む」(『国際貿易』2006年10月24日)、「鄧小平路線に回帰する中国の対北朝鮮政策」(コメント)(『読売ウィークリー』2006年12月10日)、「失われた中朝の友誼」(コラム躍動アジア)(『世界週報』2007年1月2-9日号)、「上海閥退治と胡錦濤政権」(『futures market』2007年2-3月号)、「朝河貫一と小日本主義」(コラム躍動アジア)(『世界週報』2007年3月27日号)。

山内　弘一

④「朝鮮王朝後期の宗族制度の確立と祭礼説―四代奉祀と不遷の位をめぐって―(其之一)」(『漢文学　解釈与研究』第9輯、上智大学漢文学研究会、59～94頁、2006年12月)、⑦「18世紀朝鮮王朝への天主教（カトリック）伝来について―共生から弾圧へ―」(上智大学キリスト教文化・東洋宗教研究所、連続講演会、2006年6月18日、要旨『キリスト教文化・東洋宗教研究所紀要』25、上智大学、

2007年３月)、「『文公家礼』の祭礼説にみる朝鮮時代の宗族制度」(国際学術フォーラム、東アジアの文化と儀礼、関西大学アジア文化交流センター、2006年７月28日)、「栗谷思想の評価とその歴史性について」(第19回栗谷文化祭、国際学術会議、韓国坡州文化院、成均館大学校儒教文化研究所、油印物21～36頁、2006年９月29日)。

山口　瑞鳳

②『新・仏教辞典（中村元監修)』第三版（誠信書房、2006年５月、pp.686)、③「仏教の時間観から西洋哲学時間論を観る」(『思想』991、pp.91-132、岩波書店、2006年12月)、「仏説と『般若経』および唯識・中観」(『成田山仏教研究所紀要』30、pp.1-206、成田山仏教研究所、2007年２月)。

山本　英史

③「『衙蠹』のいみするもの―清初の地方統治と胥役―」(『中華帝国の中央と周辺―現代東アジアの原型を求めて―』文部科学省科学研究費補助金〔基盤研究Ｂ〕研究成果報告書、研究代表者、細谷良夫、2007年３月)、67～80頁)、「沈衍慶と『槐卿政蹟』―清末江西の知県とその判牘―」(『伝統中国の訴訟・裁判史料に関する調査研究』文部科学省科学研究費補助金〔基盤研究Ｂ〕研究成果報告書、研究代表者、三木聰、2007年３月、169～180頁)、⑦「『衙蠹』のいみするもの―清初の地方統治と胥役―」(京都大学東洋史研究会大会、2006年11月3日)、「官箴より見た地方官の民衆認識―明清時代を中心として―」(文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生―」文献資料研究部門主催国際シンポジウム「政治・制度資料における文献資料学の新たな可能性」於大阪市立大学、2007年１月８日)、⑧「朕はいつ薨しぞ？―中国年号換算の基礎知識―」(『三色旗』699号、45～48頁、慶應義塾大学通信教育部、2006年６月)。

吉田　　寅

②『宋会要輯稿　食貨索引　地名編』(中嶋敏編、東洋文庫宋史食貨志研究班、2005年６月、全179頁)、⑦「聖書中国語訳の歴史―日本語聖書との関連を視野に入れて―」(国立国会図書館、聖書研究会、2007年２月７日)。

吉田　　豊

③「ソグド語の敬語について」(白井聡子・庄垣内正弘編『中央アジア古文献の言語学的・文献学的研究』京都、81～93頁、2006年)。

吉水千鶴子

②『西蔵仏教宗義研究―トゥカン一切宗義―』（財団法人東洋文庫、2007年3月）、③"A Tibetan Buddhist Text from the Twelfth Century Unknown to Later Tibetans." Les Cahiers d'Extrême-Asie 15 (2005), (École française d' Extrême-Orient, Kyoto 2006, pp.127-164.)、「インド・チベット中観思想史の再構築にむけて―『中観明句論註釈』第1章の写本研究始動」（『哲学・思想論集』32（2006），73-114頁，筑波大学哲学・思想専攻、2007年3月）。

吉村慎太郎

③学位論文「レザー・シャー独裁と国際関係―転換期イランの政治史的研究」（一橋大学大学院言語社会研究科、2007年1月）、⑥翻訳クマーリ・ジャヤワルダネ『近代アジアのフェミニズムとナショナリズム』（中村平治監修、澤田ゆかり・吉村慎太郎・木曽順子・岩井美佐紀・大橋史恵共訳、新水社、2006年5月、342頁）；吉村訳出部分27-88頁、⑦研究発表「Reza Shah's Dictatorship and International Relations: A Study on the Political History of Iran in a Transition Period」(Iran Forum of Tel Aviv University, December 27th 2006)、⑧総説「サン・レモ会議（1920年4月）」、「イラン北部におけるギーラーン・ソヴェト共和国の成立（1920年6月）」、「レザー・ハーンの台頭とパフラヴィー朝の成立（1925年）」、「ローザンヌ条約（1923年）」、「アゼルバイジャン自治共和国とクルディスターン自治共和国の成立（1945年）（歴史学研究会編『世界史史料』第10巻、（20世紀の世界Ⅰ）、175-179、182-183、398-399頁、岩波書店、2006年12月）。

六反田　豊

③「近世日朝関係における「交流」の諸相」（『韓国朝鮮の文化と社会』5、14～36頁、韓国・朝鮮文化研究会、2006年10月）、⑤「池内敏著『大君外交と「武威」―近世日本の国際秩序と朝鮮観』」（『朝鮮史研究会会報』第165号、22～23頁、朝鮮史研究会、2006年9月）、⑦「朝鮮史からみた朝鮮時代の漂流・漂着問題」（国際ワークショップ『朝鮮海事史の諸問題』、2007年1月7日、要旨なし）。

渡辺　紘良

②『朝野類要の総合的研究』（平成17年～18年度科学研究費補助金報告書［研究者代表］、東洋文庫、2007年3月、266頁）、⑥『宋史食貨志訳註（六）』（「市易」283～374頁、「均輸」375～395頁分担執筆、中嶋敏編、東洋文庫論叢65、東洋文庫、2007年3月、646頁）。

（全199人）

Ⅳ 業 務 報 告

1．総 務 報 告

①会議事項

（理 事 会）

第331回　開催日　平成18年６月６日（火曜日）
　　出席者　斯波義信、原　啓芳、石井米雄、佐藤次高、田仲一成、鶴見尚弘、槇原　稔、若井恒雄
　　委任状　岩崎寛彌、草原克豪、中根千枝、西田龍雄、原　　實

第332回　開催日　平成18年12月５日（火曜日）
　　出席者　斯波義信、山川尚義、草原克豪、田仲一成、中根千枝、原　　實、槇原　稔、若井恒雄
　　委任状　石井米雄、岩崎寛彌、佐藤次高、鶴見尚弘、西田龍雄

（評 議 員 会）

第155回　開催日　平成18年６月６日（火曜日）
　　出席者　梅村　坦、大﨑　仁、岸本美緒、後藤　明、佐竹昭広、平野健一郎、福澤　武
　　委任状　安西祐一郎、池端雪浦、尾池和夫、小宮山宏、白井克彦濱下武志、間野英二

第156回　開催日　平成18年12月５日（火曜日）
　　出席者　梅村　坦、岸本美緒、後藤　明
　　委任状　安西祐一郎、池端雪浦、尾池和夫、小宮山宏、白井克彦、濱下武志、福澤　武、平野健一郎、間野英二

（東洋学連絡委員会）

前　　期　開催日　平成18年５月23日（火曜日）
　　出席者　斯波義信（委員長）、梅原　郁、尾崎　康、興膳　宏、中根千枝、西田龍雄、森本公誠

議　題　1．平成17年度財団法人東洋文庫事業報告について
2．平成18年度財団法人東洋文庫事業計画について
3．その他

後　　期　開催日　平成18年10月24日（火曜日）
出席者　斯波義信（委員長）、梅原　郁、興膳　宏、竺沙雅章
中根千枝、間野英二
議　題　1．平成18年度財団法人東洋文庫事業中間報告について
2．平成19年度財団法人東洋文庫事業計画案について
3．その他

②総務・広報事項
・本年度より公益法人新会計基準に基づく会計処理を行うこととなり、会計監査を監査法人トーマツに依頼することとなった。

③設備・営繕事項
・別館建物（昭和44年竣工）は現行耐震基準（昭和56年実施）を満たしていないことが判明したため、補強工事を行った。
・書庫建替えまでの応急措置として3カ年計画で仮設書架（300連）設置計画に基づき、本年度分として10月12日に60連設置。
・建物清掃・施錠解錠業務を11月から外部業者へ委託することとなった。

2．人　事　報　告

i．役員異動

年月日	役　職　名	氏　　名	区　分	備　　考
18. 6. 6	事務理事	原　　啓　芳	退　任	
〃	理　事	山　川　尚　義	就　任	
18. 7. 1	専務理事	〃	〃	

ii．職員異動

年月日	役　職　名	氏　　名	区　分	備　　考
18. 3.31	研究員	滋　賀　秀　三	退　任	
18. 4. 1	総務部長	山　川　尚　義	就　任	
〃	研究員	末　成　道　男	委　嘱	

年月日	役　職　名	氏　　名	区　分	備　　考
〃	〃	西尾寛治	委　嘱	
〃	〃	丸尾常喜	〃	
〃	〃	矢吹　晋	〃	
〃	〃	山崎元一	〃	
〃	研究員（兼任）	石井米雄	〃	
〃	〃	土田哲夫	〃	
〃	〃	籾山　明	〃	
〃	〃	柳澤　明	〃	
18. 5. 3	研究員	星実千代	逝　去	
18. 5. 4	〃	海野一隆	〃	
18. 5.31	〃	松本　明	退　職	
18. 6.30	参　事	中沢元幸	〃	
18. 7. 5	研究員	佐伯　富	逝　去	
18. 7. 9	〃	柳田節子	〃	
18. 9.13	参　事	牧　祐紀子	就　職	
18.10. 1	司　書	坂和さゆり	転　任	※
〃	〃	黒木大志郎	〃	※
〃	〃	黒木麻衣子	就　任	※
〃	〃	田中亮之介	〃	※
〃	研究員	柳谷あゆみ	委　嘱	
18.11. 1	常勤嘱託	田谷恵津子	就　職	
19. 3.31	司　書	西薗一男	退　職	※
〃	〃	牧　　武	転　任	※
〃	〃	関さやか	〃	※

（※印は国立国会図書館支部東洋文庫職員）

Ⅲ．客員研究員異動

年月日	役　職　名	氏　　名	区　分	備　　考
18. 4. 1	研究員（客員）	飯尾秀幸	委　嘱	専修大学教授
〃	〃	小島芳孝	〃	金沢学院大学教授
〃	〃	山崎元一	退　任	國學院大學元教授
18. 6. 1	〃	梅原　郁	委　嘱	就実大学教授
〃	〃	片桐一男	〃	青山学院大学名誉教授
〃	〃	鈴木博之	〃	山形短期大学講師

年月日	役　職　名	氏　　名	区　分	備　　考
18. 6. 1	研究員（客員）	延　広　真　治	委　嘱	帝京大学教授
〃	〃	藤　本　幸　夫	〃	富山大学教授
18.10. 1	〃	小　川　裕　充	〃	東大東洋文化研究所教授
〃	〃	丘　山　　新	〃	〃
〃	〃	楠　木　賢　道	〃	筑波大学助教授
〃	〃	平　勢　隆　郎	〃	東大東洋文化研究所教授
〃	〃	佐　藤　慎　一	〃	東京大学教授
〃	〃	戸　倉　英　美	〃	〃

3．会 計 報 告

貸 借 対 照 表

平成19年３月31日現在　　（単位：円）

科　　目	金　　額		
Ⅰ　資産の部			
1．流動資産			
現金預金	1,995,457		
未集金	19,718,445		
商品	2,586,287		
流動資産合計		24,300,189	
2．固定資産			
（1）基本財産			
図書資料	1,041,708,012		
土地	110,494		
建物	487,034,941		
構築物	2,689,339		
保証金	50,000		
投資有価証券	2,841,454,301		
預金	114,822		
基本財産合計	4,373,161,909		
（2）特定資産			
退職給付引当資産	54,697,345		
特定資産合計	54,697,345		
（3）その他固定資産			
什器備品	25,495,722		
図書資料	66,154,836		
ソフトウェア	3,220,753		
電話加入権	364,000		
建物等修繕引当資産	62,989,523		
運営調整積立資産	39,339,716		
その他固定資産合計	197,564,550		
固定資産合計		4,625,423,804	
資産合計			4,649,723,993
Ⅱ　負債の部			
1．流動負債			
未払金	12,420,425		
預り金	1,726,548		
賞与引当金	6,646,098		
流動負債合計		20,793,071	
2．固定負債			
退職給付引当金	54,697,345		
固定負債合計		54,697,345	
負債合計			75,490,416
Ⅲ　正味財産の部			
1．指定正味財産			
寄付金等			202,110,494
指定正味財産合計			202,110,494
（うち基本財産への充当額）			(202,110,494)
2．一般正味財産			4,372,123,083
（うち基本財産への充当額）			(4,171,051,415)
（うち特定資産への充当額）			(　　0)
正味財産合計			4,574,233,577
負債及び正味財産合計			4,649,723,993

正味財産増減計算書

平成18年4月1日から19年3月31日まで　　(単位：円)

科目	金額		
Ⅰ　一般正味財産増減の部			
1．経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産運用益	56,656,621		
特定資産運用益	53,843		
受取寄付金			
維持会費収入	35,200,000		
寄付金収入	59,445,854		
受取会費	15,000		
受取分担金	12,000,000		
事業収益	5,895,341		
受取補助金等	111,770,000		
雑収益	536,400		
経常収益計		281,573,059	
(2) 経常費用			
事業費	97,697,810		
調査研究費	26,399,004		
資料収集・整理費	18,947,182		
研究資料出版費	19,563,196		
普及活動費	14,261,133		
学術情報提供費	14,344,442		
イスラーム地域研究費	4,182,853		
管理費	157,464,465		
人件費	93,041,537		
役員報酬	14,281,818		
給料手当	58,980,116		
賞与引当金繰入	6,646,098		
退職給付費用	2,552,938		
福利厚生費	10,580,567		
事務費	64,422,928		
設備保守修繕費	21,648,221		
設備光熱費	6,768,526		
謝金	5,739,170		
減価償却費	20,600,905		
諸雑費	9,666,106		
経常費用計		255,162,275	
当期経常増減額	0		26,410,784
2．経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
固定資産受贈益	1,439,109		
過年度修正益	20,612,912		
経常外収益計		22,052,021	
(2) 経常外費用			
過年度減価償却	699,841,437		
過年度修正損	63,949,668		
経常外費用計		763,791,105	
当期経常外増減額			△741,739,084
税引前当期一般正味財産増減額			△715,328,300
法人税、住民税及び事業税	70,000		
当期一般正味財産増減額			△715,398,300
一般正味財産期首残高			5,087,521,383
一般正味財産期末残高			4,372,123,083
Ⅱ　指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額			0
指定正味財産期首残高			202,110,494
指定正味財産期末残高			202,110,494
Ⅲ　正味財産期末残高			4,574,233,577

(注) 一般正味財産期首残高には特定会計が含まれている。

財務諸表に対する注記

1．重要な会計方針

当期から「公益法人会計基準」（平成16年10月14日公益法人等の指導監督等に関する関係省庁連絡会議申合せ）を採用しております。

（1） 有価証券の評価基準及び評価方法

満期保有目的有価証券

償却原価法（定額法）を採用しております。

（2） 棚卸資産の評価基準及び評価方法

最終仕入原価法を採用しております。

（3） 固定資産の減価償却方法

① 有形固定資産

定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物　30～50年

什器備品　3～10年

② 無形固定資産

定額法を採用しております。

（4） 引当金の計上基準

① 賞与引当金

役員及び職員の賞与金の支払いに備えて、賞与支給見込額のうち当事業年度負担額を計上しております。

② 退職給付引当金

役員及び職員の退職給付に備えるため、当事業年度における退職給付債務に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。

（5） 消費税等の会計処理

税込方式を採用しております。

2．基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。

（単位：円）

科　目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
図書資料	1,041,708,012	—	—	1,041,708,012
土地	110,494	—	—	110,494
建物	1,178,912,067	—	691,877,126	487,034,941
構築物	26,893,390	—	24,204,051	2,689,339
保証金	50,000	—	—	50,000
有価証券	2,840,966,721	700,482,780	699,995,200	2,841,454,301
預金	114,822	700,000,205	700,000,205	114,822
小計	5,088,755,506	1,400,482,985	2,116,076,582	4,373,161,909
特定資産				
退職給付引当資産	75,227,627	15,450,058	35,980,340	54,697,345
小　計	75,227,627	15,450,058	35,980,340	54,697,345
合　計	5,163,983,133	1,415,933,043	2,152,056,922	4,427,859,254

3．基本財産及び特定資産の財源等の内訳

基本財産及び特定資産の財源等の内訳は、次のとおりである。　（単位：円）

科　　目	当期末残高	（うち指定正味財産からの充当額）	（うち一般正味財産からの充当額）	（うち負債に対応する額）
基本財産				
図書資料	1,041,708,012	－	(1,041,708,012)	－
土地	110,494	(110,494)		－
建物	487,034,941	－	(487,034,941)	－
構築物	2,689,339	－	(2,689,339)	－
保証金	50,000	—	(50,000)	—
有価証券	2,841,454,301	(202,000,000)	(2,639,454,301)	—
預金	114,822	—	(114,822)	—
小　計	4,373,161,909	(202,110,494)	(4,171,051,415)	—
特定資産				
退職給付引当資産	54,697,345	—	—	(54,697,345)
小　計	54,697,345	—	—	(54,697,345)
合　計	4,427,859,254	(202,110,494)	(4,171,051,415)	(54,697,345)

4．固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は、次のとおりである。

（単位：円）

科　　目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
建物	1,137,126,157	650,091,216	487,034,941
構築物	26,893,390	24,204,051	2,689,339
什器備品	71,485,700	45,989,978	25,495,722
ソフトウェア	3,377,850	157,097	3,220,753
合　　計	1,238,883,097	720,442,342	518,440,755

5．満期保有目的の債権の内訳ならびに帳簿価額、時価及び評価損益

満期保有目的の債権の内訳ならびに帳簿価額、時価及び評価損益は次のとおりである。

（単位：円）

科　　目	帳簿価額	時　　価	評価価額
国債	2,499,954	2,511,750	11,796
三菱自動車工業	298,954,347	295,500,000	△3,454,347
東京三菱インターナショナルクレジットリンク債	1,000,000,000	1,008,620,000	8,620,000
三菱セキュリティーズインタークレジットリンク債	500,000,000	498,625,000	△1,375,000
三菱信託銀行ユーロ円建永久劣後債	500,000,000	504,415,000	4,415,000
三菱ＵＦＪセキュリティーズインターナショナル	500,000,000	497,000,000	△3,000,000
共同発行市場公募地方債	40,000,000	39,707,200	△292,800
合　　計	2,841,454,301	2,846,378,950	4,924,649

6．補助金等の内訳並びに交付者、当期の増減額及び残高

補助金等の内訳並びに交付者、当期の増減額及び残高は次のとおりである。

（単位：円）

補助金等の名称	交付者	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高	貸借対照表上の記載区分
一般会計						
補助金						
科学研究費補助金（特定奨励費）	文部科学省	0	110,000,000	110,000,000	0	－
科学研究費補助金	日本学術振興会	0	1,770,000	1,770,000	0	－
合　計		0	111,770,000	111,770,000	0	

7．退職給付関係

（1）　採用している退職給付制度の概要

確定給付型の制度として退職一時金制度をもうけている。

（2）　退職給付債務及びその内訳

退職給付債務　△54,697,345円

退職給付引当金　△54,697,345

（3）　退職給付費用に関する事項

勤務費用　2,552,938円

退職給付費用　2,552,938

（4）　退職給付債務等の計算の基礎に関する事項

退職給付債務の計算に当たっては退職一時金制度に基づく期末自己都合要支給額を基礎として計算している。

8．新会計基準適用に伴う過年度減価償却及び過年度修正額の内訳

新会計基準適用に伴う過年度減価償却及び過年度修正額のおもな内訳は次のとおりである。

（単位：円）

科　目	内　訳	金　額	備　考
過年度修正益	有価証券	18,448,664	
	その他	2,164,248	
合　計		20,612,912	
過年度減価償却費	建物	634,614,831	
	構築物	24,204,051	
	什器備品	41,022,555	
合　計		699,841,437	
過年度修正損	固定資産		
	建物	14,984,000	
	什器備品	40,370,939	
	その他	8,594,729	
合　計		63,949,668	

財　産　目　録

平成19年３月31日現在　　（単価：円）

科目		金額		
（資産の部）				
Ⅰ 流動資産				
現金預金				
三菱東京ＵＦＪ銀行駒込支店普通預金		1,980,757		
郵便振替口座		14,700		
商品				
出版物等		2,586,287		
未収金				
有価証券未収利息等		19,718,445		
流動資産合計			24,300,189	
Ⅱ 固定資産				
（1）基本財産				
図書資料		1,041,708,012		
和漢書	515,330冊			
洋書	364,722冊			
複写資料	29,800点			
土地		110,494		
所在　東京都文京区本駒込２丁目28番21号				
地番　東京都文京区本駒込２丁目147番１号				
地目　宅地				
面積　3,687.63平方米				
建物		487,034,941		
所在　東京都文京区本駒込２丁目28番21号				
建物構造				
鉄筋コンクリート造				
建築面積　1,415.17平方米				
延床面積　7,141.00平方米				
空調衛生、昇降機、電気給排水等諸設備				
構築物件		2,689,339		
保証金				
日本警備保証株式会社保証金		50,000		
投資有価証券				
満期保有目的有価証券		2,841,454,301		
預金				
三菱東京ＵＦＪ銀行駒込支店普通預金		114,822		
基本財産合計		4,373,161,909		
（2）特定資産				
退職給与積立預金				
三菱東京ＵＦＪ銀行駒込支店普通預金		12,674,566		
〃　定期預金		42,000,000		
三菱ＵＦＪ信託銀行池袋支店普通預金		22,779		
特定資産合計		54,697,345		
（3）その他固定資産				
什器備品				
事務用器具等	126点	25,495,722		
図書資料		66,154,836		
和漢書	8,054冊			
洋書	12,891冊			
ﾏｲｸﾛﾌｨﾙﾑ等	251冊			
ソフトウェア	２点	3,220,753		
電話加入権	５回線	364,000		
建物等修繕積立預金				
三菱東京ＵＦＪ銀行駒込支店普通預金		22,989,523		
〃　定期預金		40,000,000		
運営調整積立預金				
三菱東京ＵＦＪ銀行駒込支店普通預金		39,339,716		
その他固定資産合計		197,564,550		
固定資産合計			4,625,423,804	
資産合計				4,649,723,993
（負債の部）				
Ⅰ 流動負債				
未払金　出版物印刷料等		12,420,425		
預り金　職員に対する給与源泉所得税等		1,726,548		
賞与引当金　役職員賞与引当額累計		6,646,098		
流動負債合計			20,793,071	
Ⅱ 固定負債				
退職給与引当金　役職員退職金引当額累計		54,697,345		
固定負債合計			54,697,345	
負債合計				75,490,416
正味財産				4,574,233,577

収　支　計　算　書

平成18年４月１日から19年３月31日まで　　（単位：円）

科　目	予算額	決算額	増　減	備考
Ⅰ　事業活動収支の部				
１．事業活動収入				
基本財産運用収入	50,000,000	74,617,705	△24,617,705	
維持会費収入	35,200,000	35,200,000	0	
寄付金収入	40,000,000	59,445,854	△19,445,854	
会費収入	0	15,000	△15,000	
分担金収入	0	12,000,000	△12,000,000	
研究活動収入	8,650,000	5,895,341	2,754,659	
補助金等収入	110,000,000	111,770,000	△1,770,000	
雑収入	250,000	477,483	△227,483	
建物等修繕積立資産取崩収入	15,000,000	0	15,000,000	
事業活動収入計	259,100,000	299,421,383	△40,321,383	
２．事業活動支出				
事業費	127,500,000	137,078,861	△9,578,861	
Ⅰ　調査研究費	29,000,000	28,194,419	805,581	
Ⅱ　資料収集・整理費	44,000,000	45,792,011	△1,792,011	
Ⅲ　研究資料出版費	20,000,000	19,563,196	436,804	
Ⅳ　普及活動費	17,000,000	16,501,434	498,566	
Ⅴ　学術情報提供費	17,500,000	15,022,781	2,477,219	
Ⅵ　イスラーム地域研究費	0	12,005,020	△12,005,020	
管理費	143,400,000	172,255,171	△28,855,171	
人件費	103,400,000	124,447,628	△21,047,628	
事務費	40,000,000	47,807,543	△7,807,543	
事業活動支出計	270,900,000	309,334,032	△38,434,032	
事業活動収支差額	△11,800,000	△9,912,649	△1,887,351	
Ⅱ　投資活動収支の部				
１．投資活動収入				
退職給付積立資産取崩収入	0	25,932,840	△25,932,840	
運営調整積立資産取崩収入	12,800,000	10,000,000	2,800,000	
投資活動収入計	12,800,000	35,932,840	△23,132,840	
２．投資活動支出				
退職給付引当資産取得支出	0	5,348,715	△5,348,715	
運営調整積立資産取得支出	0	21,000,000	△21,000,000	
投資活動支出計	0	26,348,715	△26,348,715	
投資活動収支差額	12,800,000	9,584,125	3,215,875	
Ⅲ　財務活動収支の部				
１．財務活動収入	0	0	0	
２．財務活動支出	0	0		
財務活動収支差額	0	0	0	
Ⅳ　予備費支出	1,000,000	0	1,000,000	
当期収支差額	0	△328,524	328,524	
前期繰越収支差額	0	1,249,355	△1,249,355	
次期繰越収支差額	0	920,831	△920,831	

収支計算書に対する注記

1．資金の範囲

資金の範囲には、現金預金、未収金、未払金、預り金、賞与引当金を含めている。

なお、前期末残高及び当期末残高は、下記2に記載するとおりである。

2．次期繰越収支差額に含まれる資産及び負債の内訳　　（単位：円）

科　　目	前期末残高	当期末残高
現金預金	2,488,525	1,995,457
未収金	199,176	19,718,445
合　　計	2,687,701	21,713,902
未払金	297,185	12,420,425
預り金	1,141,161	1,726,548
賞与引当金	0	6,646,098
合　　計	1,438,346	20,793,071
次期繰越収支差額	1,249,355	920,831

（注）前期末残高には特定会計が含まれている。

V 役職員名簿

平成19年3月31日現在の財団法人東洋文庫の役職員は、以下のとおりである。

1．役員

役職名	氏名	現職
理事長	斯波義信	東洋文庫理事長 日本学士院会員 大阪大学名誉教授
専務理事	山川尚義	東洋文庫専務理事
理事	石井米雄	大学共同利用機関法人人間文化研究機構機構長 京都大学名誉教授
〃	岩崎寛彌	東山農事株式会社社長
〃	草原克豪	拓殖大学副学長
〃	佐藤次高	早稲田大学教授 東京大学名誉教授
〃	田仲一成	日本学士院会員 東京大学名誉教授
〃	鶴見尚弘	山梨県立女子短期大学学長 横浜国立大学名誉教授
〃	中根千枝	日本学士院会員 東京大学名誉教授
〃	西田龍雄	日本学士院会員 京都大学名誉教授
〃	原實	国際仏教学大学院大学理事長 日本学士院会員
〃	槙原稔	三菱商事株式会社相談役
〃	若井恒雄	株式会社東京三菱銀行特別顧問
監事	岡野理一郎	東洋文庫監事
〃	東條和彦	三菱金曜会事務局長

2．評議員

役職名	氏　　名	現　　職
評議員	安西祐一郎	慶応義塾塾長
〃	池端雪浦	東京外国語大学学長
〃	梅村　坦	中央大学教授
〃	尾池和夫	京都大学学長
〃	大﨑　仁	大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事
〃	岸本美緒	東京大学教授
〃	後藤　明	東洋大学教授
		東京大学名誉教授
〃	小宮山　宏	東京大学学長
〃	佐竹昭広	京都大学名誉教授
〃	白井克彦	早稲田大学総長
〃	濱下武志	龍谷大学教授
〃	平野健一郎	早稲田大学教授
〃	福澤　武	三菱地所株式会社取締役会長
〃	間野英二	京都大学名誉教授

3．東洋学連絡委員会委員

役職名	氏　　名	現　　職
委員長	斯波義信	東洋文庫理事長
委　員	石井米雄	大学共同利用機関法人人間文化研究機構機構長
		京都大学名誉教授
〃	梅原　郁	就実大学教授
		京都大学名誉教授
〃	尾崎　康	慶應義塾大学名誉教授
〃	興善　宏	京都大学名誉教授
〃	竺沙雅章	京都大学名誉教授
〃	中根千枝	日本学士院会員
		東京大学名誉教授
〃	西田龍雄	日本学士院会員
		京都大学名誉教授
〃	間野英二	京都大学名誉教授
〃	御牧克己	京都大学教授
〃	森本公誠	東大寺別当

4．名誉研究員

氏　　名	所　属　機　関
李　伯　重	精華大学人文社会科学学院経済学研究所
黄　寛　重	中央研究院歴史語言研究所
韓　永　愚	ソウル大学
BARY. W. T. de	Columbia University
FRANKE, H.	Ludwig-Maximilians-Universitat Munchen
GERNET, J.	Universite de Paris Ⅶ
McDERMOTT, JosephP.	St.John's college, Cambridge University
BLUSSE, Leonard	Universite Leiden
ELVIN, Mark	The Australian National University
GUNGWU, Wang	National University of Singapore
KYCHANOV, E.I.	Saint-Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies of Russian Academy of Sciences
SAHIN, Ilhan	Kirgizistan-Turkiye Manas Universitiesi
RAFEQ, Abdul-Karim	The College of William and Mary Department of History
KADIVAR, Mohsen	Tarbiat Modarres University
HUMPHREYS, R.Stephrn	University of California
LANCIOTTI, Lionelio	University of Naples

5．職員・研究員

（平成18年３月31日現在）

部名	職名	氏名	現職 （※印は国立国会図書館支部東洋文庫職員）
総務部	部長	山川尚義	（専務理事兼務）
〃	課長	光田憲雄	
〃	参事	橘伸子	
〃	〃	藤村由美子	
〃	〃	柴代淳子	
〃	〃	牧祐紀子	
〃	〃	長谷川茂広	
図書部	部長	田仲一成	
〃	東洋文庫長	渡辺幸秀	※
〃	文庫長補佐	西薗一男	※
〃	閲覧係長	中善寺慎	※
〃	副主査	牧武	※
〃	司書	桜井徹	
〃	〃	山村義照	
〃	〃	沢崎京子	※
〃	〃	篠崎陽子	
〃	〃	関さやか	※
〃	〃	田中亮之介	※
〃	〃	黒木麻衣子	※
研究部	部長	佐藤次高	早稲田大学教授
〃	研究顧問	石井米雄	大学共同利用機関法人人間文化研究機構機構長
〃	研究員	荒松雄	東京大学名誉教授
〃	〃	磯貝健一	大手前大学講師
〃	〃	市古宙三	お茶の水女子大学名誉教授
〃	〃	宇都木章	青山学院大学名誉教授
〃	〃	衞藤瀋吉	東京大学名誉教授
〃	〃	大江孝男	東京外国語大学名誉教授
〃	〃	太田幸男	東京学芸大学名誉教授
〃	〃	岡田英弘	東京外国語大学名誉教授
〃	〃	風間喜代三	東京大学名誉教授
〃	〃	粕谷元	日本大学講師

部　名	職　　名	氏　　名	現　　職
研究部	研　究　員	菊　池　英　夫	中央大学元教授
〃	〃	草　野　　靖	熊本大学元教授
〃	〃	酒　井　憲　二	調布学園短期大学名誉教授
〃	〃	佐　竹　昭　広	京都大学名誉教授
〃	〃	塩　沢　裕　仁	法政大学講師
〃	〃	斯　波　義　信	東洋文庫理事長
〃	〃	志　茂　碩　敏	東洋文庫研究員
〃	〃	末　成　道　男	東洋文庫研究員
〃	〃	瀧　下　彩　子	東洋文庫研究員
〃	〃	田　仲　一　成	東京大学名誉教授
〃	〃	田　中　時　彦	東海大学名誉教授
〃	〃	田　村　晃　一	青山学院大学名誉教授
〃	〃	竺　沙　雅　章	京都大学名誉教授
〃	〃	千　葉　　巽	桐朋学園大学名誉理事長
〃	〃	土　肥　義　和	国学院大学名誉教授
〃	〃	鳥　海　　靖	東京大学名誉教授
〃	〃	中　嶋　　敏	東京教育大学名誉教授
〃	〃	永　積　洋　子	東京大学元教授
〃	〃	西　尾　寛　治	立教大学非常勤講師
〃	〃	西　田　龍　雄	京都大学名誉教授
〃	〃	長谷川　誠　夫	千葉工業大学講師
〃	〃	濱　島　敦　俊	暨南国際大学教授
〃	〃	堀　　敏　一	明治大学名誉教授
〃	〃	本　庄　比佐子	東洋文庫研究員
〃	〃	松　永　泰　行	同志社大学一神教学際研究センター客員フェロー
〃	〃	松　丸　道　雄	東京大学名誉教授
〃	〃	松　村　　潤	日本大学名誉教授
〃	〃	丸　尾　常　喜	東洋文庫研究員
〃	〃	矢　沢　利　彦	埼玉大学名誉教授
〃	〃	柳　田　節　子	学習院大学元教授
〃	〃	柳　谷　あ　ゆ　み	イスラーム地域研究資料室研究員
〃	〃	矢　吹　　晋	横浜市立大学名誉教授
〃	〃	山　口　瑞　鳳	東京大学名誉教授

部　名	職　　名	氏　　名	現　　職
研究部	研　究　員	山　崎　元　一	東洋文庫研究員
〃	〃	吉　田　　寅	立正大学元教授
〃	〃	和　田　博　徳	慶應義塾大学名誉教授
〃	〃	渡　辺　紘　良	獨協医科大学名誉教授
〃	研究員(兼任)	飯　島　武　次	駒沢大学教授
〃	〃	石　橋　崇　雄	国士舘大学教授
〃	〃	内　山　雅　生	宇都宮大学教授
〃	〃	梅　村　　坦	中央大学教授
〃	〃	小　名　康　之	青山学院大学教授
〃	〃	糟　谷　憲　一	一橋大学教授
〃	〃	加　藤　直　人	日本大学教授
〃	〃	川　崎　信　定	東洋大学教授
〃	〃	岸　本　美　緒	東京大学教授
〃	〃	窪　添　慶　文	お茶の水女子大学教授
〃	〃	後　藤　　明	東洋大学教授
〃	〃	小　松　久　男	東京大学教授
〃	〃	鈴　木　立　子	愛知大学教授
〃	〃	C.A.ダニエルス	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
〃	〃	土　田　哲　夫	中央大学教授
〃	〃	中　兼　和津次	青山学院大学教授
〃	〃	長　沢　栄　治	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	永　田　雄　三	明治大学教授
〃	〃	中　見　立　夫	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
〃	〃	八尾師　　誠	東京外国語大学教授
〃	〃	濱　下　武　志	京都大学東南アジア研究センター教授
〃	〃	林　　佳世子	東京外国語大学教授
〃	〃	平　野　健一郎	早稲田大学教授
〃	〃	弘　末　雅　士	立教大学教授
〃	〃	深　沢　眞　二	和光大学助教授
〃	〃	古　屋　昭　弘	早稲田大学教授
〃	〃	三　浦　　徹	お茶の水女子大学教授
〃	〃	御　牧　克　己	京都大学教授

部　名	職　　名	氏　　名	現　　職
研究部	研究員(兼任)	毛　里　和　子	早稲田大学教授
〃	〃	籾　山　　明	駒澤大学教授
〃	〃	柳　澤　　明	大学共同利用機関法人人間文化研究機構
〃	〃	吉　田　光　男	東京大学教授
〃	常勤嘱託	田　谷　恵津子	

6．客員研究員

部　名	職　　名	氏　　名	現　　職
研究部	研究員(客員)	青　山　瑠　妙	早稲田大学助教授
〃	〃	浅　野　秀　剛	千葉市美術館学芸課長
〃	〃	天　児　　慧	早稲田大学教授
〃	〃	新　井　政　美	東京外国語大学教授
〃	〃	荒　川　正　晴	大阪大学教授
〃	〃	飯　尾　秀　幸	専修大学教授
〃	〃	池　田　　温	創価大学特任教授
〃	〃	池　田　美佐子	光陵女子短期大学教授
〃	〃	伊　香　俊　哉	都留文科大学教授
〃	〃	石　塚　晴　通	北海道大学教授
〃	〃	井　上　和　枝	鹿児島国際大学教授
〃	〃	井　上　和　人	奈良文化財研究所室長
〃	〃	今　西　祐一郎	九州大学教授
〃	〃	上　野　英　二	成城大学教授
〃	〃	内　田　知　行	大東文化大学教授
〃	〃	梅　田　博　之	麗澤大学教授
〃	〃	梅　原　　郁	就実大学教授
〃	〃	大河原　知　樹	東北大学助教授
〃	〃	大　澤　正　昭	上智大学教授
〃	〃	太　田　信　宏	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
〃	〃	大　谷　俊　太	奈良女子大学教授
〃	〃	丘　山　　新	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	小　川　裕　充	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	奥　村　　哲	首都大学東京教授
〃	〃	片　桐　一　男	青山学院大学名誉教授

部　名	職　　名	氏　　名	現　　職
研究部	研究員(客員)	片　山　章　雄	東海大学教授
〃	〃	加　藤　弘　之	神戸大学教授
〃	〃	金　丸　裕　一	立命館大学教授
〃	〃	辛　島　　昇	大正大学特遇教授
〃	〃	川　井　伸　一	愛知大学教授
〃	〃	川　島　　真	北海道大学助教授
〃	〃	貴　志　俊　彦	島根県立大学助教授
〃	〃	北　本　朝　展	国立情報学研究所助教授
〃	〃	金　　鳳　珍	北九州市立大学教授
〃	〃	楠　木　賢　道	筑波大学助教授
〃	〃	久　保　　亨	信州大学教授
〃	〃	熊　本　　裕	東京大学教授
〃	〃	黒　田　　卓	東北大学助教授
〃	〃	気賀澤　保　規	明治大学教授
〃	〃	厳　　善　平	桃山学院大学教授
〃	〃	胡　　潔	名古屋大学助教授
〃	〃	黄　　東　蘭	愛知県立大学助教授
〃	〃	興　梠　一　郎	神田外語大学助教授
〃	〃	小　島　芳　孝	金沢学院大学教授
〃	〃	小　杉　　泰	京都大学教授
〃	〃	小　浜　正　子	日本大学教授
〃	〃	斉藤真麻里	文化研究資料館助教授
〃	〃	早乙女　雅　博	東京大学助教授
〃	〃	桜　井　由躬雄	東京大学教授
〃	〃	佐　藤　慎　一	東京大学教授
〃	〃	佐　藤　　宏	一橋大学教授
〃	〃	設　楽　国　広	立教大学教授
〃	〃	蔀　　勇　造	東京大学教授
〃	〃	嶋　尾　　稔	慶応義塾大学助教授
〃	〃	清　水　宏　祐	九州大学教授
〃	〃	清　水　信　行	青山学院大学教授
〃	〃	庄垣内　正　弘	京都大学教授
〃	〃	新　免　　康	中央大学教授
〃	〃	須　川　英　徳	横浜国立大学元教授

部　名	職　　名	氏　　名	現　　職
研究部	研究員(客員)	杉　山　正　明	京都大学教授
〃	〃	鈴　木　　均	アジア経済研究所国際関係・紛争研究グループ長代理
〃	〃	鈴　木　博　之	山形短期大学講師
〃	〃	砂　山　幸　雄	愛知大学教授
〃	〃	妹　尾　達　彦	中央大学教授
〃	〃	関　尾　史　郎	新潟大学教授
〃	〃	関　本　照　夫	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	曽　田　三　郎	広島大学教授
〃	〃	高　田　幸　男	明治大学助教授
〃	〃	武　田　幸　男	岐阜聖徳学園大学教授
〃	〃	田　嶋　俊　雄	東京大学社会科学研究所教授
〃	〃	立　川　武　蔵	愛知学院大学教授
〃	〃	田　中　明　彦	東京大学東洋文化研究所所長
〃	〃	辻　本　裕　成	南山大学助教授
〃	〃	鶴　見　尚　弘	山梨県立大学学長
〃	〃	寺　田　浩　明	京都大学教授
〃	〃	唐　　亮	横浜市立大学準教授
〃	〃	戸　倉　英　美	東京大学教授
〃	〃	朽　尾　　武	成城大学教授
〃	〃	富　澤　芳　亜	島根大学助教授
〃	〃	並　木　頼　寿	東京大学教授
〃	〃	延　廣　真　治	帝京大学教授
〃	〃	萩　田　　博	東京外国語大学助教授
〃	〃	花　田　宇　秋	明治学院大学教授
〃	〃	濱　田　正　美	京都大学教授
〃	〃	林　　俊　雄	創価大学教授
〃	〃	原　　實	国際仏教学大学院大学附置研究所所長
〃	〃	平　勢　隆　郎	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	平　野　　聡	東京大学助教授
〃	〃	広　瀬　紳　一	A. T Kearney. Principal
〃	〃	藤　田　　忠	国士舘大学教授
〃	〃	藤　本　幸　夫	富山大学教授
〃	〃	古　田　和　子	慶応義塾大学教授

部　名	職　　名	氏　　名	現　　職
研究部	研究員(客員)	弁　納　才　一	金沢大学教授
〃	〃	細　谷　良　夫	東北学院大学教授
〃	〃	堀　川　　徹	京都外国語大学教授
〃	〃	松　重　光　浩	日本大学教授
〃	〃	松　涛　誠　達	大正大学特遇教授
〃	〃	松　本　　弘	大東文化大学助教授
〃	〃	丸　川　知　雄	東京大学助教授
〃	〃	水　野　善　文	東京外国語大学助教授
〃	〃	三　谷　　孝	一橋大学教授
〃	〃	宮　崎　修　多	成城大学教授
〃	〃	村　井　章　介	東京大学教授
〃	〃	村　田　雄二郎	東京大学教授
〃	〃	森　平　雅　彦	九州大学講師
〃	〃	森　安　孝　夫	大阪大学教授
〃	〃	柳　田　征　司	奈良大学教授
〃	〃	山　内　弘　一	上智大学教授
〃	〃	山　内　民　博	新潟大学助教授
〃	〃	山　本　英　史	慶応義塾大学教授
〃	〃	山　本　毅　雄	国立情報学研究所教授
〃	〃	吉　田　伸　之	東京大学教授
〃	〃	吉　田　　豊	神戸市外国語大学教授
〃	〃	吉　水　千鶴子	筑波大学講師
〃	〃	吉　村　慎太郎	広島大学助教授
〃	〃	六反田　　豊	東京大学助教授
〃	〃	和　田　恭　幸	龍谷大学助教授

財団法人 東洋文庫年報 平成18年度

平成19年12月26日　発行
発行者　東京都文京区本駒込２丁目28番21号
財団法人 東洋文庫
槇原　稔
印刷者　富士リプロ株式会社
発行所　東京都文京区本駒込２丁目28番21号
財団法人 東洋文庫

本書は財団法人東洋文庫に対する平成19年度文部科学省補助金の一部によって刊行されたものである。